

令和3年度

学校安全(防災)総合支援事業 実践事例集



令和4年3月

兵庫県教育委員会事務局教育企画課

は じ め に

新型コロナウイルス感染症の流行が社会に大きな影響を及ぼし、私たちの生活や教育活動を取り巻く環境が大きく変わりました。そのような中でも、未来を担う子どもたちが自らの生命を守ることができる力を育成するため、阪神・淡路大震災の教訓を風化させない実践的な防災教育を展開するとともに、校内研修会等を通じた学校防災体制の充実、地域や専門機関等と連携した防災訓練の実施、避難所開設への円滑な対応等について取り組んでいく必要があります。

本県では、平成 24 年度より文部科学省委託事業である「実践的防災教育総合支援事業」において、防災教育推進校及び学校防災体制推進校を指定し、高校生が自分たちの地域における防災リーダーとしての意識を高め、支援者としての視点から安全で安心な地域づくりに貢献しようとする意識を高める教育を推進するとともに、専門家の助言を受けてマニュアルや避難訓練について見直しを行うことにより児童生徒等の安全確保に向けた学校の防災体制の一層の充実を図ってきました。

令和元年度からは「学校安全（防災）総合支援事業」として、さらに防災教育授業実践推進校を指定し、学校防災アドバイザー及び震災・学校支援チーム (EARTH) 員を活用しながら発達段階に応じたカリキュラムの検討や授業実践を行うことにより教職員の指導力の向上と児童生徒の実践的な力の育成を図ってきました。

○ 防災教育推進校

高校生等防災ジュニアリーダーの育成を図るとともに、被災地での支援活動を各校における地域防災活動等にいかす。

○ 学校防災体制推進校

学校防災アドバイザー（外部有識者）の指導や助言を活用し、教職員の危機管理意識や判断力の向上など学校の防災体制の一層の充実を図る。

○ 防災教育授業実践推進校

学校防災アドバイザー（外部有識者）の指導や助言を活用し、教職員の授業実践力を向上し、児童生徒の防災・減災意識の高揚及び防災に関する実践力を高めるなど、防災教育の充実を図る。

○ 気象災害モデル校

児童生徒や教職員にとって身近な気象の専門家を活用し、「備える意識」の向上を図ることにより、近年多発する気象災害に対する防災教育及び防災体制の構築へつなげる。

令和 3 年度は防災教育推進校 22 校、学校防災体制推進校 18 校、防災教育授業実践推進校 6 校に加えて、近年多発する水害等の気象災害に対する備えを充実するため、新たに気象災害モデル校 2 校を指定するとともに、22 名の学校防災アドバイザーを委嘱し、各モデル地域において先進的な取組を進めてきました。

本書は、各推進校の取組の成果や実践事例をまとめ、普及することにより、県内公立学校における防災教育の充実や学校防災体制の構築へつなげることを目的に作成しました。各学校における取組の一助としていただきながら、地域の災害特性を踏まえた防災教育が推進されるとともに、学校組織の実践力の向上が図られ、地震や津波、気象災害等の様々な自然災害から児童生徒が自らの生命を守るため主体的に行動する力が育成されることを期待します。

最後になりましたが、素晴らしい防災教育の取組を実践いただいた各推進校の先生方、ご指導・ご助言いただいた学校防災アドバイザーの皆様に深く感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月

兵庫県教育委員会

目 次

1	令和3年度学校安全（防災）総合支援事業	3
(1)	実施要項	4
(2)	防災教育推進校活動要領（改訂版）	7
(3)	学校防災体制・防災教育授業実践推進校活動要領	9
(4)	気象災害モデル校活動要領	10
2	令和3年度推進校一覧	11
	推進校一覧	12
3	推進校の実践	13
(1)	防災教育推進校（主管校）	
	・ 県立舞子高等学校	14
	・ 県立西脇北高等学校	18
(2)	学校防災体制推進校	
	・ 県立東灘高等学校	22
	・ 県立須磨友が丘高等学校	24
	・ 県立尼崎小田高等学校	26
	・ 県立西宮今津高等学校	28
	・ 県立北摂三田高等学校	30
	・ 県立東播磨高等学校	32
	・ 県立姫路商業高等学校	34
	・ 尼崎市立わかば西小学校	36
	・ 猪名川町立松尾台小学校	38
	・ 播磨町立播磨中学校	40
	・ 小野市立大部小学校	42
	・ 神河町立寺前小学校	44
	・ 赤穂市立坂越小学校	46
	・ 香美町立奥佐津小学校	48
	・ 新温泉町立浜坂東小学校	50
	・ 丹波篠山市立西紀北小学校	52
	・ 洲本市立洲浜中学校	54
	・ 淡路市立学習小学校	56
(3)	防災教育授業実践推進校	
	・ 宝塚市立長尾台小学校	58
	・ 明石市立大久保北中学校	61
	・ 姫路市立増位小学校	64
	・ 朝来市立竹田小学校	67
	・ 丹波市立鴨庄小学校	70
	・ 南あわじ市立沼島小学校	73
(4)	気象災害モデル校	
	・ 豊岡市立新田小学校	76
	・ 養父市立八鹿青溪中学校	79
4	資料	82
	防災マップ（洲本市立州浜中学校）	83
	小学校低学年学習指導案（丹波市立鴨庄小学校）	84
	小学校中学年学習指導案（朝来市立竹田小学校）	86
	小学校高学年学習指導案（姫路市立増位小学校）	88
	中学校学習指導案（明石市立大久保北中学校）	91

1 令和3年度 学校安全（防災）総合支援事業



南あわじ市立沼島小学校

令和3年度 学校安全（防災）総合支援事業 実施要項

1 趣旨

兵庫県では、阪神・淡路大震災の経験を教育に生かすべく、児童生徒に自らの生命を守る力を身に付けさせる従来の安全教育に加え、助け合いやボランティア精神など「共生」の心を育み、人間としての在り方生き方を考えさせる「兵庫の防災教育」を推進するとともに、その発信に努めてきた。

また、東日本大震災等を受けて、今後の防災教育や防災体制の充実のための要点として、自らの命を守り抜くため「主体的に行動する態度」の育成、支援者となる視点から、安全で安心な社会づくりに貢献する意識の向上などが必要であると指摘されている。

そこで、文部科学省委託事業「学校安全総合支援事業」を活用し、学校防災に関する推進校を指定して、安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育を推進するとともに、学校防災体制と防災教育の充実を図り、その成果を普及することを通じて、兵庫の防災教育の一層の充実に資する。

2 事業内容等

県教育委員会が推進校を指定し、推進校において、防災教育の年間計画の中に下記の内容を位置付けて防災教育を推進するとともに防災体制の充実を図り、その実践から得た成果を普及する。

(1) 安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育の推進 ＜防災教育推進校の指定＞

防災教育推進校において、高校生等防災ジュニアリーダー学習会や被災地でのボランティア活動等により、支援者としての視点から安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育を推進する。

活 動	内 容
① 高校生等防災ジュニアリーダー学習会	防災リーダーとしての活動等を学ぶ学習会
② 被災地でのボランティア活動	被災地でのボランティア活動
③ 高校生等防災ジュニアリーダー活動報告会	各校でのボランティア活動等の取組の発表会

(2) 学校防災体制の充実 ＜学校防災体制推進校の指定＞

外部有識者の助言を受けて災害対応マニュアルや避難訓練の内容について見直しを行い、教職員の危機管理意識の向上を図る研修会の在り方を検討し実施するなど、学校の防災体制の一層の充実を図る。

(3) 防災教育の充実 ＜防災教育授業実践推進校の指定＞

外部有識者や震災・学校支援チーム（EARTH）員の助言を受けて、発達段階に応じたカリキュラムの検討、授業における学習教材や学習指導案を作成し、授業実践を行うことで、教職員の指導力の向上を図り、児童生徒へのより実践的な力の育成を図るとともに、防災に関する学習教材、学習指導案等について共有を図り兵庫の防災教育の一層の充実を図る。

(4) 気象災害に対する防災教育・防災体制の充実 ＜気象災害モデル校の指定＞

児童生徒や教職員にとって身近な気象の専門家を活用し、「備える意識」の向上を図ることにより、近年多発する気象災害に対する防災教育の推進及び防災体制の構築へ繋げる。

(5) 地区別防災教育研修会での成果報告及び普及

県教育委員会が開催する防災教育研修会において、(1)～(4)の成果報告及び取組の普及を行う。

(6) 実践事例集による成果報告及び普及

推進校の取組をまとめた実践事例集を作成し、配布することにより、(2)～(4)の成果報告及び普及を行う。

3 推進校での取組

(1) 推進校は、校内における防災に関する推進体制を整備し、計画的に事業を進める。

(2) 防災教育推進校

- 県教育委員会が主催する高校生等防災ジュニアリーダー学習会に、生徒・教員が参加し、地域の防災リーダーとしての活動を学ぶ。
- 高校生等防災ジュニアリーダー学習会に参加した生徒のうち、希望者は、県教育委員会が主催する被災地でのボランティア活動に参加する。
- 推進校において、学習会及び被災地でのボランティア活動の報告会等を実施する。
- 県教育委員会が主催する高校生等防災ジュニアリーダー活動報告会に、生徒・教員が参加し、推進校での取組について発信する。

- ・ 上記の活動を通じて、生徒が支援者としての視点から安全・安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育を推進する。
 - ・ 推進校の担当者は防災教育推進校連絡会に参加し、活動内容について連絡・調整を行う。
- (3) 学校防災体制推進校
- ・ 県教育委員会から派遣する学校防災アドバイザーを活用し、災害対応マニュアルや避難訓練等を見直し、児童生徒等の安全確保に向けた体制の改善を図る。
- (4) 防災教育授業実践推進校
- ・ 県教育委員会から派遣する学校防災アドバイザー及び震災・学校支援チーム(EARTH)員を活用し、発達段階に応じたカリキュラムの検討、授業における学習教材や学習指導案を作成し、授業実践を行うことで、教職員の指導力の向上と児童生徒の実践的な力の育成を図るなど、防災教育の改善を図る。
- (5) 気象災害モデル校
- ・ 児童生徒が身近に感じ、影響力のある専門家を招いた講演会を児童生徒及び保護者を対象に開催し、気象災害に対する意識の向上と正しい理解を図る。また、専門家からの助言をもとに、防災教育及び防災体制について改善を図る。
- (6) 地区別防災教育研修会等で(2)～(5)の実践を発表する。

4 推進校の指定について

(1) 防災教育推進校

県立高等学校等 30 校程度を指定する。但し、市町組合立中学校及び市立義務教育学校（後期課程）、市立高等学校、市立特別支援学校（中学部、高等部）で希望がある場合は、推進校希望調書等をもとに県教育委員会が決定する。なお、県教育委員会は推進校の中から主管校を指定するものとする。

(2) 学校防災体制推進校

県内公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校から 24 校程度を指定する。（神戸市立学校を除く）

※ 希望多数の場合は、推進校希望調書等をもとに予算の範囲内で県教育委員会が選考の上、決定する。

(3) 防災教育授業実践推進校

県内公立小学校、中学校、義務教育学校から 6 校程度を指定する。（神戸市立学校を除く）

※ 希望多数の場合は、推進校希望調書等をもとに予算の範囲内で県教育委員会が選考の上、決定する。

(4) 気象災害モデル校

但馬地区公立小学校、中学校、義務教育学校から 2 校程度を指定する。

※ 希望多数の場合は、推進校希望調書等をもとに予算の範囲内で県教育委員会が選考の上、決定する。

5 推進校指定期間

推進校の指定を受けた日から令和 4 年 2 月末まで

6 予算について

県教育委員会は、事業実施に要する以下の費用を負担する。

(1) 安全で安心な社会づくりに貢献する教育の推進

① 高校生等防災ジュニアリーダー学習会

引率する教員の旅費

② 被災地でのボランティア活動

引率する教員の旅費及び宿泊費

③ 高校生等防災ジュニアリーダー活動報告会

引率する教員の旅費

※ ①②の引率者は、県が指定するバス乗降地から借上げバスに同乗するものとする。（バス乗降地は、推進校決定後に連絡する。）

※ 各校引率する教員 1 名分を県教育委員会が負担する（主管校を除く）。但し②については、県教育委員会が引率者を決定する。

(2) 学校防災体制・防災教育の充実

学校防災体制推進校、防災教育授業実践推進校及び防災教育研修会に派遣する学校防災アドバイザーの謝金・旅費等及び震災・学校支援チーム（EARTH）員の旅費等

(3) 気象災害に対する防災教育・防災体制の充実

気象災害モデル校に派遣する専門家の謝金・旅費及び消耗品費等

7 その他

(1) 県教育委員会は、推進校による本事業の実施が当該趣旨に反すると認められるときは、必要な是正措置を講じることができる。

(2) 県教育委員会は、本事業の実施にあたり、推進校の求めに応じて指導・助言を行うとともに、その効果的な運営を図るため協力する。

(3) 学校防災アドバイザー及び震災・学校支援チーム（EARTH）員については、県教育委員会が派遣する。

令和3年度 学校安全（防災）総合支援事業 防災教育推進校活動要領（改訂版）

1 推進校指定について

事業実施の希望のあった県立高等学校等から、県教育委員会において30校程度を推進校として指定する。

2 活動について

次の(1)～(5)の活動を通じて、安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育の推進を図るものとする。

(1) 高校生等防災ジュニアリーダー学習会への参加

地域の防災リーダーやボランティアリーダーとしての活動等を学ぶ学習会へ生徒を参加させ、地域防災、ボランティアに関する意識を高める。

防災教育推進校は【神戸・淡路会場】又は【西脇会場】のいずれかの学習会に原則参加することとする。（どちらの学習会へ参加するかは、県教育委員会が決定する。）

① 神戸・淡路会場

ア 実施期間

令和3年7月21日（水）～23日（金）（日帰り3日（うち1日は任意））

イ 会場

兵庫県広域防災センター（三木市志染町御坂1-19）

兵庫県民会館（神戸市中央区下山手通4-16-3）

野島断層保存北淡震災記念公園（淡路市小倉177）

ウ 参加者数

1校あたり3名程度

エ 交通手段

県教育委員会が準備する借上バスでの移動、公共交通機関

オ 実施内容

ボランティア講話、ワークショップ、課題学習 等

② 西脇会場

ア 実施期間

令和3年7月27日（火）～28日（水）（日帰り2日）

イ 会場

阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター（神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2）

ウ 参加者数

1校あたり3名程度

エ 交通手段

公共交通機関

オ 実施内容

ボランティア講話、ワークショップ、課題学習 等

(2) 被災地でのボランティア活動の参加

上記(1)の学習会に参加した生徒のうち、希望者を次の内容等による被災地でのボランティア活動に参加させる。

ア 実施期間

令和3年8月8日（日）～11日（水）

（被災地での活動2日間を含む3泊4日を予定）

イ 実施場所

宮城県

ウ 参加者数

1校あたり2名程度（但し、参加校多数の場合はその限りではない。）

エ 交通手段

県教育委員会が準備する借上バスでの移動

オ 活動内容

仮設住宅訪問など被災地ボランティアセンターと連携し、現地の要望に沿った活動を行う。また、被災者による講演や、現地高校生との交流会に参加する。

(3) 防災教育推進校での報告会の実施

防災教育推進校は、各校において高校生等防災ジュニアリーダー学習会や被災地でのボランティア活動に参加した生徒の活動報告会等を実施し、学校全体で防災意識やボランティア意識を高める取組を実施する。

(4) 防災教育推進校におけるボランティア活動等の推進

被災地でのボランティア活動だけに留まらず、防災教育推進校において高校生等防災ジュニアリーダー学習会や被災地でのボランティア活動の学習成果を活かし、新型コロナウイルス感染予防に努めた上で可能な限り地域のボランティア活動に参加する等、生徒のボランティア意識等を高める取組を実施する。

(5) 高校生等防災ジュニアリーダー活動報告会への参加

防災教育推進校は、(1)～(4)の取組についての活動報告会に参加し、各防災教育推進校でのボランティア活動等の取組について発表し、他校と情報共有することを通して、更に生徒のボランティア意識を高め、自校の防災教育の充実を図る。

令和3年度 学校安全（防災）総合支援事業 学校防災体制・防災教育授業実践推進校 活動要領

1 推進校指定について

(1) 学校防災体制推進校

事業実施の希望のあった県立学校及び市町組合立学校から、県教育委員会において県内公立学校24校程度を推進校として指定する。

(2) 防災教育授業実践推進校

事業実施の希望のあった市町組合立学校から、県教育委員会において県内公立小、中、義務教育学校6校程度を推進校として指定する。

2 活動について

(1) 学校防災体制推進校

県教育委員会が派遣する学校防災アドバイザー（外部有識者）の指導や助言を活用し、教職員の危機管理意識や判断力の向上など学校の防災体制の一層の充実を図る。なお、学校防災アドバイザーの派遣回数は原則3回とする。

（活動内容）

ア 災害対応マニュアル、避難訓練の見直し

実効性のある災害対応マニュアルにするため、PDCAサイクルによるマニュアルの点検や避難訓練の見直しを行う。

イ 校内研修会の実施

教職員の危機管理意識や判断力の向上を図るための校内研修会を実施する。

(2) 防災教育授業実践推進校

県教育委員会が派遣する学校防災アドバイザー（外部有識者）の指導や助言を活用し、教職員の授業実践力を向上し、児童生徒の防災・減災意識の高揚及び防災に関する実践力を高めるなど、防災教育の充実を図る。なお、学校防災アドバイザーの派遣回数は原則3回とする。

（活動内容）

ア 防災教育における指導内容、方法等の見直し

防災教育推進全体計画や指導計画等の確認を通じ、指導内容、方法等の見直しを行う。

イ 教材開発、指導案検討及び作成

学校防災アドバイザーの助言をもとに、防災教育に関する教材開発や防災教育副読本「明日に生きる」等を用いた授業の指導案を検討、作成する。その際、必要に応じて震災・学校支援チーム（EARTH）員を派遣できることとし、その派遣回数は「ウ 授業研究会」への出席を含めて3回までとする。派遣するEARTH員の人数は、県教育委員会と協議のうえ、決定する。

ウ 授業研究会の実施

教職員の防災教育に関する授業実践力の向上を図るための研究授業、研究協議を実施する。授業は市町内の教職員に公開し、取組の成果を域内の学校に広める。

3 活動報告について

活動後は成果物（見直した災害対応マニュアル、研究授業の指導案等）及び報告書を県教育委員会に提出する。

県教育委員会は報告書を取りまとめ、実践事例集として県内公立学校に配布し、各推進校の取組を県内に広める。

令和3年度 学校安全（防災）総合支援事業 気象災害モデル校 活動要領

1 推進校指定について

県教育委員会で指定する地域（令和3年度但馬地区）において、気象災害に対する防災体制の構築及び防災教育の推進について研究する気象災害モデル校2校（公立小学校、中学校）を指定する。

2 モデル校

豊岡市立新田小学校
養父市立八鹿青溪中学校

3 予算について

1校あたり上限60万円

4 活動について

次の(1)～(3)の取組を通じて、近年多発する気象災害に対する防災体制の構築及び防災教育の推進へ繋げるとともに、取組内容を県内に周知する。

(1) 気象災害に対する意識向上を図る児童生徒向け講演会の開催

兵庫ゆかりの気象予報士やメディアで活躍するお天気キャスター等、児童生徒が身近に感じ、影響力のある専門家を招いた講演会を児童生徒及び保護者・地域住民等を対象に開催し、気象災害に対する意識の向上と正しい理解を図る。開催回数については予算の範囲内で決定する。

(2) 専門家の活用

気象台職員、大学教授、地域の防災士等、地域の気象災害に精通する専門家を活用し、防災体制整備の計画や防災教育指導の方向性等について助言を受けながら研究を推進する。

ア 災害対応マニュアル、避難訓練の見直し

専門家の助言を受けて、災害対応マニュアルの点検や避難訓練の見直しを行う。派遣回数については予算の範囲内で決定する。

イ カリキュラム、指導案検討及び作成及び教材開発

専門家の助言をもとに、気象災害に関する防災教育教材開発や発達段階に応じたカリキュラムの検討、授業の指導案の検討・作成を行う。派遣回数については予算の範囲内で決定する。

ウ 校内研修会、授業研究会等の実施

教職員の危機管理意識や判断力の向上を図るための校内研修や、教職員の防災教育に関する授業実践力の向上を図るための公開研究授業、研究協議等の実施に努める。実施する場合の公開範囲は、市町組合教育委員会とも協議のうえ、決定する。

エ その他

その他、学校の実情や課題を踏まえ、気象災害に対する防災体制の構築及び防災教育の推進に有効な取組を予算の範囲内で実施する。

(3) モデル校における取組の県内周知防災教育推進校での報告会の実施

活動後は成果物（見直した災害対応マニュアル、研究授業の指導案等）及び報告書を県教育委員会に提出する。

県教育委員会は報告書を取りまとめ、実践事例集として県内公立学校に配布し、各推進校の取組を県内に広める。

2 令和3年度推進校一覧



猪名川町立松尾台小学校

令和3年度 学校安全（防災）総合支援事業 推進校一覧

○防災教育推進校

No	学校名
1	県立舞子高等学校（主管校）
2	県立西脇北高等学校(主管校)
3	県立東灘高等学校※
4	県立神戸甲北高等学校
5	県立須磨友が丘高等学校※
6	県立尼崎小田高等学校※
7	県立西宮今津高等学校※
8	県立宝塚東高等学校
9	県立阪神昆陽特別支援学校
10	県立明石南高等学校
11	県立東播工業高等学校
12	県立多可高等学校
13	県立松陽高等学校
14	県立姫路商業高等学校※
15	県立龍野北高等学校
16	県立家島高等学校
17	県立洲本実業高等学校
18	県立津名高等学校
19	県立淡路高等学校
20	県立淡路三原高等学校
21	神戸市立神港橘高等学校
22	姫路市立飾磨東中学校

○気象災害モデル校（但馬地区）

No	学校名
1	豊岡市立新田小学校
2	養父市立八鹿青溪中学校

○学校防災体制推進校

No	学校名
1	県立東灘高等学校※
2	県立須磨友が丘高等学校※
3	県立尼崎小田高等学校※
4	県立西宮今津高等学校※
5	県立北摂三田高等学校
6	県立東播磨高等学校
7	県立姫路商業高等学校※
8	尼崎市立わかば西小学校
9	猪名川町立松尾台小学校
10	播磨町立播磨中学校
11	小野市立大部小学校
12	神河町立寺前小学校
13	赤穂市立坂越小学校
14	香美町立奥佐津小学校
15	新温泉町立浜坂東小学校
16	丹波篠山市立西紀北小学校
17	洲本市立洲浜中学校
18	淡路市立学習小学校

○防災教育授業実践推進校

No	学校名
1	宝塚市立長尾台小学校
2	明石市立大久保北中学校
3	姫路市立増位小学校
4	朝来市立竹田小学校
5	丹波市立鴨庄小学校
6	南あわじ市立沼島小学校

※は防災教育推進校と学校防災体制推進校を兼ねて指定

3 推進校の実践



明石市立大久保北中学校

震災体験をつなぎ・活かすジュニアリーダーの取組

県立舞子高等学校

1. はじめに

本校の防災教育の原点は 2001 年より始まった 1.17 震災メモリアル行事「阪神・淡路大震災を忘れない～21 世紀を担う私たちの使命～」という全校あげての取組にある。黙祷・追悼演奏・講演・分科会・炊き出し（舞子千人鍋※近年は感染予防のため休止）などのプログラムを通し、生徒と地域の方がともに震災について語り合い、命と向き合う一日となる。全国初の防災専門学科である環境防災科の設立以前から、震災より 27 年を迎えコロナ禍に直面している今日まで、この行事が継続されている意義は大きい。

2011 年 3 月に東日本大震災が発生した時、阪神・淡路の記憶を持たない生徒たちが街頭募金に立ち、地域の方から「あの時の恩返しだ。私たちの気持ちを届けてほしい」という言葉を受け取って被災地に向かった。現地では「ありがとう、何かあれば次は私たちが駆けつけるから」「ここで見聞きしたことを、災害を知らない人たちに伝えてほしい」という言葉をいただき、兵庫に戻った。熊本地震など他の被災地支援でも同様のことがあった。このように、体験者から受け取った言葉が、本校生のジュニアリーダーとしての活動の方向性を決めていった。すなわち、被災地と未災地、被災者と未災者をつなぐ架け橋になることである。

2. 具体的な取組

(1) 宮城県訪問

本校は東日本大震災が発生した直後より宮城県の各地でボランティア活動を行ってきた。とりわけ 2011 年 5 月、1 か月にわたって活動した東松島市との縁は深い。泥かきなどの復旧作業が一段落した後は仮設住宅への訪問・交流が中心となり、住民の方々が集団移転地区あおいに移った。本校単独での訪問は 2013 年度で休止し、以降は兵庫県ジュニアリーダーと合同での活動を継続している。

2020（令和 2）年、新型コロナウイルス感染症の影響により宮城県訪問の中止が決定すると、本校生はジュニアリーダー学習会の場で「これまでお世話になってきたあおい地区の方々へメッセージを送ろう」と呼びかけた。コロナ禍の収束や健康、再会を願うメッセージカードを、七夕の笹飾りをイメージした模造紙に飾り付けてあおい地区に贈った。宮城の夏の風物詩「仙台七夕」をはじめとする様々な行事が中止とな



ったことを受けて、せめてもとの思いで届けたメッセージは、現在もあおい地区の集会所に掲示していただいている。

◀あおい地区に 贈ったメッセージ

令和 3 年度は 2 年ぶりに訪問を実現すべく現地の方々の協力を得て計画が進められたが、訪問直前の 8 月初頭、コロナ流行第 5 波が押し寄せた。受け入れ先の状況と生徒の安全を考慮し、1 月への延期が決まった。この活動中に交流するはずだった宮城県多賀城高校・涌谷高校の生徒へ、延期のお詫びと次の交流を待ち望む思いをメッセージにして送ったところ、先方からも「会えるのを楽しみにしている」という温かなお返事をいただいた。

令和 4 年 1 月、本校生 21 名が県内ジュニアリーダー生 19 名とともに宮城を訪問することが決まり、その事前学習として、宮城・福島で被災し現在は関西で学生生活を送っている 2 人の若者と交流を行った。同世代だからこそ交わせる言葉や思いを受け取り、生徒たちは自らの「架け橋」としての役割を再認識した。

以下は宮城県での活動の概要である。

- 多賀城高校訪問・交流・まち歩き（津波波高標識をたどりながら震災当時の話を聞く）
- 大川小学校訪問（遺族の講話を受けながら、子どもたちの足跡をたどる）
- MEET門脇訪問（日和幼稚園遺族が提供された遺品や門脇小学校遺構の説明を受ける）
- 大川小学校遺族との対話（訴訟の経緯や遺族の心情についての講話と質疑応答）
- 災害初動ワークショップ（避難所運営、学校再開、ボランティアなどの8つのテーマについて、本校生が阪神・淡路大震災における課題を発表。東日本大震災の経験者が助言を与え、課題解決のためのアイデアをまとめる）
- 若者語り部との交流（被災体験をもとに防災教育に取り組む大学生達の実践を聞く）
- あおい地区のまちづくりについて学ぶ
- あおい地区へのメッセージ集・義援金贈呈

あおい地区に手渡したメッセージ集は、ジュニアリーダー学習会を通じて各校に協力を呼びかけて作成した。また義援金は、「あおい地区で暮らす全ての世代がつながりや活気を失わず、未来に受け継がれる“日本一のまちづくり”に取り組み続ける活動」を応援することを目的に、本校生が街頭募金を行ったものである。

訪問を終えて兵庫に戻った生徒たちは、まず、家族やクラスメートなど身近な人々に対して、見聞きしたこと・感じたことを話すことから始めている。そして、今回の活動を様々な人に、場に、取組につなげていきたいと願っている。復興途上にある東北のために自分たちに何ができるか、また「未来の命を守るために」と辛い体験を話してくださった方々の思いを、どのように受け止めて防災活動につなげるのか、という大きな課題に向き合っている。



全国の学校との交流や出前授業などで、早くも発信に始めた生徒もいる。次頁よりその取組を紹介する。

◀災害初動の課題についての発表

(2) 学校間交流

本校は、防災教育に熱心に取り組む全国の学校と交流機会がある。令和3年度に予定されていた交流のいくつかは、感染状況の逼迫によって中止を余儀なくされた。一方、オンライン開催となったことで、より広域の学校と交流できた側面もあった。

○全国中学生・高校生防災会議

（令和3年12月18日・27日）

2018年度は兵庫、2019年度は東北・熊本を会場として実施されたこの会議は、コロナ禍を受けて2020年度・2021年度はオンライン開催となった。「探究の対話（p4c）」を通して全国の学校ならびにファシリテーターの大学生と交流しながら、自校の取組をふり返ると同時に他校の実践を踏まえて、今後挑戦していきたい「アクションプラン」を作成した。

本校は他の県内ジュニアリーダー校同様、夏の学習会ですでにアクションプランを立て（本年度は生徒を主体とする防災教育と避難訓練計画、マイ避難カードの作成を盛り込んだ）、実践を行っているが、全国会議で他校の特徴的な取組を見た生徒が「本校主催の地域防災セミナーの内容を更に充実させよう」という新たな目標を盛り込んだ。今年度の地域防災セミナーについては次頁で触れる。

○東日本大震災メモリアルday2021

（令和4年1月22日）

宮城県多賀城高校が主催する、東日本大震災の経験と教訓を後世に継承していくと同時に、全国の高校生が防災の取組を発表し合い交流を図る取組である。今年度は宮城県訪問の直後だったこともあり、本校生が現地で学んだこと・考えたことをどのように防災・減災活動につなげていこうとしているか、実践例や目標を話す機会となった。伝えることの難しさと大切さに向き合う一日となった。

○白嶺防災フォーラム2021

（令和4年1月28日）

新潟県立白嶺高校は、2016年糸魚川大火を契機に、防災を主とする地域貢献活動について全国の高校生が意見交換し交流する場を設けた。今年度は、地域の特性に加え社会背景（コロナ禍、高齢化、環境問題など）もふまえて、高校生が取り組んでいきたい防災活動について意見を交わした。

(3) 地域防災セミナー

令和2年度より、コロナ禍の状況を踏まえて屋外で展開できるブース形式をとっている。今年度は8月28日に実施した。コロナ第5波の影響により地域の行事や防災訓練が相次いで中止されていく中、少しでも役立つ体験活動を提供したいと考え、水消火器体験や「避難生活での暑さ・感染対策」の他、過去の震災の教訓をもとに作ったクイズやワークショップ、防災楽習迷路などを展開した。

参加者のほとんどが「来てよかった」という感想を聞かせてくださる一方、密を避ける観点から宣伝も控えめにしたせいか、参加者数が少ないことが課題となった。これを受けて、12月の全国中高生防災会議で立てたアクションプランには「地域防災セミナーを年2回に増やし季節に応じたブースを出す」「学校外の機関と協力し世代を問わず興味を持ってもらえる内容を取り入れる」という目標が盛り込まれた。



▲地域防災セミナー（楽習迷路）

(4) 交流及び共同学習、出前授業

本校は現在、県内の3つの特別支援学校と交流及び共同学習を行っている。このうち視覚特別支援学校とは、令和3年7月15日にオンラインでの交流、同12月14日に本校生が先方を訪問し「ゴールボール体験」と「避難行動と支援を考えるワークショップ」を行った。ジュニアリーダーとしての活動目標には、地域とそこに暮らす人々のことを良く知りサポーターとなることが挙げられている。その目標への一歩として、障害当事者の声を聞き、災害対応の具体的な場面を考えるこの時間はとても大きな意義を持っている。

また2012（平成24）年から続いている芦屋特別支援学校との交流では、本校生が学んできた阪神・淡路大震災や東日本大震災の教訓を共有

し、ともに命が助かるための避難行動や備えについて学び合う時間をいただいている。

本校には従前より幼・小・中・高からの「出前授業」の依頼がよくあるが、令和3年度は15件（令和4年1月末現在）と、例年に比べてかなり多くなっている。理由として、オンラインで実施する環境が整ったこと、トライやるウィークの一環としたいという要望が増えたこと、コロナ禍により交流や行事が減る中で学び合いの機会を子どもたちに提供したいと考える教員の方々が本校生のこれまでの実績を評価し、期待をかけてくださったことが挙げられる。

一つの事例として、令和4年1月20日に実施した高砂市立松陽中学校での出前授業を紹介する。これは、4年前に同市内の中学校で行った出前授業を目にした教員からの要望により実現した。対象は中学2年生4クラス、授業を行ったのは本校生9名である。1時間はクラス単位で、「もし24時間後に巨大地震が起きると分かったらどうする？（一日前プロジェクト）」というテーマでワークショップを行った。感染防止に留意し透明のパーティション越しでの話し合いになったが生徒たちは様々な意見を出してくれた。次の1時間は体育館に集まり、各クラスで出た意見を発表した後、阪神・淡路大震災の教訓をもとに「災害前にできる備え」「災害時にどのように助け合うか」を考える時間を持った。質疑応答では「学校は安全な避難場所なのか」「障害がある人はどこに避難すれば良いのか」などの疑問・不安が出され、本校生はこれまでの学びをもとに自分たちの考えを述べた。正解を押し付けるのではなく、地域の状況をよく知った上で判断し行動することの大切さ、若者が力を発揮していくことの重要性を説く高校生の言葉は、同世代の中学生に響いたようである。中学生の感想からは、学び合いの成果の一端がうかがえる。

私は大きな災害を体験したことがなく、考える機会もありませんでした。でも舞子高生のお話を聞いて、考えたり意見を言ったりすることができました。（中略）避難所では私たち中学生も手伝えることがあるとわかりました。自分だけでなく、大切な人も助けられるようにしたいです。

▲松陽中学校生徒の感想（抜粋）

交流及び共同学習、ならびに出前授業には、原則として有志の生徒が参加し、準備も生徒が主体となっていく。そのベースとなる知識・意欲・行動力を培う要素は①校内での学び（日々の授業）②校外での学び（ジュニアリーダー学習会などの研修機会）③生徒同士の縦横のつながり（ノウハウや教材の共有／卒業生の協力も得て下級生を育てる）の3つである。

(5) 校内防災体制における生徒の役割

学期毎に全校生対象で行う防災学習・避難訓練の企画には、ジュニアリーダーを核とする環境防災科の生徒が加わる。令和3年度1学期は校内防災マニュアルの読み合わせとともに、避難時に陥りやすい心理状況等について生徒主体の学習を行った。また火災避難訓練の後、生徒同士が教え合う形で水消火器体験を実施した。2学期末は生徒がファシリテーターを務め各クラスで地震への備えと避難行動に関するワークショップを行った。その後「考査中に地震発生」という想定で訓練を行った。初めての想定で教員も試行錯誤する中、生徒は状況をよく見て動き、訓練後のアンケートでは様々なフィードバックが得られた。

3. 成果と課題

(1) 生徒の意識

本校環境防災科の生徒は、3年間の学びの集大成として『語り継ぐ』を執筆する。身近な方の震災体験を聞き取り、記録していく取組である。語り継ぎは、語り手と聞き手、そして聞き手の「継ぐ」という意思がなければ成り立たない。社会全体の防災力向上に対して語り継ぎが果たす役割の大きさを、ジュニアリーダーとして理解はできても、震災を直接知らない世代は「私が聞いてよいのだろうか」「語ってよいのだろうか」という戸惑いと不安を持つ。

しかし、今年度ある生徒は、自らの『語り継ぐ』を次のように結んだ。

「震災を体験していないことは、語り継げないことの理由にはならない。」

戸惑いや不安を受容し、共有していくジュニアリーダーの活動が、防災・減災を担っていく自覚と意志を育てている。

(2) 地域社会との関わり

コロナ禍で社会生活の様々な局面が制限される中、防災活動が停滞することに危機感を覚え、

高校生の力を取り入れることで活路を見出そうとする動きがある。

令和4年1月15日、神戸市垂水防火安全協会・神戸市垂水消防署の主催で「学ぼう！考えよう！『くらしの防災』～様々な立場や世代でコロナ禍での震災対策を話し合い、学び、考え、備える」ワークショップが開かれ、本校生32名が参加した。地域防災の担い手の高齢化が進む中、高校生が参加することで話し合いを活発にしようとするねらいもあったが、会場ではごく自然に阪神・淡路大震災の語り継ぎが行われていた。ジュニアリーダーに期待される継承の役割の大きさを改めて認識した。



◀コロナ禍での
震災対策を話し合う様子

(3) 教員の意識

大川小学校の裁判で指摘されたように、教員には高い防災意識と知見が求められる。しかし実際は、どこでどのようにそれらを身につけていけばよいのか悩む教員も少なくない。しかしジュニアリーダーの活動に接した教員は、大きなインセンティブを与えられる。主管校としての負担が大きいことは否めないが、より多くの教員がこの事業に関わっていくことで学校の防災力は必ず向上する。学校は地域防災の核であるから、ジュニアリーダーの活動は最終的に、地域で誰も取り残されない防災へとつながっていく。課題は、将来を見据えた人員配置と環境整備である。

4. 今後に向けて

防災力を育む取組は、全ての地域・学校で取り組むべきものである。特別なことをする必要はなく、生徒を学校防災の主体に据えるだけでよい。ジュニアリーダーとなっていく生徒たちは、「ただ守られるだけの存在」であることを望んでいない。自分や大切な人の命を守れる人間になれるように、知恵を分かち合いながら防災と向き合っている。防災を活動の主流に置くことで、地域から信頼される学校を作り上げていく。この方向性を、主管校として示し続けていきたい。

地域防災の担い手としての防災ジュニアリーダー

県立西脇北高等学校

1. はじめに

西脇北高等学校では、7月に3泊4日の日程で、宮城県を訪問した。東日本大震災復興支援現地ボランティア活動は、震災が起こった2011年5月に実施して以来、今年で10回目となる。今回のプログラムの一つに、津波でご息女を亡くされた方のお話を聞く機会があった。その方のごことば「防災はハッピーエンド」が印象的だ。

生徒たちは、この体験活動を通じて命の大切さや伝えることの大切さを学んだ。また、防災ジュニアリーダー学習会で学んだ防災に関する知識とともに、近隣の小中学生に語り部として防災について伝えた。このように、実際に見聞きした体験を多くの人に伝えることはとても貴重な経験である。

その担い手として中心的な存在になることが防災ジュニアリーダーの役割の一つである。防災の知識を知ることにより、地域防災の役割の一端を担える生徒の育成を視野に、令和3年度の学習会西脇会場では「過去の災害や防災について高校生等が地域社会に情報発信できるようにする」を目的として、講義を受けたり、防災について話し合う場を設けた。

昨年度の1日での開催から実施方法を変更し、7月27・28日の2日間で実施した。また、新型コロナウイルス感染症対策の観点から1日目の講義はオンラインによるWeb会議システムを利用した。

2. 具体的な取組

(1) 「高校生等が核になる地域防災について考える」諏訪清二氏

災害を引き起こす自然現象である「誘因」と「素因」を知ることから備えや対応をすることについて、2021年に発生した神奈川県熱海市での土砂災害を具体例をもとに解説。さらに、普段から避難に対する考え方を決めたり、その準備や、さらには気象情報の収集や決断、実行など多くの局面があることを示した。次に、ワー

クショップでは、大雨を想定した行動について、個人やグループで考える時間を設け、それぞれの内容を発表した。

後半は、「地域コミュニティ」をキーワードに、その中にある学校が、どのような形で地域に関わるかということについて学んだ。人が集まる地域防災訓練を例に、人集めのアイデアや成功させるために必要な要素など、普段から高校生が地域コミュニティを活性化するための役割があり、自分たちで具体的に組み立てる内容を考え、活動の概要や期待される成果について発表した。

私たちの学校である家島高校は名前のおおきい島なので私たち高校生が小さな子どもや高齢者の方の道しるべになれる様に成長したいです。

もし災害に遭ったときに、助けてくれるのも助けるのも近所の人の可能性が高いので、普段からコミュニケーションをとることも大切だと思いました。

▲生徒の感想

(2) 「みんなで学ぶ「防災への備え」命を守る行動」石崎徹氏

過去の災害から学ぶ対策では、阪神・淡路大震災と東日本大震災をもとに、近い将来起こるとされている南海トラフ巨大地震や内陸型地震への対策をどのように行っていくかということを示唆。特に、耐震化や家具の固定については、それぞれの寝室がどのような状態にあるかを確認し、改善点などを考えた。

水害については、平成30年、令和元年の水害をもとに、情報の取り方や台風の進路と被害の大きい場所の位置関係など学ぶとともに、ハザードマップをもとに、それぞれの住む地域でどのような災害が想定されるか、また、どのような対策をとっていく必要があるのか、さらには、災害時に必要となる食料や携帯トイレセッ

トなど具体的に考えた。

必ず起こる災害時に適切な避難行動を取れるようにすること、まずは自分の力で助かる為に普段からの備えや命を守る行動を取ることで、誰かを助けたり協力できることを示された。

災害リスクについて学んだことが印象に残っています。今までは避難場所を家族と話し合っただけで、災害の種類や時間などで、避難できない可能性があるということを知って、もう一度避難場所を考え直すべきだなと思いました。



▲生徒の感想(上)・西脇北高校での様子(下)

(3) 「減災を知ろう」一色卓磨氏

できるだけ災害による被害を小さくするためにできる7つの備えについて、内閣府作成の「減災のてびき～今すぐできる7つの備え～」をもとに、災害前の対応がとても重要であることを確認した。内容は、「自助・公助」、ハザードマップ、家屋の耐震についてや過去の災害についてなど様々な角度から減災について学習した。

また、後半には「減災クイズ」で、就寝中や街中を歩いているときに地震発生した場合にどのような対応をするか、さらには、非常時に便利なグッズについてなど考える時間となった。

減災を具体化するには、日頃から意識を持って実際に行動していく必要がある。その具体的な内容を知る講義となった。

災害は何をどうやっても起こってしまうけど、人の命を守ることはできます。自分たちの周りで何が起こってしまうのかということをハザードマップで確認し、そのための備えをするなど、自分たちができることはたくさんあると学びました。

▲生徒の感想

(4) 人と防災未来センター

2日目の午前中。まず初め、語り部の荻野君子氏から阪神・淡路大震災での体験を伺った。九死に一生を得る体験に、生徒たちは懸命に話を聞いていた。荻野氏は、震災発生から7時間後に救出されたことや、命の尊さ、人の心の優しさ、震災での教訓など、ご自身が所持する資料を交えて、様々な視点でお話ししていただいた。

東館フロア3階は、2021年6月にリニューアルし、BOSAIサイエンスフィールドを展示。当センターは、地球上で起こる自然現象と人々の生活が交わることで自然災害が発生することを学んだり、自然現象のメカニズムを学び、それが自然災害とどのように結びつくのかを体験できるようになっている。また、ハザードVRポート、クエスチョンキューブなど、体験や考えることを通して防災について学びを深めることができる。このように、阪神・淡路大震災の内容にとどまらず、災害についての知識を多く得られる当センターで、生徒たちはさまざまなことを学んだ。

わずか7分間の立体シアターで地震を体感し、改めて自身の怖さを思い知りました。その後にあった15分の映像では人と未来防災センターでしか見られないような内容の濃い映像を見ることができ、これからの地震への備えの気持ちがいよりの強くなりました。

他校との慣れない交流の中で、カルタ制作を通じて、楽しい時間を過ごせたとともに、理解しやすい災害への対策が分かったのも、良い経験になりました。

▲生徒の感想

(5) 「防災カルタづくり」堀江俊志氏

午後からは県立美術館レクチャールームにて、「こどもぼうさい 31 の言葉」として、防災カルタづくりを行った。6つのテーマ「日常防災、交通安全、火災、水害、感染症、地震」について、生徒たちは、それぞれ小学校低学年の児童にもわかる内容に仕上げた。単純に防災を考えるだけでなく、小学生に何をどのように伝えるのかを考え、表現方法を工夫する活動となった。

学習会の目的である「地域社会への情報発信」のツールとして、カルタとともに日めくりカレンダーを作成し、参加校それぞれの地域にある小学校に配布した。

西脇北高等学校が届けた西脇市立日野小学校では、6年生の児童会の児童に受け取ってもらい、低学年の学級で取り組んでもらえるようお願いをした。実際には、1・2年生の教室に置くことで、普段から遊べるようにしてもらった。また、カレンダーは、全ての学級に配布してもらい、教室の見えやすい場所に配置してもらった。



▲テーマに沿ったカルタを考えている様子

3. 成果と課題

(1) 新しい取組

「ピンチはチャンス」。今年度もまた、新型コロナウイルス感染症の影響を少なからず受けた。2年前までは合宿を実施し、2泊3日間の日程で寝食をともにして、学習会を行っていた。今年度は、合宿形式の学習会こそ実施できなかったが、実施形式について工夫をし、できるだけ生徒が参加しやすい環境づくりをおこなった。

1日目は、県教育委員会が準備したWeb会議システム（Webex）のアカウントを利用して、県

内6会場をつないだ。講義を進める中で、概ね順調に進めることができた。また、講義を聴くだけでなく、それぞれの学校で考えたことを意見交換する場があるなど有意義な活動ができた。

また、アクションプランの発表については、各校で短い動画を作成し、その映像を閲覧することで発表の場とした。内容はそれぞれの学校の取組や生徒の考えがよくわかるもので、今後の発表方法のスキルの一つにしてもらいたい。

このようにICT機器の活用もしながら、新たな形で学習会を実施することができた。

私たち防災ジュニアリーダーが学習会を通じて身につけた知識をたくさんの人に広め、関心を高めてもらう必要がある。

2日目にした防災かるたづくりでは、交通安全や地震、感染についてグループで考えながらそれぞれがかるたを作りました。このかるたが近所の小学校の子どもたちに配られると知って、絵を描いたり、五七五を考えるのは難しくて大変だったのですが、このかるたを通じて少しでも子どもたちが安全に、何かあったときに正しい行動ができたらいいなと思いました。

▲生徒の感想

(2) 地域とともに取り組む防災

今回の学習会終了後に、それぞれの学校で小学校にカルタを配布するなど、自分達の活動を地域に広める取組ができた。防災は、地震や水害だけでなく、日頃から考えるべきことがたくさんある。防災ジュニアリーダーを中心に、高校生が地域の小中学校や住民とともに防災について考える場を設けるなど、生徒たちの学びの場を広げることを今後も続けていけたらと思う。

防災教育推進校においては、新型コロナウイルス感染症の影響で、活動することが制限される中で、それぞれの学校独自の方法で工夫し、地域にアクセスし、イベントの実施や防災についての知識を伝える活動に取り組むなど様々な取組が行われている。

(3) 学習会の目標設定について

現在、防災ジュニアリーダー学習会の目標や内容の設定は、主管校の裁量に委ねられている。今後、参加校が集まる会議で、その年の目標・目的について考える場を設けて、その目標達成に基づいたプログラムの策定を行うと、学習会をより効果的に実施できるものと考ええる。

また、この学習会に参加する生徒は、防災に関する取組について、意識の高い生徒が多い。学習会では、新しい知識を学ぶ場とするだけでなく、集まった生徒たちでさまざまな討議する場を設けて、防災や防災に対する考えを深め、防災ジュニアリーダーのネットワークにつなげることができればと思う。

4. 今後に向けて

(1) 生徒の主体的な活動

今回の学習や体験活動を通じて、生徒たちはいろいろな意見を出したり、工夫をするなど、成長する機会を持てた。今後も、学校内外で、防災に関する取組をする中で、新しい発想や工夫が必要となってくる。その取組に対してしっかりと教員が寄り添い、生徒たちが主体的に活動できる体制づくりをしたい。

また、今回の学習会では、地域の違う学校が集まり、それぞれの体験や課題について共有することができた。11月の発表会にあったように、高校生同士の交流の中で、課題解決や取組についての工夫について話し合いができる場が増えればと思う。



▲県立美術館にて

(2) 地域との連携

学習指導要領の中で、各教科及び教科横断的な防災教育が必須となっている。総合的な探究の時間を含め、授業で学んだ防災に関する知識

をアウトプットできる環境を作れたらと思う。また、災害が起こったときに重要なのは、地域コミュニティである。生徒たちは、そのコミュニティ活性化の活力となる。

防災は、最終的には社会のシステムではなく、それを活用する人間の判断力と行動力に左右される。そういった仕組みについても十分に理解して生徒たちが活躍することを期待する。

災害リスクについて学んだことが印象に残っています。今までは避難場所を家族と話し合っただけでしたが、災害の種類や時間などで、避難できない可能性があるということを知って、もう一度避難場所を考え直すべきだなと思いました。

▲生徒の感想



▲生徒の作品

防災ジュニアリーダー学習会

講師一覧（西脇会場）

- 1 防災学習アドバイザー・コラボレーター、
防災学会・会長 諏訪 清二 氏
- 2 NPO 兵庫県防災士会
事務局長 石崎 徹 氏
- 3 震災・学校支援チーム、
県立西脇北高等学校
教諭 一色 卓磨 氏
- 4 人と防災未来センター
語り部 荻野 君子 氏
- 5 神戸市立神港橋高等学校
教諭 堀江 俊志 氏

「学校防災体制の充実」

県立東灘高等学校

1. はじめに

本校は神戸市東灘区にある創立 48 年の全日制の普通科高校で、「夢を体感」見える形に一人に学び地域に学ぶ、未来に輝く東灘高校」を教育理念に掲げ、「自主、協調、創造」の校訓の下、自らの未来を切り拓き、たくましく生きる心豊かで自立した生徒を育てることを教育方針とし、生徒の自尊感情を高める多種多様な教育活動を日々実践している。

本校は工場の集積した人工島に位置しており、海拔が 1.5m しかなく、巨大津波を想定した水平避難訓練を実施している。その際、避難経路上の安全確認と近隣企業への情報提供を目的とした防災ドローンも活用している。

近隣企業や地元の自治体とは地域清掃や地域の行事での手伝い等を通じて、いわゆる顔の見える関係を構築し地域の防災力強化に努めている。加えて一人一人の生徒に対しても「自助」「共助」「公助」の概念を基にした防災教育の推進に努めている。

2. 具体的な取組

(1) 防災訓練

令和 3 年 4 月 16 日（金）、校舎内で発生した火災に対する避難訓練を実施した。安全な経路を確認して速やかに避難することを目的とし、生徒には火災の発生場所や避難経路を事前に知らせずに実施した。

（生徒の感想）

訓練後の講評のとき、調理室や食堂以外で、火を使わない部屋でもバッテリーやコンセント周辺が、地震や雷や停電復旧後の通電の時に火事になるかもしれないということを知り、気をつけたいと思った。訓練にも真剣に取り組めたのでよかった。



▲防災訓練の様子

建物外へ出た後は、小走りで遠くへ避難

(2) 水平避難訓練

令和 3 年 10 月 13 日（水）、水平避難訓練を実施した。発生確率の高さと被害の甚大さが指摘されている南海トラフ巨大地震に起因する広域巨大津波に対する防災訓練の在り方として平成 29 年、学校防災アドバイザーの指導助言に基づき、それまでの校舎 4 階への垂直避難から六甲山麓方面への水平避難へと変更して以来、実情に応じた変更を加えながら毎年実施している。今年度も前年度の訓練を踏襲しつつ感染症対策をより強化して実施した。本校では巨大津波に対する 2 次避難場所を森公園（海拔 13m）と定めているが、初動と組織的な行動の確認に力点を置いて訓練では例年磯島公園（深江大橋北側付近）を仮の避難場所としている。



▲水平避難訓練（ドローン映像）

(3) 防災ドローン

本校では近隣企業からドローンの提供があり、非常時の主要な避難経路上の被災状況をいち早く空撮し、映像を同時配信するなどの活用を想定し運用している。平時から主要な道路の状況を記録し、水平避難訓練時等でも活用している。また教員のみならず防災ジュニアリーダーを中心とした生徒たちも操縦訓練を行い、度々マスコミ取材に応じている。



▲ 防災ドローン（毎日新聞取材時）

(4) 4校合同東北ボランティア活動

令和4年1月15日（土）、防災意識の向上をテーマとした研修会に4校合同で参加した。本校では、阪神・淡路大震災を経験した地域で学ぶ高校生として、県立神戸高校、県立御影高校、神戸市立葺合高校との4校で、東日本大震災で甚大な被害を被った東北地方の現地に赴き、支援と交流を継続しているが、今年度はコロナ禍で現地での活動の中止を余儀なくされたため、その代替の活動として参加した。元石巻西高校校長の齋藤幸男氏の講演や、語り部で東北学院大学学生の雁部那由多氏の講演等の内容で、歌手のasariさん、4校の生徒以外にも、地域防災会議を主催する近隣の地域組織も参加した。



▲ 4校合同ボランティアの様子

3. 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒が災害の特性を理解し、より安全な避難場所や経路を主体的に確認し、防災意識を高めることができた。
- ・防災ドローンの運用に関しては、避難ルートの安全や混雑状況の確認等に加え、集合時の安否確認用の映像配信などでの活用、異常をいち早く発見するための平時の3Dマップ作成にも運用の幅が広がった。
- ・地域の災害特性や過去の被災経験など、地域の実情をよく知ることや、コロナ禍で行動が制限される状況でも4校合同ボランティアの取組を継続することができた。

(2) 課題

今年度、学校防災アドバイザーからは防災ドローンに関して、唯一の避難経路となる「深江大橋」の崩落は考え難いので、段差や落下物等の異常の探索に力点を置くと良いとの助言を受けた。ドローンの運用の在り方の改善が必要である。対策として、ドローンによる危険箇所の早期発見で避難経路の安全性を担保する計画であるが、雨や強風で飛行困難なドローン使用が前提なので検討が必要である。

本校職員からは、休み時間や下校時などの授業時間外における防災訓練や、職員だけのより実際に近い防災訓練の必要性などの提案があった。

4. 今後に向けて

コンパクトな防災リーフレットについて、令和3年度の学校防災アドバイザーから助言を受けながら防災ジュニアリーダーと生徒会が改訂中であるが、このような生徒が主体的に活動し、生き抜く力を育んでいける教育活動のさらなる充実を図る。

また、シナリオ通りの訓練について、満足することなく今後も災害発生時に生徒の安全確保を確実にすべく、安全防災体制のチェック及び現状に即したマニュアルの改訂を継続的に行い、そのプロセスに教職員の積極的な参加を促し、学校防災体制の充実を図っていく。

当事者として関われる防災マニュアルに向けて

県立須磨友が丘高等学校

1. はじめに

本校は神戸市須磨区の北須磨団地内に所在し、阪神・淡路大震災でも大きな被害はなく、地形上浸水害等のリスクも比較的低いと言える。また、総合学科として、キャリア教育やガイダンスの充実に力を置いてきた。

今年度本校では、生徒を主体とした防災教育の推進と、当事者としての教職員側の意識改革・防災研修の2点に取り組んだ。

本校では従来から生徒会執行部が防災ジュニアリーダーとして、校内での防災意識の啓発や、知識の普及に尽力してきた。

生徒への働きかけは行われてきたものの、一方で、教員側の知識や技術の向上は順調だったとは言えなかった。防災マニュアルは存在していても、その内容の周知が十分に図られているとは言えなかった。

そこで、今年度は本校の校訓「知る、考える、行（や）る＝知・考・行」に則りながら、防災ジュニアリーダーに従来から蓄積されてきたであろう知見を活かした、生徒主体の防災教育の実践を行いつつ、教職員の側も知り、考え、行動することのできる防災マニュアル作成を図った。

それに加え、今年度は新型コロナウイルス感染症への対策を講じながら研修を進めることも課題だった。

2. 具体的な取組

(1) 学校防災アドバイザーによる助言・講義

兵庫県立大学減災復興政策研究科から浦川准教授に学校防災アドバイザーとして3回にわたって助言をいただいた。

浦川教授からは、本校の防災マニュアルについては、マニュアルと言うより、心得や方

針に近いものであるとの指摘があった。また、避難訓練についても、毎年同じ内容でもあり、生徒の避難行動の練習にはなっても、教職員側の訓練にはなっていないというご意見もいただいた。

その上で、尼崎小田高校で取り組まれてきた防災マニュアル見直し研修や、それに基づいた教職員による機能訓練について、実際の流れや見直したマニュアル等をもとに講義をいただいた。とりわけ、防災マニュアルなどの防災体制の推進においては、その過程から教職員が参加しないと、実効性のあるものにはなりづらいことを助言された。

(2) 本校の防災上の課題

本校では防災マニュアルは作成されているが、その内容についての教職員の理解に差が大きかった。

また、マニュアルに基づいた災害時の行動にも共通理解が乏しく、2021年12月3日に発生した和歌山県北部を震源とした地震の際にも、教職員は統一した行動がとれなかった。結果として避難するような被害も生じなかったが、教職員のアンケートからは危機感に大きな差が見られた。

これらのことから、本校では教職員が防災体制について当事者意識が持っていないことが明らかであった。

また、校内の安全上の改善を要する個所について、指摘があってもその情報が共有されていない例もあり、平常時の安全点検についても体系的になされていない部分もあった。

(3) 防災マニュアル見直し研修

研修では数名程度のグループに分かれ、①校内での役割分担体制、②地震対策、③避難訓練の3点に絞り込んで、防災マニュアルの

問題点について話し合った。気づいた問題点については、グループ毎に付箋に書き出し、発表を行った上で、後日まとめたものを職員室内に掲示し、問題意識の共有を図った。

その後、生徒指導部、総務部との協力の下、学校防災アドバイザーからの助力も得ながら、指摘された問題点の改訂作業を実施した。特に改訂作業にあたっては、実効性のあるマニュアルづくりを意識したのは当然として、研修会における意見をなるべく反映させることで、当事者として関わっている意識を教職員に持たせることを意識した。



▲防災マニュアル見直し研修の結果掲示

3. 成果と課題

(1) 成果

教職員の意識向上が成果である。研修後の職員アンケートからは「(マニュアルを) 読み合う機会の必要性を感じた」「災害への備えを職員間でも共有することの大切さを感じた」など、教職員の気付きは、防災体制の構築への端緒となったと言える。

また、マニュアル見直しの過程を通じて、平常時の役割分担が不明瞭であったことや、その役割分担が果たせているかのチェックがうまく働いていないことも明らかになった。

(2) 課題

防災体制の充実を図るには、防災マニュアル

の見直しや研修が、校内分掌に適切に位置づけることが必要である。共通理解が本校で進んでいなかった主因は、そこにあったと言える。日常における、見直し→訓練→見直しを行う体制をはっきりさせることが課題である。

また、地元の北須磨団地等と継続的に連携することも必要である。所在の北須磨団地は、昭和42年より労働者住宅協会により入居が始まり、従来から街づくり、防災への取組が熱心である。

4. 今後に向けて

今年度の取組で、語り部による講演会が生徒による企画で行われた。語り部の言葉に真剣に耳を傾ける生徒の姿や声から、生徒の防災への意識の高まりを感じることができた。しかしながら、「3. 成果と課題」にも関連するが、イベントのように防災教育をすることだけでは、生徒にも教職員にも十分な効果をあげることにはできないと考えられる。

継続的に防災教育や教職員研修を実施し、効果を検証する、PDCAサイクルの必要性を強調しておきたい。



学校防災・減災マニュアル改定の実組と『あまおだ減災フェス』実践報告

県立尼崎小田高等学校

1. はじめに

本校が防災に本格的に取り組み始めたのは、看護医療・健康類型の生徒が『災害時要支援者』について探究を始めた平成 29 年度からである。この年から防災指定校に認定され、防災アドバイザーとして、兵庫県立大学大学院減災政策復興科（以下、県大）の浦川 豪先生が派遣され、本校が目指している『高校がハブになり、地域の方々と共助出来る関係づくり』が浦川先生の研究題材と一致し、ともに大きな目標を掲げ、取り組み始めた。

2. 具体的な取組

(1) 防災『絆マップ』の作成

平成 29 年度に『共助の大切さ』という考え方のもと、地域の方々とともに防災マップの製作にかかった。生徒たちが地域の方々から、危険な場所、過去の地盤状況などの情報を得て、県大の学生にその情報を ESRI ジャパン株式会社と提携し、『survey123』を用いて、デジタルマップに落とし込んでいただき、地域全体の漠然とした防災マップではなく、個人がいざという時にどの経路で安全な場所に避難できるかを示した個人用のデジタルマップを完成させた。完成したマップを『絆マップ』と命名し、ともに取り組んでいただいた方に贈呈した。



▲地域の方々と危険場所の検討

(2) 学校減災マニュアルの見直し

既存の防災マニュアルは『災害発生時に生徒の安全を確保する。生徒を安全に避難させる。』など、指示に対しての『主語』が明記されていなかった。また、『教務部は生徒の集合場所に出席簿を持参する』など、災害時に授業があるなど、実際に不可能な指示が多くみられた。そこで、県大の助言をいただきながら、授業担当者、それ以外など、実際の災害時を想定したフローチャートをWBSの手法を使って、役割別に作成し、それをもとに機能訓練、実地訓練を繰り返し、訓練終了後に振り返りを行った。毎回新たな気づきがあり、その度に改善され、現在の減災マニュアルを作成した。その実践は県教委作成『学校防災マニュアル』でも見本として紹介されている。



▲教員でのマニュアル見直し



▲機能訓練の様子

(3) 『あまおだ減災フェス』の開催

県大の大学院、大学生とともに地域の方々に減災について、学びの場を提供し、高校生自身も減災について、学びを深める目的で開催した。第1回より音楽で防災を伝えていく防災ユニット『Bloom Works』に参加していただき、以前からある単なる防災企画ではなく、幅広い年齢の方々に防災について学んでもらおうと、2019年から開催している。第1回と第2回は本校で実施したが、第3回は尼崎にある『小田南生涯学習プラザ』を主催地とし、あまがさきキューズモール内にある屋外イベント場でも、地域の活性化を目的とした『地図あそび』を実施した。

また、主催地では、自衛隊をはじめ、消防局、尼崎市災害対策課など公共の団体、関西国際大学、兵庫県立大学などの大学、神港橋高校、須磨友が丘高校などの高校と多くの団体が防災に関わるイベントを実施した。来場者は400人以上で、アンケート結果より、防災の大切さを理解していただいた。今後もこのイベントは進化させていく予定である。



▲キューズモールの様子



▲小田南生涯学習プラザでの様子

(4) 地域の小学生への防災教室の実施

2019年より本校の看護医療類型の生徒が尼崎市立立花西小学校や長洲小学校の児童にそれぞれ防災教室を実施している。内容は、児童にいざという時に役立つグッズの紹介（具体的には紙ナプキンマスク、新聞紙スリッパ、ゴミ袋雨合羽の作成、段ボールベット、段ボールトイレの組み立て方、毛布ベッドの作り方、ロープワークなど）や、クイズ形式で防災に関する知識を高めるなどの授業を行った。学んだ児童は、1.17に自分たちの学校で行われる『引き渡し訓練』の際に児童が保護者に同じ内容の授業を実施し、防災を広めていく活動をしている。



▲防災教室の様子

3. 成果と課題

学校減災マニュアルの内容充実が大きな成果である。それは減災マニュアルの改訂を4年間続けることによって、多くの課題が発見され、その度に新たな条項、条件が付与され、転勤してきた先生方が見ても、発災時にすぐに対応できるマニュアルが完成しつつあるからである。しかし、風水害、地震後の生徒の帰宅方法、教職員の諸事情への対応方法等、発災後の対応については、今後も課題として取り組んでいく必要がある。

4. 今後に向けて

3. 成果と課題に挙げた『学校減災マニュアル』の改訂、地域住民との合同避難訓練、いざという時のための『顔の見える関係づくり』など、多くの課題が残されている。この課題について、本校の教職員が真剣に向き合い解決していくことが実際の起こる『南海トラフ巨大地震』に対しての備えであると考えられる。

『備えあれば、憂いは最小限』を合言葉に今後も減災活動を充実させていきたい。

津波避難に向けての検討と調整

県立西宮今津高等学校

1. はじめに

本校は海浜地区に立地し、2013 年公表の「兵庫県津波浸水想定図」（以下「想定図」という。）によると最大 1 m の浸水が危惧されている。防災教育においては、一般的な火事・地震への備えに加えて、「津波」への強い意識付けが、家庭・職員・生徒ともに必要とされる。

一方、本校は西宮市との協定で、一時避難所としての「津波避難ビル」に指定されており、津波警報発令時には本校南棟の 3 階以上がおおよそ 1030 人の避難場所として開放される。残留する職員は、浸水により交通が途絶した校舎で、避難者へ対応することになる。

27 年前の阪神・淡路大震災の際にはグラウンドで液状化現象が発生するなど、各所で隆起・陥没が発生した。職員玄関前の階段の不自然な隆起に大震災時の記憶がとどめられているが、南海トラフ巨大地震の際には、校舎には同程度の被害が発生することが予想できる。

なお、本校正門東 150 メートルに中津浜線が通り、北方向への移動は容易である。

2. 具体的な取組

(1) 垂直避難から水平避難への方針転換

本校は、敷地南側 700m の阪神高速 5 号湾岸線と、北側 1000m の国道 43 号線及び阪神高速 3 号神戸線との間に位置する。阪神・淡路大震災の際に高速道路高架が倒壊した経緯もあり、津波発生時の本校での対応は「垂直避難」であった。交通量が多い 43 号線と 3 号神戸線で自動車の延焼による大規模火災が発生した際の二次災害を想定したからである。

その後、学校防災アドバイザーからの助言をもとに方針を「水平避難」に切り替えた。以下の想定が水平避難切り替えへの根拠である。

- ・津波到達時の波高が予想を上回った場合、被災から逃れられない。
- ・南側湾岸線の多くの自動車が、津波によって燃えながら校舎に到達した際に、校舎の

延焼・被災が危惧される。

- ・浸水が予想より低かった場合でも交通途絶により 720 人の生徒（当時）が校舎に孤立し、トラブル発生時に効果的な対処ができない。
- ・最新の指針として、標高の高い場所に速やかに移動することが最も効果的な避難方法であるとされている。

以上を考慮し、最初の水平避難訓練が実施されたのは平成 30 年度（2018）である。想定図をもとに、非浸水予想地区の瓦林公園（北側直線距離 2000m）を集合地点とした。

(2) 避難場所の妥当性の検証

当初から瓦林公園を避難場所とすることへの疑義は呈されていた。そこで、瓦林公園以北の避難場所候補地を探索し、非常通信手段としてのトランシーバの有効性も確認した。

・国道 2 号線付近の標高は 1m。北 500m に JR 神戸線が東西に位置し、中津浜線の跨線橋が通行不能になった場合、JR 神戸線が高所移動の障壁となる。

・従って、瓦林公園以北に全校生が避難する場合、国道 2 号線以北の工場敷地内への避難か、甲子園口 6 丁目市営住宅への垂直避難か、どちらかが実行可能な対応になる。

・県から供給されたトランシーバによる市営住宅最上階から本校校長室への通信は、感度明瞭で十分に実用的であった。

(3) データの整理と意識喚起

家庭への防災意識の喚起の一策として、本校では入学時に「生徒引き渡しカード」（以下「カード」という。）を回収している。カードには緊急連絡先と各家庭が決定している避難場所が記載される。年度が変わるごとにカードを生徒に返却し、家庭での再確認と訂正とを経て新クラスで再回収する。今年度はこのカードを整理・集計し、延べ 100 人以上の未記載・不備の加筆訂正を行った。修正を求めた生徒・家庭への防災意識の喚起にはつながったが、より効果的な活用について考えていきたい。

なお、整理・集計の際に、各家庭が決めている避難場所のいくつかが「想定図」による浸水区域に位置することが分かった。

(4) 本年度の避難訓練の状況

「密を避ける」ことが求められるコロナ禍の中で、3回目の水平避難訓練を経た昨年度の提言をもとに、本年度の避難訓練は、「暑熱時・酷寒時を避け、1年次だけで実施する」ことになった。

水平避難訓練に先立ち、本校から瓦林公園までの地図（大きさはA1大）を1年次の各教室に掲示した。また、担任を通じて、「避難ルートの確認」と『おはしも』の留意」とを連絡した。引率職員には、道路使用許可取得時に警察から指示された「安全確認についての留意」を連絡した。

何回かの検討を経て、当日の訓練形態は、体育館での全体集合点呼後、全体での指示を受け、クラスごとに瓦林公園までに移動することになった。

3. 成果と課題

(1) 本年度の訓練の状況

当日の訓練は順調に進行し、予想よりもはるかに早く約40分で避難場所への移動ができた。特に「おはしも」については、小中学校での訓練の結果もあってか、良好であった。職員の安全確認への対応についても、概ね達成されていた。



▲移動中の生徒

(2) 避難方針の確立

訓練と平行し、学校防災アドバイザーとの協議を経て対応指針が以下のように具体化された。

- ・「想定図」をもとに、本校の避難場所は瓦林公園に確定し、各家庭に伝える。
- ・津波警報発令時には、「生徒全員」を職員が引率して避難する。家庭には帰さない。
- ・浸水予想区域である本校に生徒を引き取りに来ないように、各家庭に伝える。
- ・可能な限り敷地内には生徒を残さない。重傷者も動かせる限り避難場所に搬送する。

- ・「完全な点呼」を意識して時を失せぬよう、1分1秒を惜しんで避難場所に引率する。
- ・津波が到達した際に、避難場所より低地への生徒の帰宅は許可しない。
- ・浸水想定地域を避難所とする生徒には、「セカンド避難所」について伝える。
- ・一部の職員は本校に残留する。

本校への職員の残留方針をうけ、防災アドバイザーと西宮市の防災担当との協議により、一時避難者への救難物資が西宮市から供給され本校に備蓄されることになった。

4. 今後に向けて

活動を通じ、以下の課題が見出された。

- ・同一条件校との協議と避難方法の共通化
海浜地区に位置し校舎内への浸水が想定される学校間で、避難についての諸案件について意見交換し避難手順を共通化することで、家庭の理解と防災意識の喚起を図る。
- ・職員間の通信手段

津波に先立つ地震でインフラが停止した際、業務用の携帯電話等が支給されていない現時点では、職員個人の携帯電話が通信手段になる。基地局の被災もしくは回線集中による停波時にはトランシーバが活用されるだろうが、非常事態を想定したインフラの整備、通信手順の共通化について提言する。

- ・生徒の家庭への連絡

職員が全生徒を引率して瓦林公園に避難するが、避難後の家庭への連絡を可能にするよう、インフラの整備、情報開示方法の確立について、提言する。

- ・職員の服務と役割分担

避難場所での時間が長期化する場合、職員の家庭・家族の被災時に職員が任地を離れることの可否について検討する必要がある。

- ・想定状況に即応した訓練

実際に近い状況を想定した上での避難訓練を実施できるよう、関係部署との協議を重ねながら連絡の手段や情報の集約・発信手段をできるだけ早く確定する。

複数年度にわたるコロナ禍の中、各行事の日程・形態の直前の変更は著しく、対応には日々翻弄されているが、防災に係る研修・訓練の時間を捻出すべく、次年度も継続して取り組んでいきたい。

身近に防災 災害時の行動をゲームで学ぶ

県立北摂三田高等学校

1. はじめに

本校は、三田市南部に位置する全日制普通科高校である。30年以内に70～80%の発生確率と言われている「南海トラフ巨大地震」が発生した場合の地震被害想定では、最大震度が5強である。また、ハザードマップでの浸水想定地域ではなく、近隣に避難所となる小中学校があり、災害時には補助避難所として位置付けられている。（注1）

令和2年度から学校防災体制推進校として指定を受け、今年で2年目となる。昨年度は、防災マニュアルの見直しと避難訓練の改善を軸に、学校防災アドバイザーとして、神戸学院大学現代社会学部社会防災学科 中田敬司教授（以下、中田教授）にご指導いただき、避難訓練および防災学習を行い、生徒と職員の防災力を高めてきた。

＜令和2年度の取組＞

・12月 職員防災研修

中田教授による講演後、授業中の発災を想定した目黒巻（災害発生時の状況シナリオ）を基に、ミニロールプレイでの机上本部訓練を行い、発災時の職員の行動を確認した。

・1月 防災避難訓練

授業中の地震と火災を想定し、生徒には事前に告知せず避難訓練を行った。また、簡易担架搬送訓練を行うと同時に、一部生徒を対象に、教室に煙を焚きその中を通過する煙体験を行うことで、発災時にも落ち着いて行動できる経験を培った。

・3月 防災リーダー研修

各種委員会3役と生徒会執行部を対象に、HUG訓練（避難所運営ゲーム）を行い、被災時には地域の防災リーダーとして活動できるよう意識付けを行った。

・『防災マニュアル』改訂、『防災だより』配布

上記の活動時に行ったアンケート結果と中田教授の助言を基に、防災マニュアルを全面改訂し、防災だよりを作成し配布した。

今年度も、全校生が一度に集まることが難しく、前期の避難訓練が中止となった。そこで、コロナ禍でもできる活動を模索し、楽しく防災を学べる機会になればと後期避難訓練に合わせて、災害協力シミュレーションゲーム「ダイレクトロード（海辺の町）」（以下、「ダイレクトロード」）を防災学習として行った。（注2）その際、引き続き本年度も中田教授に学校防災アドバイザーとしてご指導いただいた。

2. 具体的な取組

(1) 防災学習

「ダイレクトロード」を全校生対象に行った。その際、進行は録音した音声を用いて校内放送で行い、各クラスの委員長・副委員長・ボランティア委員の計5名をファシリテーター（進行補助）とした。ファシリテーターには、事前に同じ「ダイレクトロード」を行い、研修をした。

当日までに5～7人の班を作り、地図や情報カード、そして指示書を配布した。生徒は、それぞれが持っているカードの情報を組み合わせて、被災した状況を地図へ落とし込んでいく。状況が次第に分かりだし、「消火・避難・救護・救助」と書かれた指示書の内容を埋めていくというゲームである。

事後に行った生徒のアンケートには、それぞれの情報を組み合わせて協力するために、コミュニケーションをとることの難しさやその重要性に気付いた、という感想が多数あった。また、ゲーム性があることで、災害時の行動を楽しく学べたという感想も多く、防災を身近に感じてもらったという手ごたえを感じた。



▲ダイレクトロードの様子

(2) 避難訓練

昨年度と同様に、授業時の地震と火災を想定し、避難訓練を行った。1年生は、入学後初の避難訓練となるため、避難経路の確認を行うとともに、混乱と密を避けるため本部からの指示の順に避難する訓練を行った。

小・中学校では、発災と同時にグラウンドへ避難することが多いが、地震の場合は、校舎の被害状況を確認後の避難となることから、昨年度より行っている訓練方法である。事後アンケートによると、やはり指示がくるまで待機する時間に驚く生徒が多かった。

また、昨年度実施した際には、指示が来るまで何もせずに待機していた生徒がほとんどだったため、今年度はより実際に即した形で、緊急地震速報からシェイクアウト訓練を導入した。生徒は、身体の成長に伴って机の下には入りづらいことなどを実感していた。

(3) 煙体験・水消火器訓練

避難開始とともに、各クラス3名の生徒を対象に、一教室を煙で満たした中を進む煙体験を行った。昨年度は階段から遠い教室を使用した。今年度は階段近くの教室を使用し、実際に廊下にも流れ出るほどの煙の量を使用した。その際、煙に反応した階段付近の非常扉が正常に稼働し、正しい避難経路を選べば、非常扉により煙に巻かれず避難できることを確認できた。

煙体験に参加した生徒のアンケートからは、すぐ前にはずの自分の手も見えないほどの煙に、驚くとともに「実際に起こったら」と恐怖を感じた生徒もいた。

また、避難後にグラウンドにて水消火器体験を行った。中田教授から、火事の際に知っておくべきことは、「火事だ！火事だ！」と2回叫ぶことだ



▲煙体験の様子



▲火事を知らせる様子

と教えていただき、各学年から2名ずつの生徒が大きな声で「火事だ！火事だ！」と叫んだ後、水消火器を的に当てる訓練をした。

ほとんどの生徒が、まず消火器の使い方に意識が向く中、周りに知らせることが大切だというお話に、はっとしたという感想や、消火器の使い方が簡単そうにみえたという感想があった。



▲水消火器体験の様子

3. 成果と課題

(1) 災害時の行動確認

今回の防災学習と避難訓練により、生徒職員ともに、災害発生時について具体的に想像し、行動することができた。災害時の困難を想像することで、日頃の備えが重要であるという気づきを得る生徒も多かった。

(2) 反省点と課題

今回の避難訓練を通して、事前に確認していた職員間でも、緊急放送用機材に不慣れなための放送トラブルや、警報音による焦りから予定外の行動をしてしまう場面もあったので、繰り返し訓練を行うことで改善していきたい。

4. 今後に向けて

中田教授から「情報を早く正確に、知る・判断する・行動する」ことが大切だと伺った。アンケートにも、状況が違えばどうすればいいのか、など正解のない問いを抱いた生徒が複数名いたので、今後は、災害時に多くの人が抱えるジレンマについての防災学習を行いたい。

(注1) 紙面版ハザードマップさんだ(令和2年7月改訂)

https://www.city.sanda.lg.jp/kikikanri/documents/hm_zentai_r2_7_omote.pdf (表面)

https://www.city.sanda.lg.jp/kikikanri/documents/hm_zentai_r2_7_ura.pdf (裏面)

(注2) 神戸市消防局作成・神戸市公開
災害協力シミュレーションゲーム「ダイレクトロード(海辺の町)」

<https://www.city.kobe.lg.jp/a10878/bosai/shobo/bousai/directroad.html>

地域合同防災活動動画の作成

県立東播磨高等学校

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響で大人数での防災訓練の実施は困難と判断され、代替案として防災士監修のもと、PTAや自治会、生徒に数名協力していただき災害時の訓練動画を作成した。撮影は豊饒会館(本校同窓会館)で2日間行われた。1日目はアルファ化米の調理法から配膳、試食までを撮影した。2日目は運搬法、段ボールベッドの作成を撮影した。

2. 具体的な取組

(1) アルファ化米

①調理

PTA 5名に協力してもらい 50 人前のアルファ化米(キノコ味)の調理を行った。打合せとは違う種類のアルファ化米で途中撮影が止まることもあったが、説明書をよく読むことで無事に調理することができた。配膳のためにアルファ化米を容器に詰める人、お箸と輪ゴムをつける人、食品表示ラベルを貼る人に役割を分けて行った。水でも調理可能なアルファ化米だが、今回はお湯を沸かして使用した。

②配膳

入口から出口まで導線を作り、順番に配膳していった。間隔を保つために誘導する人、受け取る前に消毒スプレーを手に吹きかける人、渡す人に役割を分けて行った。

③試食

豊饒会館 2 階の広間で試食を行った。約 50 名の生徒に協力してもらい、すべて食べ切った。想像と違ったのか温かくて美味しいアルファ化米に驚いている生徒が多かった。

④感想

- ・キノコ味は苦手だけど、すごく食べやすかった。この機会に家でも非常食の準備はしておかないといけないと思いました。
- ・お湯だけでこんなにも温かい美味しいご飯が食べられるなんてすごいと思いました。



▲配膳の準備をしている様子

(2) 運搬法

①担架

生徒 8 名、自治会の方 2 名に協力してもらい担架による運搬法の撮影を行った。上げる時は頭側を少し早く上げ、下ろす時は足側を少し早く下ろすなど、ポイントを押さえながら実施した。初めての体験に生徒も少し緊張している様子が感じられた。また、担架を使って階段を上げる場合も想定して撮影を行った。担架が傾かないように下側に人が担架を高く持ち上げるのが大変で、生徒が「力がある男の子のほうがいい」等話をしていた。



▲担架で運搬法を実践している様子

②毛布

担架の代わりに毛布が運搬に使われた。毛布の中央に傷病者を寝かし端をクルクルと巻きハンモックのようにして持ち上げていた。

「こんな使い方ができるんだ」と驚いている生徒もいた。

③車いす

3名の生徒に協力してもらい、車いすに乗った状態での運搬を撮影した。絶対に持ってはいけない場所や持ち方等、ポイントを押さえながら実施した。また、段差があった時の上り方や降り方も撮影した。



▲車いすで階段を上る様子



▲段ボールベッド作成の様子



▲段ボールベッドの強度確認の様子

④感想

- ・毛布で人を運搬してみて、普通の担架よりは強度はないが、人を運ぶには十分だと思ったので実際に役立てたいと思った。
- ・正しい方法で運搬すると、思ったより軽々と持ち上げられました。知ることができて良かったです。

(3) 段ボールベッド

①作成

自治会の方4名、生徒5名の9名に協力してもらい作成した。土台となる段ボールを15個作り長方形に並べ、その上に板代わりの段ボールを乗せ固定した。10分もかからずに段ボールベッドが完成した。また、完成したベッドの強度を確認するために15名が段ボールベッドの上に乗ったが、問題はなかった。

②感想

思っているよりも短時間で簡単に作ることができました。完成したベッドに上る前は恐怖心があったけど、上ってみると強度が強くてびっくりしました。今日知ったことを周りに教えてあげたいです。

3. 成果と課題

(1) 成果

コロナ禍という理由で様々な行事が取りやめになってきたが、コロナ禍だからこそ工夫し、地域と連携して防災に対して取り組む事ができた。生徒の感想や地域の方々の意見を聞いても、改めて災害時に何をすべきか等が普段の訓練より理解することができた、といった意見もあり十分な成果を得ることができた。

(2) 課題

地域の方々との打合せの調整等が難しい。また、制作した動画をどのようにどの場所で配信等をしていくかが検討課題である。

4. 今後に向けて

今回制作した動画を学校においては、教室にて配信して防災教育に一環として展開し、生徒の知識理解を高める。また、地域と連携して小・中学校や役場など視聴ができる環境を整えて、学校現場から地域に防災に対しての取組を発信していく。

学校防災アドバイザーの活用

県立姫路商業高等学校

1. はじめに

本校は、姫路市の中部に位置し、商業科と情報科学科を有している。生徒は就職のみならず進学を希望する生徒も多く、進学者の多くは学業成績や商業検定の資格、特別活動実績などを利用して、学校推薦型選抜や総合型選抜などで進学し、国公立大学へも毎年20名程度進学している。就職については内定率100%であり、地元企業を中心に地域社会の人材育成として貢献している。

兵庫県の防災ジュニアリーダー合宿に平成31年度より参加し、防災ジュニアリーダーとして東日本大震災の支援活動や駅前での街頭募金活動、防災アクションプランとして、災害時の食の研究を行い、生徒向けに校内発表なども行ってきた。本年度は、2年生3名が防災ジュニアリーダーとして活動し、11月に高校生等防災ジュニアリーダー活動報告会に参加してこれまでの取組についてポスターセッションで発表した。また、校内においても、防災教育の講話や、阪神・淡路大震災追悼行事で防災ジュニアリーダーで身につけたことを発表した。

本校は姫路市の避難所に指定されており、自らだけでなく、他の人たちを支援しようとする意識や態度の育成も望まれる。その一方、地理的な課題として、本校敷地の北側、西側が山の斜面に面しており、校舎の大半が土砂災害警戒区域に、体育館西側及び、校舎北側の崖部分が土砂災害特別警戒区域に指定されている。このような状況の中で災害時には体育館が指定避難所になる一方、体育館裏の土砂崩れが起こる可能性もある。

今回、学校防災体制推進校の指定を受けることで、防災に関する講演・演習の実施、防災マニュアルの見直し等を行い、生徒・教職員の防災に対する意識を高め、実際に災害が発生したときに的確に行動がとれるよう備えなければならない。

2. 具体的な取組

(1) 防災・危機管理マニュアルの改訂

事故・災害等の発生時に生徒の安全を確保するためには、教職員が危機管理マニュアル等に基づいて、迅速・的確に行動することが不可欠である。そのため、学校の実情に適した現場で活用できるマニュアルを目指し、学校防災アドバイザーの兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科青田良介教授の助言のもと、見直しを行った。特に、災害時の行動例として、災害発生から安全確保及び点呼完了までのフェーズⅠと被害状況把握から生徒引き渡しまでのフェーズⅡにわけ、状況に応じた行動・業務をWBS（Work Breakdown Structure：作業分解構成図）の考え方をもとに作成した。災害発生時に全教職員が必要な事項を共通に理解することができるよう、併せて行動例や業務内容をフローチャートにして記載した。

(2) 防災ジュニアリーダーの活用

3名の防災ジュニアリーダーが年間を通じて活動を行った。7月には高校生等防災ジュニアリーダー学習会へ参加し、防災・減災について学習した。また、他校の生徒と意見交換やグループワークを行うことで、防災意識の涵養を図った。10月には校内防災LHRとして第2学年生徒及び教員に対して学習会の報告や防災クイズ、イスを使った搬送訓練の実演など、防災に興味をもてるよう、簡単で楽しくできるクイズ形式を取り入れて行った。1月には阪神・淡路大震災の校内追悼行事として、全校生に向けて震災の語り部としての講話、防災クイズを実施し、震災を知ることが防災の第一歩になるという考えのもと、映像や記録を駆使し「もし、自分が被災したなら…」と自分事として受け取れるよう工夫しながら語り部としての役割を果たした。

〇防災ジュニアリーダー感想

「僕たちの防災革命」

私たち防災ジュニアリーダーは、7月に神戸と淡路島での防災学習会に参加し、その中で語り継ぐことの大切さを学んだ。そこで、防災ジ

ユニアリーダーとしての活動内容を考えていく中で、「防災革命」と題して3つの計画（アクションプラン）を立てた。

【①防災準備革命②防災訓練革命③地域防災革命】今回は、1つめの防災準備革命として防災に関心をもってもらふこと、楽しく防災の必要性を伝えるためにはどうすれば効果的かを検討した結果、防災LHRとして、第2学年の学年集会で防災についてクイズをすることを企画し、実践する機会をいただいた。大変緊張したが、みんなが協力的に参加してくれたおかげで成功したと思う。11月には兵庫県内の中学高校生防災ジュニアリーダーたちが集まり、各学校が今までの活動報告を行った。他校の発表やポスターセッションでは、自衛隊の協力を受けた学校や非常食を作った学校、小学校に出前授業を行った学校もあれば、地域の人々と合同避難訓練を行った学校などもあった。各校とも防災について様々な活動を行っており、レベルも高く、学ぶことがたくさんあった。そんな中でも、自分たちの活動を他校の生徒にアピールすることができ、達成感を感じた。今後も防災ジュニアリーダーとして、語り部としての活動を行っていきたいと考える。



▲動画配信による震災追悼行事

(3) 防災講演及び演習（HUG）

12月に生徒向けに防災講演を実施した。学校防災アドバイザーの青田教授に①災害の被害を減らすためには②身近なことでできること③なぜ避難や備蓄が必要なのか④ボランティアとしてできること⑤被災者の気持ちをどのように理解するか5つについて講話をいただいた。いっどこで災害が起きてもおかしくない現状を踏まえ、高校生としてできることを考えたり、防災を正しく理解することで『防災』より『減災』の考えのもと行動するきっかけとなるよい機会となった。

また、教職員に対してはHUG（避難所運営ゲーム）の研修を行い、災害時に本校が避難所となったことを想定し、避難所の運営を疑似体験した。ゲーム体験を通して避難者の状況や配慮しなければならない点を把握し、それを考慮しながら短時間で適切に配置するよう判断し避難してきた人を誘導することの難しさを実感した。



▲HUG（避難所運営ゲーム）

3. 成果と課題

(1) 防災マニュアルの改訂

学校防災アドバイザー等の専門家の指導により防災マニュアルの見直しを行った。年間を通じて、防災マニュアルの改訂作業を行った。地域や学校実情に合った避難の在り方、不測の事態が発生した時の対応方法などを見直すことができたが、水害対応マニュアルを完成させることや、より実態に即したものと見直しを継続していく必要がある。また、避難訓練や防災教育等もより充実したものにする必要もある。

(2) 防災意識の向上

学校防災アドバイザーによる生徒を対象とした防災教育や、教職員を対象とした研修を開催、様々な場面を想定した避難訓練を複数回実施することで、教職員、生徒の防災意識の高揚を図ることができた。避難訓練については防災学習と連動させながら、様々な場面を想定して継続して行う必要がある。

4. 今後に向けて

避難訓練や防災教育を教育課程に位置付け、各教科・総合的な探究の時間・特別活動などと関連し計画的に実施していくことで、生徒の防災意識をさらに高め、自ら危険を回避できるように育てたい。また、高校生として防災だけでなく、ボランティアや減災に向けて今取り組めることを考え、より具体的な実践を考えていきたい。

命を守る学校防災体制づくりを目指して

尼崎市立わかば西小学校

1. はじめに

本校は尼崎市の南西部に位置する中規模校で、創立6年目を迎える統合校である。校区の南は海に、西は武庫川に面した海拔ゼロメートル地帯にあり、過去には台風や洪水による浸水被害も起きている。市のハザードマップによると、津波や高潮が起きた時には、大きな被害があるとされている。また、本校が立地する地区は高齢化率が非常に高く、30%を超えている。

これまで年3回の火災や地震、津波の避難訓練と年度初めの保護者引き渡し訓練を行ってきた。しかし、災害時に本当に子どもたちの命を守れるのか、防災体制はこれで十分と言えるのかという不安は常にあった。

そこで、児童をはじめ地域、家庭のすべての人の命を守る学校として、本校独自の学校防災体制づくりを目指した取組を行った。

2. 具体的な取組

(1) 避難訓練を見直す

避難訓練の実施にあたって、昨年までの訓練の見直しに再度取り組んだ。その中で、担任が引率した訓練はスムーズに避難行動ができたが、予告なし訓練では一部の児童が教室に戻ってしまい、教員の対応も遅れたことが問題になった。そこで、想定外の事態でも危険を予測して、自ら考えて対応できる力が児童や教員に身につく避難訓練を目指した。

学校防災アドバイザーからは、「災害時には自然に体が動いて避難行動ができる力と、臨機応変に行動できる力が必要である。両方がバランスよく身につく避難訓練計画を立てることが大切である」という助言をもらった。

1回目の火災避難訓練では、「お、は、し、も」などの基本を徹底して指導することにした。目的を絞ったことで、全校が同じ方向性で取り組むことができた。

2回目の予告なし訓練では、教員には自分の役割を確認するとともに、その場に応じて臨機

応変に行動するように事前に呼び掛けた。教員が積極的に動き的確な声掛けをすることで、児童も素早く避難行動をとることができた。事後は、児童と教員自身の行動の振り返りを行って、次にいかすことにした。

3回目の地震・津波避難訓練では、予告なしに階段の一部を通行止めにし、閉まった防火シャッターから避難するという設定をした。この計画は、どうすれば実際に役立つ避難訓練になるかを安全部の教員で何度も話し合っ立案をした。

児童は、校内の防災施設や避難用具についてビデオを事前に見ていたが、実際に使って避難する体験に真剣な表情で取り組んだ。

要援護者のサポートや人数確認の方法について課題も見つかった。しかし、「なぜ失敗したのか」、「どうすれば良かったのか」という意見を出し合い、様々な視点から訓練を見直して改善するという考え方を学ぶことができた。



▲避難訓練の様子（1階防火シャッター）

(2) 防災教育の実践

防災意識の向上は、将来起きると言われている南海トラフ巨大地震から命を守る備えの一つとなる。阪神・淡路大震災を体験した世代が高齢化し、記憶の風化が危惧される中、「自分事」として捉えさせることが課題となる。

児童の防災への関心・意欲を高める防災学習に取り組む学年もあった。4年生は社会科と関連させてクロスロードの授業を行った。児童は

災害時の状況を想像しながら、避難所で起こる問題をどのように考えて解決するのかを活発に話し合った。5年生は総合的な学習の時間に防災学習を取り上げた。公開授業では、非常持ち出し袋に自分だったら何を入れるかを考えて話し合った。その後、担任が用意した袋の中身を、全員が熱心に見つめてメモを取っていた。どの授業も、自分の思いや考えを進んで発表する児童の姿が見られた。

避難訓練の見直しからスタートした学校防災体制づくりの取組は、教職員及び児童の防災意識を向上させた。



▲総合的な学習（防災学習）

(3) 教職員研修-避難所運営ゲームHUG-

本校の避難所設営マニュアルの課題と改善方法を考えるために、HUG研修を行った。今年度は5名の教員を防災リーダーとしてHUGを行い、その様子を動画で記録した。

開始直後は、次々と来る避難者をどこに案内するか戸惑っていたが、ゲームが進むに従って避難者の状況に配慮しつつ、互いに意見を出して考えることができた。研修後には、ペット連れや要援護者の対応方法、避難所運営を移行していくため、避難者に協力を求めている内容等について、意見が出された。

学校防災アドバイザーからは、必要な支援に合わせた避難場所の配置や、避難者の中から人材を見つけて、スキルに応じて運営に協力してもらうことを教わった。

避難所運営のためには、基本的なルールを明確にして共通理解する重要性が分かった。



▲避難所運営ゲーム HUG の研修

3. 成果と課題

(1) 成果

学校全体として、防災意識の向上が図られたことが何よりの成果であった。避難訓練の見直しをきっかけに、防災を「自分事」として捉え、自分や周りの人の命を自分たちで守るという意識が高まった。そこから、「例年通り」を見直して改善することや、防災についてもっと学ぼうという気持ちが広がった。

教員の熱意が児童に伝わり、児童が真剣に取り組む姿が教員のさらなる熱意につながった。

全員が命を守るという目的をもって、一つになってきたと実感している。

(2) 課題

統合校である本校の校区には、3つの地域があり、地域によって防災体制も異なっている。

子どもたちはもちろん、地域や保護者の命も守る学校防災体制という目的のもと、本年度は3地域と学校が連携した合同防災訓練を計画していた。しかし、コロナ禍のために残念ながら中止になってしまった。

学校防災体制づくりをさらに推進しながら、学校を中心にして地域・家庭と協働しながら防災体制の整備を進めていくことが、今後の大きな課題であると考えている。

4. 今後に向けて

避難訓練については、今後も振り返りを大切にし、全員で意見を出し合って、より実践的な避難訓練に改善していきたい。また防災研修として、防災リーダーの教員を中心に HUG を全教職員で体験し、本校に最適な避難所マニュアル作りと避難所運営について検討を行っていく。地域・家庭との合同防災訓練を実施する際は、本年度の取組を紹介して学校との連携について理解と協力を求めていきたい。



▲震災に関する本の紹介（図書室）

推進校種別【学校防災体制推進校】

防災個人マニュアルの作成と防災体制の見直し

猪名川町立松尾台小学校

1. はじめに

本校では、年度初めに災害対応マニュアルの見直しを行っている。しかし、実態としては、役割分担の氏名変更にとどまり、細かな改善点の洗い出しをせず、軽く目を通して確認をする程度であった。そのため、果たしていざ有事の際に本当に一人ひとりが自らの役割を理解し、効果的に行動できるのかという不安があった。

今回、学校防災体制推進校の指定を受けるにあたり、災害対応マニュアルの根本的な見直しやマンネリ化していた避難訓練等を見直す機会として、以下の取組を実践した。

2. 具体的な取組

(1) 防災個人マニュアルの作成

今年度は、自校の災害対応マニュアルの見直しを行うことから取組を始めた。見直しの理由は上記で述べたように、これまでの災害対応マニュアルが実効性の高いものかが分からなかったためである。しかし、見直しを図るにも実際に災害が起こるまでは、その実効性の確認をする手立てがないため、マニュアルを見直すのではなく、新たに「防災個人マニュアル」を作成した。

防災個人マニュアルとは、「火災」「地震」「避難所」「不審者」の項目で、災害が起きた時の具体的な教職員の行動を明確に記したものである。以前のマニュアルでは、災害が起きた時の自身の役割を確認するだけにとどまっていた。また、避難訓練の前日にどのような動きをするのか、教職員間で何となく確認し合っているだけであった。しかし、防災個人マニュアルを作成することで、災害が起きた時に取るべき行動を教職員自身が常に把握できている状態にあり、防災意識の高まりを感じることができた。

第81町立松尾台小学校

2021年度 災害対応 個人マニュアル

グループ	教職員名	担任(学年)	専科等			
役割	火災・地震	防災班 (担任班長等の名前)	避難所	渉外	不審者	避難誘導 教員連携

災害時のあなたの役割	○火災 ①放送を聞き、避難経路を確認する。 ②児童を落ち着かせ、「お・か・し・も」を伝える。 ③人数を確認する。 ④隣のクラスと連携する。 ⑤児童を指揮して、安全に避難場所に誘導する。 ⑥人員点呼を行い、校長に報告する。 ⑦児童を安全な場所に誘導した後、消火活動の任務につく。	留意点 ・初任指導の先生がクラスに入られることが多いので、連携をする必要がある。
	○地震 ①机の下にかくれるよう指示する(机のあしをもたせる)。教室でない場合、ものが落ちてこない、倒れてこない、転がってこないところに身を寄せるように伝える。 ②放送を聞き、指示を出す。 ③出入口を確保する。 ④廊下に右の順2列で整列させ、人数を確認する。(頭を守るものがあれば、かぶらせる) ⑤隣のクラスと連携する。(人数がそろっているのかなど) ⑥児童を指揮して、安全に避難場所に誘導する。 ⑦人員点呼を行い、校長に報告する。	留意点 ・教師も必ず自分の身を守る必要があるのではないかな。 ・訓練であっても、頭を守るものがあるのではないかな。 ・適切な声掛けが求められる(窓ガラスの破片があること、避難経路が安全であるのかなど) ・逃げ遅れた児童は想定しているのか。 ・非常階段を使えるのか。 ・火災とのちがいを意識する。
	○避難所 ・情報収集 本部との連絡 避難者の誘導(体育館へ) ・避難者の名簿作り(入居時に作成) (氏名 住所 年齢 転居先住所 連絡先 健康状態)	留意点
	○不審者 ①放送を聞く。 ②教室の中で、不審者から遠いところに児童を集める。 ③教室のドアや窓を開める。 ④避難誘導をさせるのか、不審者をどのように食い止めるのかなど、隣のクラスと連携をとる。	留意点 ・さすまの担当を明確に決める必要があるのか。ある程度決まっておいて、臨機応変に動くのが良いかな。 ・体育館で授業をしている時の避難の仕方が分からない。

その他(気になることがあればお書きください)

▲防災個人マニュアル

(2) 地域合同防災訓練の実施

本校の災害対応マニュアルの中に、「避難所」での教職員の役割を記したものがある。しかし、ここでも不安な点が挙がった。「いざ災害が起きた時に、家庭を優先しないといけないかもしれない」「学校までの道のりが崩壊していたらたどり着けない」などである。このような不安要素から、教職員だけの避難所開設に限界を感じ、地域の人々の協力が必要であると考えた。そこで、地域の人々も交えた地域合同防災訓練を行った。この訓練では、地震を想定した避難訓練に加え、引き渡し訓練（１・２年生）や防災講習（３～６年生）も実施した。地域を巻き込んだ大きな取組を実施する中で、警察や消防

自衛隊の方からもお話をいただいた。また、学校のコミュニティスクール委員にも参加していただいた。改めて関係機関との連携について考えることができた。

本取組を通して、防災について地域へ発信するきっかけができたとともに、学校と地域の関係性や防災のあり方についても確認することができた。



▲地域合同防災訓練の様子

(3) 学校防災アドバイザーとの連携

今年度は、3度に渡り学校防災アドバイザーと学校防災体制についての協議を行った。その3度の協議では、「防災個人マニュアルの質をどのように高めていくのか」という点を中心に議論を行った。

その議論の中で、①避難訓練時、教職員自身の安全確保ができていないこと、②避難経路の安全が徹底されていないこと、③逃げ遅れた児童の確認ができていないことが挙げられた。今後は、その3つの課題を意識して、防災個人マニュアルに内容を追加していく必要がある。また、放送機器が壊れた想定で訓練を実施したり、教職員間の連携を意識したりと、これまでの課題を踏まえながら、3学期には、再度避難訓練を行う予定である。

今回、学校防災アドバイザーと連携することで、教職員だけでは気付くことのできない課題を見出すことができた。

3. 成果と課題

(1) 学校防災体制の推進

今年度、学校防災体制推進校として様々な取組を行うことで、2つの成果を上げることができた。

1つ目は、教職員の防災意識の高まりである。防災研修を通して、これまで現実に起きた事案

から地震の怖さを痛感し、今一度、命を守ることの責任の大きさを感ずることができた。また、防災個人マニュアルの作成やその見直しから、災害が起きた時の自身の行動を考え、教職員間の連携の仕方まで把握することができた。

2つ目は、地域とのつながりである。本取組を通して、コミュニティスクール委員の方など、地域の方々と話し合う場を設けることができた。それにより、災害が起きた時の地域との連携や避難所の開設など、学校だけでは解決できない問題も話し合い、地域に発信するきっかけができた。

(2) 防災教育の推進

今年度の取組を通して、1つの課題が明らかとなった。それは、児童の防災意識が低いことである。避難訓練を行った際に、児童から「何かあれば、先生の指示を聞くか、放送を聞けばよい」という声が聞かれた。その発言は間違っていないが、自分自身で考えて動くことや「自分の命は自分で守る」という意識が低いと感じられた。そこで、児童の防災意識を高めるために、1年生から6年生まで系統立てた防災教育のカリキュラムを作成する必要性を感じた。

4. 今後に向けて

今後に向けて、学校が取り組んでいくべきことが3つある。

1つ目は、校内防災研修を行うことである。今年度の防災教育の成果や課題を踏まえ、防災体制や防災教育を見直す校内研修を行うことで教職員間での共有を図り、防災知識の向上とともに、防災意識をより一層高めていきたい。

2つ目は、避難訓練の見直しである。例年とは違ったシチュエーションで行ったり、条件を変更したりして、教職員も児童も常に危機感を持って臨めるようにしたい。それにより、いつどこで地震が起きても、教職員・児童ともに安全に避難できるようになると考えられる。

3つ目は、防災個人マニュアルの見直しである。研修や避難訓練から見えてきた課題を踏まえ、マニュアルに内容を追加したり、変更したりしていく。それにより、より実効性の高いマニュアルにしていきたい。

地域性を反映した防災体制の構築

播磨町立播磨中学校

1. はじめに

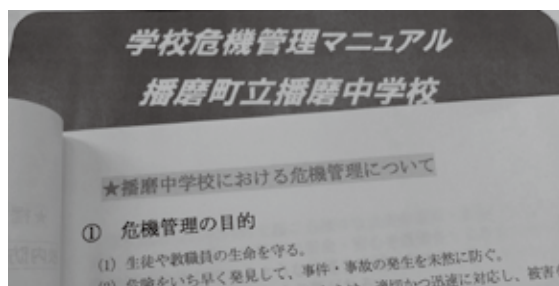
本校は兵庫県播磨地方南部に位置する全 17 学級の中規模校である。校舎は喜瀬川沿いにあり、校区西部には水田川が流れており、校区にはため池が点在している。今年度は「学校防災体制推進校」に指定され、学校防災アドバイザーの指導・助言を受けながら学校防災体制の見直し、検討を行ってきた。主な取組として、地域性を反映した防災体制を構築するための防災マニュアルの見直し・検討、学校防災アドバイザーを講師に教職員向け研修会の実施、地域・関係機関と連携した防災訓練等を行った。

2. 具体的な取組

(1) 防災マニュアルの見直し・検討

地域性を反映した防災体制を構築するため、学校防災アドバイザーの指導・助言を踏まえ、防災マニュアルの見直し・検討を行い、主に以下の点について改善した。

- ・防災マニュアルのレイアウトを見直し、冒頭に目的・方針を述べるページを追加した。
- ・播磨中学校周辺の災害リスクに関する資料提示ページを増加した。
- ・現状の災害対策用具・備蓄品の保管場所を一覧表にして提示した。
- ・災害発生時に生徒が帰宅できているかの安否確認方法を見直し、学校ホームページに安否確認のリンクを貼ることにした。
- ・津波発生時の避難場所を見直し、従来は大中遺跡公園に避難することになっていたものを、本校の校舎 3 階以上に避難することにした。



▲防災マニュアルの見直し

- ・熱中症対応を見直し、シャワーやプールで体を冷やすという項目を追加した。

(2) 教職員向け防災教育研修会

本校の防災教育をより充実させるため、学校防災アドバイザーを講師に教職員向け防災教育研修会を実施した。主に以下の点について指導を受けた。

- ・本校周辺の災害リスクについて
- ・地震の被害発生メカニズムとその対策について
- ・防災における学校の役割について
- ・教職員自身と自宅の防災対策について
- ・熱中症対策について
- ・防災対策に取り組む難しさについて



▲防災教育研修会

(3) 防災訓練の実施内容検討

学校防災アドバイザーからアドバイスを受けながら防災訓練の実施内容を検討して、以下の点等を改善して実施することにした。

- ・計画では、訓練用緊急地震速報の発信後に放送で机の下に潜る等の指示をすることになっていたが、指示なしで生徒が自主的に避難行動をとれるかを試し、できなかった場合は指導する。
- ・生徒が校舎外に避難した後、校舎内に逃げ遅れた者がいないかを確認する役割を担当する教職員を設ける。
- ・今回は授業中の災害発生を想定して訓練を計画したが、今後は休み時間中や清掃時間中等の災害発生を想定した訓練も検討していく。

- ・今回は町役場・教育委員会、消防署と連携した訓練を計画したが、今後は地域自治会や消防団とも連携した訓練も検討していく。

(4) 地域・関係機関と連携した防災訓練実施

本校生徒・教職員が防災対策について知識を深め、危機管理能力を向上させるため、学校防災アドバイザーから助言された改善点を取り入れて町役場・教育委員会、消防署等の地域・関係機関と連携した防災訓練を、以下の内容で実施した。

- ・訓練用緊急地震速報を発信して、生徒が自主的に避難行動をとれるかを試す。
- ・担当教職員が避難経路の安全確認をして職員室へ無線で連絡する。
- ・緊急訓練放送での指示を受けて、全校生徒・教職員が危険箇所を回避しながらグラウンドに避難して集合・点呼する。
- ・担当教職員が、逃げ遅れた生徒がいないかを確認・連絡する。
- ・教職員・消防署員が連携して負傷生徒の救助、応急処置をした後、救急車で搬送する。
- ・火災発生を想定して、屋上に取り残された教職員をはしご車で救助する。(はしご車が他所へ出動したため中止)
- ・消防署員による消化器の取り扱い説明後、生徒・教職員代表が水消化器を使って消火訓練を行う。
- ・消防署代表による防災訓練の講評と防災の心得について訓話を聞く。



▲消防署と連携した防災訓練

3. 成果と課題

(1) 成果

- ・学校防災アドバイザーの指導・助言を踏まえて、本校の防災体制、防災マニュアルの見直し・検討を行い、地域性を反映したものに改善することができた。

- ・学校防災アドバイザーを講師に防災教育研修会を実施して、本校教職員が防災対策についての知識を深め、防災教育の指導に活かすことができた。

- ・町役場・教育委員会、消防署等の地域・関係機関と連携した防災訓練を実施して、本校生徒・教職員が防災意識を高め、危機管理対応能力を向上させることができた。

(2) 課題

- ・毎年度、地域の災害リスクを十分に考慮して防災マニュアルの見直し・検討を行い、さらに万全な防災体制を構築していかなければならない。
- ・今年度は、授業中の災害発生を想定して防災訓練を実施したが、今後は休み時間中や清掃時間中等の災害発生を想定した訓練も実施して、生徒や教職員の危機管理対応能力をさらに向上していかなければならない。また、地域自治会や消防団とも連携した訓練も計画していかなければならない。
- ・大災害が発生して本校が避難所となった場合の体制を見直し、シミュレーションや訓練を検討していく必要がある。

4. 今後に向けて

今年度は「学校防災体制推進校」に指定され、学校防災アドバイザーの指導を受けて防災体制の見直し・検討を進めることができた。ただ、本校は瀬戸内海沿岸に位置しており、「南海トラフ巨大地震」などが発生した場合は大きな被害が発生すると考えられる。本校の生徒・教職員や地域住民のかけがいのない生命・安全を守るために、今後さらに地域性を反映した防災対策の研究を進め、より万全な防災体制を構築していかなければならない。



▲水消化器による実演

児童も教職員も体験し「考える」ことを大切にした取組

小野市立大部小学校

1. はじめに

本校は人口約5万人の小野市にあり、全校児童約340名の中規模校である。市内の西側には南北に加古川が流れており、加古川の東側900mに本校がある。避難所に指定されており、加古川に氾濫の危険がある際には住民の方が避難してこられる。

本校には詳細な避難所運営マニュアルがある。しかし、避難所運営を経験した者は少なく、実際に避難所を運営するイメージを持てている教職員も少ない。そこで、学校防災アドバイザーによる避難所運営ゲーム「HUG」を職員研修で取り組むことにした。

また、本校は避難訓練を年に3回実施している。しかし、詳細に避難経路や一人一人の動きを想定していたことで、実際に火事や不審者の場面が見える位置にいるにも関わらず、マニュアル通りに動き、避難が遅れることがあった。また、教職員同士がコミュニケーションを図る場面がないことが学校防災アドバイザーより指摘された。そこで、上手くいくための避難訓練から、考えて行動し、課題をあぶりだす避難訓練になるよう取り組んだ。

児童においては大きな震災を体験していないため、起こりうる避難所生活のイメージがなく、自分にはあまり関係のないことと捉えているようであった。そこで、震災が起こった際の避難所生活等を疑似体験することで、自然災害や防災について考えられるようにし、防災意識が向上するように取り組んだ。

2. 具体的な取組

(1) 職員研修

避難所運営に関する様々な疑似体験ができる避難所運営ゲーム「HUG」を行った。避難者それぞれが抱える具体的な事情等が書かれたカードを使い、どう対応していくのかをグループで考え、話し合っ



▲避難所運営ゲーム（HUG）

避難所運営ゲーム後、講師の学校防災アドバイザーである兵庫県立大学の青田良介教授に助言をいただいた。トイレの位置、パーソナルスペース、ペット、住んでいる地区、発熱の人、赤ちゃん、妊婦、性別等を意識することなど、新たな視点を得ることができた。避難所運営のイメージを持つことができ、避難所を運営する際に起こるかもしれない想定を増やすことができた。

避難所開設は今まで他人事のように考えていたと実感しました。自分事としてとらえることができたのは、大きな一歩だったと思います。できることをしていけばよいとか、加点方式で考えると、防災ではなく減災を目指していくなど防災教育をより身近に捉えられるようになりました。これからいつ起こるか分からない自然災害に備えて日々の生活を見つめ直したいと思いました。今日の経験を子どもたちにも伝えたいと思いました。

▲教職員の感想（HUG）

(2) 避難訓練

教職員同士のコミュニケーションを増やし、状況から教職員自身が考えて行動できるように、避難経路、及び、火事や地震の発生直後から避難までの詳細なマニュアルは提示せずに避難訓練を行った。避難した経路と避難訓練の自己採点、その点数の理由を事後の振り返りとした。

事前に児童と一緒に考える場面が増え、火元の確認放送よりも先に火元が分かるなど、自分の置かれている状況から考え、行動しようとする

家庭科室から一番離れた経路を取るために、西校舎へ移動し、きらきらクラブ横を通り避難しました。（2年生とは別ルートを選択しました。）事前学習をいかすことができた点や、火元が分からなかったので子どもたちといろいろシュミレーションができた点が良かったです。

▲教職員のふりかえり

(3) 自然学校における取組

5年生では、学校において避難所体験を実施した。将来起こりうる自然災害に対して、自ら考えて判断し、身を守る行動をとるための、防災の知識と行動力を身に付けることを目的とした。体育館に段ボールでパーティションや段ボールベッドをつくり自分たちの過ごす空間をつくったり、アルファ化米などの非常食を食べたりした。児童は以下のような感想をもった。

- ・凝り過ぎてパーティション作りを時間内に終わらせることができませんでした。災害時には、なるべく早くパーティションを作らないといけないとわかったので、周りから見えにくくするなどの最低限の工夫でいいことがわかりました。
- ・非常食はおいしくてびっくりしました。本当の災害時に、あたたかくておいしいご飯が食べられたら、きつとうれしいと思います。



▲段ボールで避難所体験

(4) 防災体験学習

6年生は市役所や消防署、姫路河川国道事務所の協力を得て、防災体験学習を行った。そして、体験したことを家族と話し合うことで、保護者や地域の人も防災について考える機会をつくり、防災意識を高めることを目的とした。児童は以下のような体験をした後、家庭で保護者と話し合った。

- ・ボタン一つで車体が広がり災害時対策本部になる災害対策車や照明車の見学
- ・洪水時における水位をシュミレーションにて確認
- ・水消火器を使って噴射訓練
- ・火災時の煙体験や給水車からの給水体験や照明車の見学



▲給水車からの給水体験

家の防災用品の保管場所について確認しました。毎年年末に食料の賞味期限を確認するので一緒に見てみようと思います。どんなものが入っているかも話をしました。避難場所の確認もしました。今回の体験の話を聞いて、災害時の行政の対応準備のことや最新の設備を知ることができました。そして、個人での備えの大切さを改めて感じました。

▲保護者の感想

3. 成果と課題

避難所運営ゲーム「HUG」をすることで、様々な想定をイメージできるようになり、避難所運営のための視点をもつことができた。しかし、多様な人が避難してきて運営が難しい状況は理解できたが、円滑に運営できるまでのイメージは持っていない。近年の異常気象を考えると、線状降水帯の発生等により加古川が氾濫することを想定し、避難所運営のイメージを教職員間で共有しておく必要がある。

避難訓練では、教職員は状況に合わせて考えて行動しようとし、教職員同士の避難訓練中のコミュニケーションが増えたが、迅速で安全な避難のためにはより多くのコミュニケーションが必要である。

児童は体験することで避難所生活をイメージしやすく、自分のこととして捉え、考えることができた。しかし、家庭での取組に差があるため、学校での学びをもとに家庭で話す機会が増えるようにしていきたい。

4. 今後に向けて

「考える」場面をより多く設定した訓練や研修をこれからも行う必要がある。そして、具体的に避難誘導や避難所を運営する場面がイメージでき、実際に直面した際には自分で状況を判断し、考え、行動できるようにしたい。また、異動によりメンバー構成も変わるため継続した取組が必要である。

いざという時に動ける組織を目指して ～防災意識を高める取組～

神河町立寺前小学校

1 はじめに

本校は、山と川に囲まれ自然豊かな農山村地帯に位置している。校区には、市川（2級河川）と、峰山を水源とした蜚の飛び交う美しい景観の小田原川が流れている。校区が非常に広く、標高差も大きい。

豊かな自然に恵まれた環境であるが、近年増加している未曾有の自然災害や地震に備え学校防災体制を一層強化していくことが急務であった。今年度、学校防災体制推進校の指定を受け、学校防災アドバイザーによる指導のもと防災体制を見直す機会をいただいた。

2 具体的な取組

(1) 生きる防災マニュアル

8月6日、学校防災アドバイザーの関西国際大学 田中綾子先生に来校いただき、本校の防災マニュアルについて指導助言をいただいた。

災害発生時に、防災マニュアルがいかされるための工夫点として、立地場所において災害時に予想される状況を想定しておくことが大切であること、災害発生前→発生直後→避難所→学校再開までの長期視点を、関係者で情報共有しておくこと、災害時の校内設備の使用計画を立て、すべての職員が対応できる組織を目指すことなどを助言いただいた。

(2) 防災意識を高める職員研修

10月18日、『自然災害に備える小学校の防災』について田中先生から研修を受けた。

研修会においては、まず、防災教材「クロスロードゲーム」に取り組むことにより、自分ならどうするかという判断について、職員同士が情報共有を図ることによって、優先順位の重要性や避難所運営の在り方を考えていくことができた。また、ハザードマップや映像により、水害等の災害を想定して、学校や職員がどう動くべきかを学ぶことができた。

研修を通して、田中先生から、①災害発生時

の行動の優先順位の提示が重要である。②緊急対応時に職員が揃うことは難しく、全員のチーム力が必要である。③様々な責任と混乱の中、少しでも事前にできる準備をしておくことが大切である。④職員の意識づけによってマニュアルの問題に気づき、改訂につなげることが望ましい等、職員の防災意識の向上につなげることができた。

(3) 避難訓練から考える防災体制

1月17日ひょうご安全の日に、地震による火災を想定した避難訓練を実施し、田中先生には、避難活動、救助活動、消火活動の全体を参観していただいた。その上で児童に対して1.17の意味や防災について話をしていただき、また、職員に対しては防災体制についての助言をいただいた。



▲避難訓練の様子

今年度の避難訓練では、怪我をして動けない教師1名を救助（誰がどこで救助を待っているかは、防災担当のみが知っており、トランシーバーを使って救助班が探すところから訓練）した。

田中先生からの助言では、非常時の対応について、教師一人一人が自分の役割を細かく覚えておくよりも、全職員が非常時の動き方や状況について把握できるような体制づくりをすることが大切であることや、自分が担当している役割と違う役割のことも、誰でもできるような組

織にしておくことが重要だと教えていただいた。また、大きな災害になると避難で終わらず、次はすぐ避難所運営となるので、住民と協力し合う地域防災も大切になってくるとの助言をいただいた。



▲防災アドバイザー田中先生
による児童への講話

2022年 1月 17日 寺島小学校
()年()組 名前()

今日の避難訓練や地震についての学習について、感想を書きましょう。

今日の訓練は、百点満点で何点でしたか？ (85)点
放送は最後まで聞けましたか？ (〇)・いいえ (〇)
しゃべらずに、避難できましたか？ (〇)・いいえ (〇)

今日避難訓練をして、訓練のおかげで大切な
地震について勉強しました。そして災害があ
った時どう助け合って復興につなげるのかも
勉強しました。今日の避難訓練をいかり
生かして生活していきたいです。

▲防災学習・避難訓練後の児童の感想

(4) ICTを活用した児童引き渡し

今年度4月に引き渡し訓練、そして、7月に気象警報発令により児童引き渡しを3回行った。昨年度まで児童全員を体育館に集めて保護者に引き渡ししていたが、本年度は密を避けるため、地区ごとに教室に分かれて迎えを待つことになっていた。しかし、7月の1回目に電話の対応、引き渡しの対応にと職員が迫られる事態となり、改善しようと反省をもとに話し合った。

2回目は、タブレット端末を活用し、保護者からの電話内容を、共有をかけたジャムボードに記録することにした。このことにより、地区担当は、各教室でタブレット端末を見ながら状況を把握でき、連絡事項を児童に伝えることができた。また、各教室の児童の引き渡しを終え

た後に「完了」をジャムボードに表示させることで、引き渡し終了を職員室へ伝えることができた。このことにより、学校全体の情報共有をスムーズに行うことができたため、ICTが児童引き渡しにおいても有効であることを、職員全員が身をもって感じる事ができた。

3 成果と課題

(1) 職員の防災意識の向上

今年度推進校の指定を受け、学校防災アドバイザーの指導を受けたことにより、職員の防災意識が高まったことが挙げられる。防災担当が提案するマニュアルや訓練計画において、自分の担当や役割だけを把握するだけでは十分ではない。組織として、児童を守り全体が円滑に動くために、一人一人が全体を把握し、危機管理意識を持つことが重要であることを学ぶことができ、そのような動きをしようと心がけていることが成果であると言える。

(2) 地域防災の充実

職員研修でのクロスロードゲームで、学校が避難所になった時の対応、避難所運営の難しさを職員それぞれが感じ、思いを共有することができた。いざという時に学校再開に向け、地域に味方となってもらえるようにすることが大切との助言もいただいた。地域との防災訓練や共同での計画などがこれからの課題である。まずは、子どもたちの命を守るために自校の取組をさらに充実させ、その上で地域防災も充実させていきたい。

4 今後に向けて

今年度、学校防災体制の推進校の指定を受け、学校防災アドバイザーの田中先生や播磨西教育事務所の防災教育専門推進員から、災害時の危機管理や学校運営・避難所運営等についての研修を受け、指導助言をいただいたことで、職員それぞれの防災意識を高めることができ、本校防災体制の見直しの第1歩を踏み出すことができた。今後は、関係者（神河町役場、保護者、地域の自主防災組織等）との協力と情報共有により、地域との連携をすることで、地域の防災意識を高めていきたい。

自治組織をもつ地域の防災拠点として

赤穂市立坂越小学校

1. はじめに

赤穂市立坂越小学校は、南に瀬戸内海、北に清流千種川、と自然に恵まれた場所に位置している。校庭の南側は八祖山が児童を見守るようにそびえ、東西北は古くからの住宅が軒を連ねている。児童数 178 名、1 年生以外は全学年 1 クラスの小規模校であるが、宅地開発により、児童数は増えている。

川より低い位置にある本校区は、昭和 51 年に水害に見舞われており、学校が避難所となった歴史がある。児童に「自ら考えて命を守る力」を身に付けさせるとともに「地域の避難所」としての備えも必要である。

2. 具体的な取組

(1) 地域自主防災活動（防災訓練）への参加

坂越小学校が立地している上高野地区は、「自分たちの地域は自分たちで守る」をキャッチフレーズに、災害に強いまちづくりを目指している。自治会が防災計画を作成し、「自助」、「共助」を着実に実行するための取組の一つとして、7 月 10 日に自主防災訓練が行われた。自治会の住民全員が小学校からほど近い坂越地区体育館で受付を済ませ、被災者やその家族の状況に応じて、避難所を割り振られるというもので、小学校も避難所の一つとなっている。今回は新型コロナウイルス感染防止のため、「受付をする」という活動に限定して行われた。



▲自治会防災訓練に参加する児童家族

管理職と担当がこの訓練に参加し、児童、家族の避難の様子や、人員配置、協力体制について確認した。今回、高齢の避難者も多く、様々な面で配慮がなされている様子に共助の重みを感じた。また、スタッフの動きも考え尽くされており、避難所運営に地域スタッフは欠かせないと実感した。

(2) 防災マニュアルの見直し

本校では、災害対応マニュアルの一部に「避難所としての対応」を記している。自主防災組織をもつ地域の避難所として、学校の果たす役割をより明確に示し、実効性のあるマニュアルにしておきたい。

そこで、学校防災アドバイザーの人と防災未来センターの河田慈人主任研究員をお招きし、助言をいただいた。地震、洪水、土砂崩れ等、どの災害においても、学校は地域の避難所となるということを前提に、①児童と地域の方の避難が、同時進行していることを考えること。②地域との連携を視野に入れ、連携箇所について、地域スタッフと相談して示しておくこと。③教育活動再開を想定した部屋の開放や、そのレイアウトを検討しておくこと。主にこの 3 点を中心に見直し、再構成する必要があることが分かった。

(3) 「地域の避難所」を意識した避難訓練

2 回目の防災アドバイザー招へい時は、自主防災組織を運営されている門田守弘様、播磨西教育事務所防災教育専門推進員も同席され、地域の避難所として学校が果たす役割と、連携すべき内容について協議した。学校が避難所になった場合は、自主防災組織のスタッフが学校の援助を行い、職員とともに設置・運営にあたることとなった。学校再開後の自治組織づくりもそのスタッフを中心に行う。市の危機管理部局には連携の内容を情報提供した。

また、この地域に実際に起こりうる災害と、その状況を想定した避難訓練の在り方についても検討した。それを受け、職員会議で「洪水

による川の増水と土砂災害」「2階以上への避難」「地域住民も学校に避難しに来ている」という想定の実演を提案した。しかし、これまでは「地震→津波→屋上」が決まりごとであり、教職員には戸惑いの声が多かった。結果、地震のシェイクアウト訓練と洪水・土砂災害の訓練は分けて実施した。地域住民として幼稚園児も参加した。幼・小とも迅速に避難することができた。



▲千種川上流から大水。高い所へ避難

(4) 兵庫の子、坂越の子として

坂越小学校では、毎年1月17日に阪神・淡路大震災追悼集会を行っている。今年は、黙祷と防災アドバイザーによる講話を実施した。「1.17を語りつぐ これからの自分にできること」をテーマに話をいただいた。



▲忘れてはならない1.17の教訓

「人と人が知恵と力を合わせて課題を解決し、困難を乗り越えていくのが、防災のひとつの考え方。そのためには普段から、自分と違う立場や考えの人の意見を聞いておく。」

児童の振り返りには、防災を自分事として捉えた意見が多く見られた。自分や周りの人々の

安全なくらしのために何ができるかを考える良い機会となった。

3. 成果と課題

(1) 成果

防災に対し、熱意のある方が地域におられることは大変心強い。今回、自治組織との連携を図ることができ、スタッフ派遣を想定したマニュアルの改定や、避難者用校舎配置図の作成、ハザードマップから土地の事情をリアルにイメージした避難訓練ができたことは大きな成果であった。また、地域の避難所設営からは、ルールづくりやスタッフの役割分担等を学んだ。河田先生が児童に話してくださった通り、違う立場で見たり考えたりされている方々との出会いは、教職員の固定観念を覆し、視野を開く糸口となった。

(2) 課題

学校の教育活動は多岐に亘り、つい「防災」は後回しになりがちである。何も起きない、大丈夫だろうと、例年の型にはめ込んだマニュアルや避難訓練で満足してしまう。今回の事業を受け、改めて学校防災について見直すと、様々な不備不足があり、いざというときに機能できる状況にはなかった。学校全体の防災への意識を高め、体制づくりを進めていきたい。

4. 今後に向けて

坂越小学校を避難所として利用する「坂越浦」と呼ばれる地区の住民は1050人程度だと聞いている。児童の教育活動に支障を来さぬよう、児童の授業再開までに避難住民が自主運営できるようサポートしていくことも、避難所となる学校の役割であることを今回知った。教職員の担うところ、地域、市部局の担うところを明確にし、学校の作成しているマニュアルを共有したい。また、学校が持つ防災倉庫の物品等も住民に情報提供しておき、安心材料の一つにしたい。

学校は、児童の命と安全が第一である。そのことは常に心に置きながら、児童も、地域の方とともに「自分たちの命は自分たちで守る」ことのできる、安心・安全な地域づくりの拠点としての役割を担っていく。

地域の人との「きずな」を基盤とした学校防災体制の充実

香美町立奥佐津小学校

1. はじめに

奥佐津小学校は、標高 31m に位置し、三川山をはじめとする山々がそびえ立ち、その頂から佐津川が日本海へ流れる南北に長い地形を持つ校区である。香美町洪水ハザードマップによると、地域には幸徳寺をはじめ 12 カ所の一時避難所と 2 カ所の避難所があり、本校も避難所に指定されている。地域には急傾斜地崩壊危険箇所が多く、地滑り危険箇所もある。

本校では、これまで年 3 回の地震・火災に対する避難訓練と、年 1 回の震度 5 弱以上の地震が起こったことを想定した引き渡し訓練を行ってきた。また、1 月には阪神・淡路大震災、3 月には東日本大震災の追悼集会を開き、併せて防災学習に取り組んできた。これらの訓練等は全て併設園と合同で実施してきた。しかし、地域と連携した訓練の実施や、防災教育への地域人材の活用はできていない。児童数の減少により完全複式学級である本校においては、職員数が少なく、災害が発生した際の対応が困難になる状況が想定できる。したがって、避難訓練や防災学習を地域とともに行うことは、喫緊の課題であった。

2. 具体的な取組

(1) 学校地域防災チームの編成

地域と連携した避難訓練・防災学習を進めるには何から始めればよいか、第 1 回の研修会で学校防災アドバイザーである兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の澤田雅浩准教授（以下防災アドバイザー）から助言を受けた。そして、まずは地域の方とチームを作ることからスタートすることにし、地域の自主防災組織、消防団、保護者などに声をかけた。また、「必ず女性も含めて男女で行うとよい。」というアドバイスをいただいたため、PTA 会長（女性）と学校の住所地の婦人会代表にも加わっていたき、チームを編成した。

こうして組織した「学校地域防災チーム」の

第 1 回会議を 9 月 27 日に開催し、本年度の活動についてご意見をいただいた。

その後、11 月 17 日の防災訓練、1 月 17 日の防災学習の事前・事後に会議を開き、地域と連携した活動の実施と充実をめざし、取り組んだ。この取組により、これまで学校と関わりがもてていなかった地域住民とのつながりができ、今後の活動への展望が広がっている。



▲第 1 回学校地域防災チーム会議

(2) 避難訓練と防災訓練

学校地域防災チーム会議の中で、「毎年 8 月末に実施している町の防災訓練に児童も参加しているが、消火器等を使った訓練をしても前に出てこない。」という実態をお聞きした。

そこで、「火災の避難訓練を行い、その後、地域の方と一緒に『消火器を使った消火活動』訓練を行ってどうだろうか。」という案が出された。消火栓を使った訓練となると多くの人手が必要となるが、消火器の訓練ならば、香美町消防団奥佐津分団の 3 名の防災チームメンバーの対応で可能であるとのことで、実施を決定した。

当日は、防災チームを含め 17 名の地域の方の参加があり、児童・園児のほとんどが地域の方とペアになって訓練することができた。また、実施にあたっては、美方広域消防本部香住分署の予防係にも協力をいただき、火災の避難訓練についての助言をいただいた。

事後の研修会で、防災アドバイザーより、「今回訓練に参加されたのは、平日の昼間に学校の近くにおいて、助けてくれる方である。そのことに価値がある。」とご指摘いただいた。



▲地域の人と消火訓練に臨む子どもたち

《児童の感想》

○おじいちゃんといっしょにしょうかきをもって、うまくまにあてられてうれしかったです。
○消火器を初めて使いました。本当に使うことがあった時は、「自助」を忘れずやりたいです。

今後につなげていくために、「年に1度は地域とともに防災訓練をしていく。」というような方向性を示し、様々な場の設定を工夫していくことが必要である。

(3) 地域から学ぶ防災と防災給食

1月17日は、兵庫県民が忘れてはならない大切な日として、自助・共助、心のケアなど、様々な視点から毎年防災学習を行ってきた。本年度は、地震発生時の避難訓練の後、防災食として子ども自身でできる「大根の即席漬け作り」と、児童会のリードで「応急処置法（けがの手当て）」の学習をした。また、その後、防災士の講話を聞いた。

「即席漬け作り」では、1・2年生が生活科の学習で栽培していた大根を使った。大根をピーラーでむき、それを切って塩昆布と混ぜ、密閉できる袋に入れ、しばらく冷蔵庫に置くだけでできる簡単な漬物である。新型コロナウイルス感染症対策として、自分の分は自分で作るようにした。講師として来ていただいた地域の方にアドバイスをいただいたり、難しいところは手伝いをさせていただいたりしながら、各自で漬物を作った。「自分の命は自分で守る」「みんなの命をみんなで守る」ために、火が使えなくてもできる食の体験ができた。

香美町在住の藤原道久防災士には、「地震や気象災害に備えよう」というテーマで講話をしていただいた。いつ起こるかわからない災害に備え、今からできることを一つずつしていくことが防災・減災につながることを学んだ。

昼食は、「防災給食」として、各自が家から持参した塩味だけのおにぎりとお湯を注いでできるカップの味噌汁、そして、自分で作った大根の漬け物を味わった。避難所で出されるお

にぎりは温かい状態ではないことから、あえて家からおにぎりを持ってくることにした。また、カップの味噌汁を食すことで、温かい食べ物の有難さも感じ、27年前の震災の際の人々の思いを少しでも体感できたのではないかなと思う。



▲大根を使った「即席漬け作り」

《児童の感想》

○1・2年のそだてた大こんでおいしいつけものをつくって、みんなにこにこしてたべていてうれしかったです。
○防災士さんの講話で聞いたように、いつでも災害が来るかもしれないと思い、気をつけながら過ごしていきたいです。

3. 成果と課題

(1) 地域と連携した防災体制の確立について

今年度、校区内の関係者にご協力いただき、「学校地域防災チーム」を編成することができたのは、大きな成果である。これを来年度以降につなげ、地域とともにできることを少しずつ増やし、防災体制を充実させていきたい。

(2) 多様な自然災害に対応することについて

近年ますます多様化・深刻化する自然災害に対し、児童・職員の安全のために、その時々で最適な判断ができるよう、普段からシミュレーションし、訓練の検証によって防災マニュアルを改善するなど、PDCAサイクルを実行していくことが必要である。

4. 今後に向けて

防災アドバイザーより計画当初から、「訓練は成功させなくてよい。流れ解散にせず、必ず振り返りを行う。普段のまちづくり活動との接続を意識することが重要である。」とアドバイスを受けてきた。そのことを大切に、2・3学期にかけて前述の取組を行ってきた。

今後も「学校地域防災チーム」を通してできた様々な人とのつながりをいかし、「地域の人とともに」「一人でも多くの命を守ることができる」学校防災体制をめざし取り組んでいきたい。

地域の実態に合わせた防災体制の見直し

新温泉町立浜坂東小学校

1. はじめに

本校は、平成 15 年（2003 年）浜坂町学校再編成に伴い、4 校が再編され、浜坂東小学校として開校した。地区は 11 地区である。南は標高 650m 余りの久斗山地区、北は日本海に面する三尾地区まで広大な校区を有している。海と山の自然に恵まれ、古くからの歴史に彩られた地域である。

校区のほとんどの地区が、浸水想定 0.5～3.0 m 未満であり、中には、3.0～5.0m 未満の地区もある。また、すべての地区が、土砂災害警戒区域や土砂災害特別警戒区域内に位置したり、隣接したりしている。避難場所や避難所が警戒区域内にある地区も少なくない。本校舎の裏山も、土砂災害特別警戒区域となっている。

過去の災害では、昭和 38 年の豪雪により 8 人の方が亡くなる雪崩の被害があった。また、平成 2 年の台風 19 号により、校区内の久斗川が氾濫し、住宅の床上浸水や道路の寸断など甚大な被害が生じた。

これまで本校では、学期に 1 回の避難訓練を行ってきた。以前は、火災、地震・引き渡し訓練、不審者対応を想定して行っていたが、前述のような地域の特性を踏まえ、近年では、洪水を想定した避難訓練を実施している。洪水の場合は、垂直避難が可能であるが、土砂災害の場合は、直近の避難場所（2 か所）まで徒歩で約 30 分かかり、そのどちらへ行く場合も橋を渡らなければならない。大雨で、洪水と土砂災害の両方の危険性がある場合、どのように避難するかが課題となっている。

2. 具体的な取組

(1) 教職員の防災意識啓発のための防災マニュアルの見直し

8 月 24 日（火）、学校防災アドバイザーの兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の森永速男教授に来校していただき、警備防災計画（避難確保計画）や避難訓練の改善などについて

て指導・助言を受けた。内容は以下のとおりである。

○マニュアルについて

- ・全体的に分かりやすく計画できている。
- ・マニュアルに教職員の役割分担が書かれているが、授業中のものなので、授業中以外はどうするかを明記する必要がある。
- ・役割分担の表の横に、各自の目標や結果の反省を書く欄を増やしたものを作り、避難訓練の前後に教職員に書いてもらうとよい。
- ・避難方法のフローチャートを作り、普段目にするところに貼っておくと児童に定着する。
- ・個人マニュアルを作成し、名札の裏につけて活用することで、職員の役割を定着させることができる。

○避難訓練について

- ・ありきたりな避難訓練では、訓練の大切さが児童や教職員に伝わらない。抜き打ちや残留児童がいるなど、毎回想定を変えて実施することが必要である。
- ・非常時の組織及び役割（児童看護、救護、警備、搬出等）を毎年変えて、教職員に様々な役を経験させることで、一人一人の防災意識が高まる。
- ・避難訓練では、職員同士が情報を共有すること（「階段は大丈夫。」「残留児童は理科室にはいない。」等、大きな声で伝え合うこと）が大切である。
- ・避難訓練をイベント化し、地域の人にも来てもらい、どのような連携ができるか考えてみるとよい。

○避難所運営について

- ・避難所運営では、教職員が実際に運営可能かという視点で考え、住民主体でやっていけるよう意識改革が必要である。

(2) 自分の命を守るために必要な心構えと備え・行動等についての講演会

11 月 5 日（金）、児童・教職員・保護者を対

象に講演会を開き、「逃げるが勝ち！備えるが勝ち！」と題し、森永教授にご講演いただいた。地震が起きた時には、その時に居る場所によって対応の仕方が違うことや、災害に備えること、災害から逃げることの大切さを教わった。

- ・津波が来たら家族にもかまわずにみんなが“てんでんばらばらに”一人で高い建物や高い所へ逃げる必要がある。自分の命は自分で守れ。「逃げるが勝ち！！」
- ・阪神・淡路大震災では、亡くなった方の約7割の人が圧死・窒息死である。このことから、地震が人の命を奪うのではなく、建物・家具が命を奪ったと言える。備えを忘れているから災害になる。「備えるが勝ち！！」
- ・大雨・洪水等は、備えられる災害である。気象情報を見て、避難することができる。
- ・災害時には、自助と共助が大切である。避難した時、困っている人がいたら、自分には何ができるかを考えなければならない。



▲講演会の様子

(3) 避難訓練に対する指導・助言

1月18日（火）、地震・津波を想定した避難訓練での教職員の動きに対して指導・助言を受けた。



▲避難訓練の様子

〈臨場感のある訓練にするために〉

- ・声を大きくすること。（実際の災害現場はざわついている。人数報告や避難経路の安全確認報告についても、もっと大きな声で情報共

有しなければならない。）

- ・個人マニュアルを作成し、役割以外に何ができるかを考えさせ、実際にやってみてできたかどうかを検証し、次にいかす。
- ・マニュアルには最低限のことしか書いてない。教職員はそこからさらに考えて行動することが大切である。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ・防災教育の専門家である学校防災アドバイザーにマニュアルを点検してもらうことで、今まで知らなかったことや見落としとしていたことに気づくことができた。
- ・「訓練は失敗をもとに見直していく。」という示唆をいただき、避難訓練を計画する上での意識を変えることができた。
- ・「津波てんでんこ」「自助・共助」等を教えていただくことにより、災害時の行動や「自分の命は自分で守る」ということを子どもたちにはっきりと意識づけることができた。
- ・洪水や土砂災害の時の避難行動の仕方や、新温泉町のハザードマップを活用することの大切さ、学校にいる時は先生の指示に従って動くことの必要性等を子どもたちに理解させることができた。
- ・保護者や地域の方にも講演を聞いていただき、地域主体の避難所開設や避難所運営に向けての一步となった。

(2) 課題

- ・警備防災計画（避難確保計画）で指摘のあった事項の追加や、フローチャートの作成・掲示等を進める必要がある。
- ・地域住民や町防災部局との連携を推進し、地域の実態に合わせた防災体制の強化をともに進めていかなければならない。

4. 今後に向けて

森永教授から指導・助言いただいた内容（①授業中以外の教職員の役割分担のマニュアルへの明記、②避難訓練の自己点検票の作成、③個人マニュアルの作成、④臨場感のある、教職員の自発的行動が試される避難訓練の実施、⑤避難訓練のイベント化による地域との連携等）を教職員全体で共通理解しながら、確実に進めることが重要だと考える。

学校の災害特性に応じた避難訓練と防災マニュアルの見直しの取組

丹波篠山市立西紀北小学校

1. はじめに

本校は、丹波篠山市の北部に位置し、周囲を多紀連山の山々に囲まれた自然豊かな地域にある。児童数は34名（令和4年1月現在）の一級へき地指定校である。校舎の東側には山々があり、西側には川も流れている。校舎は比較的地盤が固く、高い場所に建てられているため、市の避難所にも指定されている。

2. 具体的な取組

(1) 西紀北小学校の災害特性の把握

7月29日（木）第1回目の校内研修で、学校防災アドバイザーである神戸地方気象台の小林和樹防災管理官から学校周辺で想定される災害についての講義を受け、どのような校内防災体制の見直しが行えるのか教職員で意見を交流した。

講義では、丹波篠山市の地形図や災害マップで学校の災害特性である土砂災害の起こり方や起こった場合の被害想定について学んだ。

意見交流を行う中で、本校の地理的な状況を踏まえた避難訓練の見直しの必要性が挙げた。従来から行ってきた避難訓練に加えて、学校の特徴に合わせた避難訓練を行うことで児童も教職員もより実践的な力を高められると考え、2学期に土砂災害を想定した避難訓練を行うこととした。また、大雨・洪水警報の危険度分布を知ることができる「キキクル」についても学んだ。

学校周辺の雲の動きなどがよくわかり、局所的な豪雨などの場合に、学校としてどのような動きをとればよいのか考える材料の一つとして活用していけると考える。

(2) 避難訓練（土砂災害）

第1回の校内研修を受けて、校内で土砂災害を想定した避難訓練を行った。学校防災アドバイザーだけでなく、市役所の防災担当者の方にも参観していただき、備蓄品や避難所運営などについてアドバイスをいただいた。

大型台風の影響で大雨となり、安全が確認されるまで引き渡しも困難であるという状況を想定した。第1回の校内研修時の小林防災管理官のアドバイスを受け、山からの距離が最も遠くにある校舎西館2階の最も端にある教室を避難場所とした。同教室がこれまでの避難訓練で避難場所となるのは初めてであった。

避難完了後、児童に土砂災害への備えについて指導を行った。併せて、地震が起こった時の避難する場所が違うことを知り、児童だけでなく教職員にとっても災害によってどこに避難すれば安全であるかを考える良いきっかけとなった。

訓練終了後の校内研修では、土砂災害により、学校が避難所になった場合を想定して、毛布や水などの備蓄品を備えつけておくことも検討した。このように専門家や関係機関等との連携を図り、学校の防災体制の見直しができた。



▲避難訓練（土砂災害）

(3) 避難訓練（地震）

第3回は、阪神・淡路大震災が起こった1月17日前後に地震に関する防災教育を実施するのに合わせて、地震を想定した避難訓練を実施した。訓練の実施に際して以下の2点を工夫した。

1点目は、事前学習の充実である。訓練実施の1週間前から、学年ごとに身の守り方や避難経路の確認等を行った。教職員が身の守り方や避難の仕方を実演した動画を作成し、児童たちに見せた。その後、実際に身を守ったり、避難したりする練習を行った。2点目は、訓練内容の工夫である。避難経路に障害物を置いて通れないようにしたり、逃げ遅れた児童がいたりする状況を設定し、児童だけでなく教職員も考えて避難できるようにした。

近くに教職員がいなくても自分たちで考えて避難する訓練となるよう、児童が様々な場所にいる掃除の時間帯に訓練を行った。訓練の時間帯は児童には知らせていなかった。事前学習によって児童は基本となる避難経路を確認していたため、訓練で障害物により通れない場合でも、安全なルートを考えるなど、臨機応変に対応して避難することができていた。

訓練終了後、参加した教職員で振り返りを行い、学校防災アドバイザーや市の防災担当者、市教育委員会指導主事等から指導・助言を受けた。



▲事前学習で身の守り方を指導

(4) 災害対応マニュアルの見直し

学校防災アドバイザーによる指導・助言を受け、災害対応マニュアルの見直しを行った。特に、勤務時間外における出勤について、明確な基準を設けて、誰もが判断しやすいようにした。また、新たに、今年度取り組んだ避難訓練をもとに土砂災害発生

時の教職員の役割分担や避難場所を示した。

3. 成果と課題

(1) 成果

①避難訓練の見直し

本事業を通して、学校防災アドバイザーから学校の災害特性や災害の仕組みについて指導を受け、教職員全体で改めて災害の恐ろしさを共有したことで、児童の防災意識を高めたり、知識を身につけさせたりするためにどのような訓練が必要なのか考えることができた。今年度実施した避難訓練を終えて児童の感想には、「避難するのは地震や火事の時だけじゃないんだ。」「災害によって避難する場所が違うんだ。」「もしもこの教室にいるときに地震が起こったら、あそこを通ろう。」とシミュレーションする児童が多くみられ、新たな災害への気づきや防災・減災への意識が高まった。

②災害対応マニュアルの改訂

本事業での学校防災アドバイザーによる指導や避難訓練により、学校の防災体制について改めて再確認する機会となった。特に勤務時間外における出勤等の基準を明確にすることや役割分担、対応の流れを可視化することは、非常時により迅速に動くために重要だということが分かった。

(2) 課題

本事業を終えて、災害対応マニュアルの見直しを行ったが、全てが見直せたわけではない。今回学んだことをもとに、誰もが分かりやすく、活用しやすいものに変えていくことが必要である。

4. 今後に向けて

来年度以降の取組としては、工夫した避難訓練の継続である。放送機器が使えない場合や休み時間に起こった場合など、様々な「もしも」を想定した訓練を行い、児童だけでなく教職員の実践力を高めていきたい。また、災害対応マニュアルについても、継続的な見直しを行い、より学校の災害特性にあった内容へと変えていき、活用しやすいマニュアルにしていきたいと考える。

教職員の危機管理意識を高め、防災体制の充実に向けた取組

洲本市立洲浜中学校

1. はじめに

本校は、淡路島の中ほど大阪湾に面した洲本市の市街地に位置し、洲本川の河口に面している。過去の台風では教室や体育館が浸水被害に遭ったこともあり、南海トラフ巨大地震や津波に備えるため、昨年度は防災教育授業実践推進校、今年度は学校防災体制推進校の指定を受け、取組を進めている。今年度は、災害発生時に教職員がどこにいても対応できることを目指し、実効性の高いマニュアル作り、教職員の動きに重点を置いた避難訓練の実施等、学校防災体制の充実に向けて取り組んだ。

2. 具体的な取組

(1) 自校を知る

防災体制を充実させていくためには、大前提として「自校を知る」ことが重要であると考え、以下の2点に取り組んだ。

① 全教職員による防災設備等の確認

令和2年度、防火・避難設備の場所や使い方、避難経路の確認を全教職員で行った。毎年避難器具の配置図や避難経路図を紙面で確認はしているが、本校勤務年数が長い教員でも、すべてを把握できていなかったことが明らかになり、改めて、避難経路や避難器具の場所・使い方を確認する必要性を実感した。

令和3年度も校舎案内を兼ねて、転入職員を対象に防災担当者が中心になって行った。

② 過去の被災状況の確認

過去に本校が被災した浸水や地震の被害状況を全教職員で共有した。

【平成16年10月20日(水)台風23号】
○当日(10月20日)
6:00 大雨洪水暴風波浪警報発令(臨時休校)
12:00 避難所開設(地域住民7人本館1階に避難)
15:00 運動場・中庭 冠水
16:00 校舎1階・体育館・電気室・ポンプ室 冠水
17:00 停電、本館水道 使用不能
0:00 水が引き、電気室の応急復旧 電気使用可能

○翌日(10月21日)

- ・台風被害により臨時休校
- 【平成25年4月13日(土)午前5時33分頃淡路島地震】
- ・棚や書架の転倒(職員室・図書室・PC室等)
- ・渡り廊下や校舎壁面に亀裂

▲過去の災害における学校の状況

(2) 災害を知る

① 校内研修(豪雨時の避難のタイミング)

「豪雨災害時の学校の災害対応を考える」ことをテーマに、本校のアドバイザーでもある兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の阪本真由美教授による研修を行った。

【講義内容】

- ・危機管理の考え方
- ・避難する際の状況及び判断の根拠となる情報
 - ー気象庁「予警報」「キキクル」等
 - ー国土交通省「指定河川洪水予報」等
 - ー市町村「避難情報」等
- ・避難行動の考え方
 - ー立ち退き避難
 - ー屋内での安全確保
- ・豪雨災害の特徴

【演習内容】

- ・目標：災害時の教職員、児童の命を守る。
- ・過去に豪雨被害を受けた学校の状況(立地や規模等)、気象警報等の情報をもとに、以下の点について班ごとに協議し、交流した。
 - i) 子ども・教職員の帰宅か、学校待機か、判断した時間とその根拠
 - ii) 対策案(帰宅/待機)の利点と欠点
 - iii) 最良策は何か

【指導助言】

- ①後追いではなく、先を想定して行動する
- ②リスクを過小化しない
- ③どの情報が大切なのか知っておく

- ・在校中に豪雨災害が想定される場合、どのように情報を収集し、どの情報に基づき判断するの

か、下校時の安全対策、待機時の避難対策、保護者への連絡方法と事前の災害対応への理解促進等について、平時から検討し、備えておくことが重要である。

② 校内研修（防災マニュアルの見直し）

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の浦川豪准教授にもご指導いただき「実効性の高い」マニュアル作りに向けた研修を行った。

【本校の防災マニュアルの課題】

- ・組織体制が一律で柔軟性に欠けている。
- ・役割が曖昧でやることが明示されていない。

【改善策】

- ・WBS（Work Breakdown Structure）の活用

中学校教職員行動例 設定：生徒が在校時に地震発生			
業務	まとめ仕事	仕事の流れ（※）は備考欄参照 フェーズ① 地震発生～安全確保及	
管理職＋ 全体統括	1 対策本部を立ち上げ、 情報を収集する。 （職員室等）	1	授業者以外の教職員を、本部（教頭等）
		2	各担当場所を決め、2人1組で情報収集（※）
		3	戻ってきた教職員から情報収集（※）し、
		4	外部からの情報（※）を収集する。

▲WBSの一例（県教委「学校防災マニュアル」）

【演習内容】

- ・本校の「生徒引き渡しにおけるWBS」を読み合わせ、班ごとに追加・修正案を出し合い、全体交流を行った。

【参加者の感想】

- ・風水害以外の災害を想定して考えたい。
- ・WBSに沿って、実際に引き渡し訓練をしたい。
- ・WBSは、誰といつ連携するのかがよくわかる。

【指導助言】

- ・意識啓発に向けた学校全体での『実地訓練』も必要だが、各担当が見直しを行うための『機能訓練』を行い、組織全体として役割相互の関係性の検討、情報伝達やその方法についての確認を行うことが大切である。

(3) 防災体制の見直し

① 避難訓練の工夫

【想定】（年3回実施）

- ・地震・津波（高台・垂直避難）、火災避難
- ・授業中、休み時間等での発災

【教職員の訓練に重点】

- ・消火、負傷者の搬出・救護への対応の検証
- ・初期対応のフロー図の職員室での掲示

【防災教育専門推進員からの助言】

- ・避難経路やけが人等の情報を本部報告後、でき

るだけ素早く全職員で共有する。

- ・ブラインド訓練を実施する。
- ・想定を変え、様々な状況で訓練を行う。

② 学校防災マニュアルの見直し

管理職・各学年防災担当に加え、アドバイザーの阪本教授、市教育委員会防災担当で、本校の防災マニュアルの見直しを行った。改善点は、以下のとおりである。

- ・具体的な行動手順が必要である。
- ・災害発生直後の初期対応と学校災害対策本部が確立後の初期行動は別なので、マニュアルに災害対策本部設置時期を記載する。
- ・地震発生時の対応については、避難解除時の判断基準や手順を記載する。
- ・避難所としての学校の対応について、行政が行う対応と重複している部分があるので、学校の対応は、市の対策本部が到着するまでの対応と生徒への対応を記載する。

▲防災マニュアルの改善点

3. 成果と課題

学校の防災体制を充実させるために、まず、全教職員で「自校を知る」ことから始めた。学校の防災設備を把握できていなかったことや過去に学校がどんな被害に遭ったのかを知ることで、教職員に緊張感が生まれた。次に、「災害を知る」取組を進めた。災害時の行動を教員一人一人がシミュレーションし、検討する機会を持つことで、教職員の危機管理意識は確実に高まってきている。

避難訓練や学校防災マニュアルについても、専門的見地から多くの指摘を受けられたことで、改善点や見直しの方向性が明らかになった。災害に備えた事前準備、様々な想定での避難訓練、教職員による災害ごとにWBSの作成等、課題は山積している。さらに、見直したマニュアルについても検証をしていく必要がある。

4. 今後に向けて

本校の防災体制の充実に向けた取組は、まだまだ始まったばかりである。今年度の取組を全教職員で検証・改善しつつ、様々な災害・状況における対応の検討を重ね、より実効性の高いマニュアル作りや避難訓練の実施に向けて、さらに取組を進めていきたい。

危機管理意識及び判断力・行動力の向上を目指して

淡路市立学習小学校

1. はじめに

本校は淡路市北東部に位置し、西に津名丘陵、東には大阪湾を臨む細長い平野のほぼ中央に位置している。豊かな自然に恵まれた環境の中、地域の産業としては漁業・農業、特に花卉栽培が盛んである。近年、新興住宅や新しい集合住宅が建ち並び、住民の数も増加傾向にある。

巨大地震が発生した場合には、淡路市は最大震度6強の強い揺れに襲われ、沿岸部を中心に建物が全壊するなどの被害が想定されている。津波被害も予想されており、本校でも防災マニュアルの作成・共有は勿論、地震や津波、火災、暴風雨災害等を想定した避難訓練についても計画的・継続的に実施してきた。

本事業では、学校防災体制の充実を目指した校内研修の機会を設けるなどして、全教職員の危機管理意識や判断力の向上が図られるよう、そして、学校防災マニュアルや訓練の実施方法に見直しと磨きをかけることで質を高め、実践・実動につなげることができるよう、学校防災アドバイザーの指導・助言をいただきながら取組を進めた。

2. 具体的な取組

(1) 防災意識の向上と体制の充実を目指す

学校防災アドバイザーと本市危機管理課職員を校内研修の場に招請し、防災マニュアルの見直しに向けて、教職員間で意見交換や共通理解を図る機会をもった。その過程で、専門的な知識や経験をもった方からも評価や見解、アドバイスを伺うことができ、教職員間の役割分担や連携を改めて確認することができた。

ともすれば作成・配布に終始していた防災マニュアルを、十分な時間をかけて丁寧に見直す絶好の機会となっただけでなく、参加者全員による活発な意見交流が行われる中で、表層的な共有ではなく内実に関わる共通理解、意識合わせができたと言える。このことが、全教職員の危機管理意識を高めるきっかけにもなった。

(2) 困り感が生じる想定・訓練を仕組む

教職員の判断力や実行力・行動力の向上と、訓練そのものの質を高めることを目指して、管理職及び防災教育担当者以外には無告知とした地震・津波想定避難訓練を企画・実施した。そして、この訓練の様子を学校防災アドバイザーにも内密に観察いただき、事後にはその感想や新たな課題・改善点などについての助言をいただいた。

アドバイザーからは、火災の発生や行方不明者・負傷者への対応など、無告知での実施にもかかわらず、各職員が自分の役割を解って適切に動くことができていたとの評価をいただいた。大声で情報をつないだりトランシーバーで連携したりといった「子どもたちの命を守るための訓練」に必死で取り組む姿が印象的で、そういった真剣な大人の姿勢は子どもたちにもしっかりと伝わっているといった励ましの言葉も頂戴した。

一方、校舎の造りや校内の備品に関して、地震の揺れに耐えられないであろうガラス製の棚等の存在や、避難の妨げになる可能性の高い設置物等について指摘していただいた。さらには、高台への避難ルートของ安全についても問題点をご指摘いただき、再検討の必要性を指導いただいた。この点については、直ちに別ルートの模索を開始し、全教職員による検討・協議を経て、別の避難経路を新たに加えることとした。



▲地震・津波を想定した避難訓練

(3) 教訓を風化させないために語り継ぐ

「震災を考える集会＜1.17の集い＞」のプログラムに、EARTH員で阪神・淡路大震災の被災者でもある防災教育専門推進員から、防災・減災につながる体験談や講話を伺える場を設定した。これは、地震の恐ろしさを知って理解するだけでなく、災害から立ち上がる苦労や努力、それらを支えてくれていた方々の存在、さらには命の尊さについても気づかせていただけるものであり、これから自分たちが何を準備し、どう生きればよいのかを主体的に考えるきっかけとなった。

- ・大きな地震が起きると、食べ物も水もなくて困る人がたくさんいることがわかりました。わたしが心に決めたのは、おたがいに助け合うことです。
- ・地震はいつくるか分からないから、日頃からの準備とか家族との話し合いがすごく大切だと思いました。
- ・地震、津波は本当に怖く、恐ろしいことだと思いました。周りの人たちと協力して助け合う、前もって備えておく、そういったことがとても大事だと深く理解することができました。
- ・学校での避難訓練が多いけれど、学校以外の場所ではどこに逃げるかなどを常に考えておかないといけないと思いました。
- ・もし地震などが起きた時には、迷わずにすぐに判断しないといけない。自分の命は自分で守ります！
- ・地震は忘れたころに来るから、今の私たちが受け継いでいかなければいけないと思います。過去から学び、最善を尽くせるように日々生きていきたいです。



▲児童の振り返りより（一部抜粋）

(4) 巨大地震3日後の避難所運営をシミュレートする

災害時における避難所開設に関しては、学校防災アドバイザーの指導講話だけでなく、より具体的な実践につなげることをねらったワークショップによって、学びを深めた。

これは、災害時に備えるための或いは災害後の学校職員が担うべき役割や使命などについて、個々の職員が自分事として考える貴重な機会となった。また、できるだけ早い段階での「学校再開」を目指した対応・取組が、わたしたち教職員には求められているということの新たな気づきや共通理解も得ることができた。



▲ワークショップの様子＜校内研修＞

3. 成果と課題

(1) 危機管理意識の向上と内的動機の維持

多くの人でマニュアルに目を通し意見交流ができる場を設定できたことは、マニュアルの共通理解のみならず教職員各自の防災意識向上にもつながった。

また、学校防災アドバイザーをはじめ、防災専門推進員や防災部局の方々にも指導や助言をいただけたことで、例えば防災マニュアルや避難訓練の実施方法に関して、何をどのように修正すればよいかが明確になり、同時に継続すべき良い点を明らかにすることもできた。

さらには、全教職員が、防災体制の充実と災害発生時における児童等の安全確保行動に向けた共通理解のために、そして、自分自身の危機管理意識の向上とモチベーションの維持を図るために、自分事として研修や訓練に臨めたことにも大きな達成感を感じている。

(2) 再考によるマンネリからの脱却

教職員が主体的に判断し、的確な指示を出したり迅速に対応したりしなければならないような想定を、訓練の中に数多く仕組むことができた。その中で不具合を体験し、いくつもの不手際や失敗もあったことで、自分たち教職員が修正すべき課題を発見できたことは大きな成果である。また、訓練に臨む自分たちには直接見えにくい部分について、第三者である専門家の目から俯瞰的にみて、客観的な評価をしてもらえたことの効果は非常に大きいと感じている。

4. 今後に向けて

巨大地震が発生した場合には、淡路市においても大きな揺れと液状化が生じ、津波避難行動にも影響を与えるものと考えられる。そういった災害発生時には、多くの住民が学校に避難してくることを想定し、地域や保護者、専門機関などとも連携した防災訓練の実施や避難所運営の体制づくりを、具体的に検討していく必要がある。

また、不審者対応につながるような研修計画と実践的な訓練の実施についても、数年来必要性を感じながら未だ実施には至っておらず、この点についても課題を共有しながら全教職員で協議を重ね実現を図っていきたい。

オリジナルの防災マップをつくろう

宝塚市立長尾台小学校

1. はじめに

本校は、宝塚市の東部に位置し、宝塚市に加え、川西市飛地である満願寺町からの通学が可能な学校で、校区も川西市と隣接する地域にある。また、標高 173m の高台に位置し、東方に大阪平野（北摂）を一望できる。校地面積は、裏山が含まれるため市内最大で自然環境に富んでいる。しかし、校舎の一部が裏山と隣接した建造物となっているため、宝塚市の防災マップでも土砂災害の警戒区域に指定されている。

本校の防災に対する取組としては、毎年 5 月に火災を想定した避難訓練、10 月に引き渡し訓練、1 月に地震を想定した避難訓練を実施するが、消防とタイアップしているのは 5 月の火災想定避難訓練と 6 月の救命講習のみだった。

そこで、今年度、防災教育授業実践推進校の指定を受け、学校防災アドバイザーの助言を受けながら、土砂災害を想定した避難訓練の実施と事前学習及び 5 年生において防災マップの作成に向けた実践を行った。

2. 具体的な取組

(1) 土砂災害を想定した避難訓練の実施

第 1 回目の学校防災アドバイザーの訪問日に市の防災マップを確認後、本校の危険な箇所を実際に見ていただいた。その後、校舎の配置図をもとに、蜜を避けながら、児童をどの経路で、どこに避難させるのがよいか検討を行った。

検討した避難経路図をもとに、避難訓練案を作成し、学校防災アドバイザーの第 2 回の訪問日に、線状降水帯の発生による土砂災害を想定した避難訓練を実施した。



▲避難場所に避難している様子

(2) 避難訓練前の事前学習の実施

土砂災害を想定した避難訓練の前に、各学年の発達段階に合わせて、事前学習を実施した。

学 年	内 容
1 年生	「土砂災害から命を守る方法」
2 年生	「がけ崩れについて学ぼう」
3 年生	「地域の危険を知ろう」
4 年生	「土砂災害を防ぐ施設を知ろう」
5 年生	「土砂災害から命を守ろう」
6 年生	「土砂災害について知ろう」

1 年生は、「ながあめと 2 ひきのかえる」の紙芝居を、2 年生は、土砂災害防止広報センターの HP にあるがけ崩れの動画を、それぞれ授業の導入に使用した。まとめでは、「はなちゃんのはやあるきはやあるき」の絵本を使用し、避難訓練の大切さを伝えた。

3 年生では、県の防災マップの写真を使用して校区で土砂災害の危険がある場所について知り、写真の記号が表している意味を学習した。そして、校区の特性災害である土石流の動画（土砂災害防止広報センターの HP）や「がけ崩れを知ろう」の DVD を使用して、本校で起こる可能性のあるがけ崩れについて学んだ。

4 年生では、土砂災害を防ぐ「砂防えん堤のはたらき」の動画（土砂災害防止広報センターの HP）を使い、5 年生では「学ぼう BOSAI（NHK for school）」の「土砂災害から命を守ろう」の動画を導入に使用し、「ブラザーズドッグ」の絵本でまとめを行った。

6 年生では、導入に「土石流災害に備えて」（土砂災害防止広報センターの HP）を使用して自分だったら、いつ避難するのかを考えさせた。

どの学年でも、市の防災マップや土砂災害の際の避難方法、校舎内の避難場所については、共通した内容で指導を行った。



▲担任による事前指導の様子

(3) 5年生の取組

『オリジナルの防災マップをつくろう』

子どもたちに防災や災害のことを自分のこととして考えさせるために、身近なところから危険性を考えるようにさせた。初めに自分の部屋の写真を撮り、どういったところに危険があるのか、友だちと意見を交流することで様々な角度から考えていくことができた。次に今までとは違う角度で校舎の中を歩き、危険な箇所を写真で撮り、何が危険なのか意見を交流した。校舎の外にも目を向け、危険な箇所を探し、もし災害が起こったらどのように行動するのかを考え、意見を交流していった。

長尾台小学校区では土砂災害の危険が指摘されているため、もし起こればどういった状況になり、どのように行動すればいいのか動画などを見せ、避難の仕方など意見を交流し、考えを深めた。また3・4年時に学習した武庫川・逆瀬川の砂防工事についても治水という観点で学習を深めた。

また、校外学習の機会を利用し、「人と防災未来センター」「野島断層保存館・北淡震災記念公園」三田市の「青野ダム」へ行き、実際に見たり、治水対策の話を聞いたりすることで学習を深めた。さらに体験者の話を聞き、災害をイメージし、自分たちのオリジナルの防災マップをつくるための学習に取り組んだ。

実際に自分の住んでいる地域の危険な場所の写真を撮りに行ったり、おうちの人や地域の人

に話を聞いたりした。また、市の防災マップと比べながら、オリジナルの防災マップの作成を目標とした。今までにない校区の防災マップ作成を通して、防災は自分たち一人ひとりの課題であることを意識させるためである。

防災マップの作成の研究授業では、始めに校区の白地図に危険な場所・避難経路・役立つもの・人・店・会社などを色鉛筆で記入し、自分のオリジナルマップを作成した。避難場所・避難経路については市の防災マップのイエローゾーン・レッドゾーンを意識し、考えていった。避難目標地点について、避難場所だけでなく、地域で設定している避難地も確認し、マップに記入していった。また、早くできた児童には、速さの公式を使い、避難する時間を高齢者の速度をもとに考えさせ、マップに記入していった。

次に、同じ地域のグループに分け、そのグループで発表・意見交流させた。研究授業で取り組むことで、たくさんの先生にインタビューすることができ、より詳しいマップにすることができた。パワーポイントの資料も発表用に作成し、視覚的にも分かりやすいマップと資料を作成した。学習のまとめとして、5年生最後の保護者参観で発表し、保護者と一緒に防災について考えるよい機会になればと考えている。

【児童の感想】

- ・防災の勉強をする前は身の回りの危険を見ていなかったけど、歩くときに身の回りを見て歩くようになった。
- ・家の後ろに山があるので、家族と避難場所を決めた。地震や大雨などの災害について家族と話をした。
- ・家具を固定するなど、色々な工夫をしていこうと思った。
- ・避難場所だけでなく、避難地があるのだなということが分かった。
- ・怖いだけでなく、自分の命を守ったり、他の人の命を守ったりするためにはどうすればいいのかということまで考えないと、乗り越えられない、命は守れないことが分かった。

3. 成果と課題

(1) 避難訓練の実施について

実際に避難訓練を実施する中で、避難したもの、非常階段につながっていないなどの校舎の構造上の課題も見えてきた。また、今回初めて実施した土砂災害想定での避難訓練では、訓練のための訓練のようになってしまった。

学校防災アドバイザーからは、実際を想定し、安全対策本部の設置や危険箇所の目視の確認、消防・市教委・保護者への連絡、引き渡し訓練を兼ねて行う等の助言をいただいた。来年度からの訓練にいかしていきたい。

(2) オリジナルの防災マップの作成について

自分でオリジナルのマップを作ることで、災害を自分の事として捉えることができたことが一番の成果である。災害や防災については、他人事ではなく、自分事として捉えてほしかったためインタビューなどの時間を増やした。実際に施設見学や現地で体験した人に話を聞き、手に入れた情報と自分の家の周りを比較検討することで、児童一人ひとりの課題に応じたオリジナルの防災マップとなった。

学習を進める中で、「周りに危険がないか気にして見るようになった」「家族と避難場所を確認した」「毎月防災グッズを確認する」など、意識が変わってきた子どもたちもいた。今回の実践を、誰でもできる実践にするために、系統立てた防災教育カリキュラムの作成が必要である。校舎内や学校敷地内の危険な箇所を確認するなどの学習は、5年生になるまでに実施しておくことで、系統立てた防災学習につながると考える。



▲子どもたちのインタビューの様子

4. 今後に向けて

今回の取組を通して、防災学習を計画的に推進するためには、授業時間を含め、全学年で系統立てた防災のカリキュラムが必要だと感じた。

今後の避難訓練については、学校防災アドバイザーからの助言を参考にフェーズ1や2ぐらいの想定でマニュアル化し、少しずつ変化を加えながらマンネリ化しない訓練の実施につなげていきたい。今回初めて取り組んだ、土砂災害を想定した避難訓練では、事後研究会への参加校から、この取組が他の学校の参考になるとのご意見もいただいた。今後は、学校独自の取組として定着させたい。

また、防災マップ作成の中で地域の方からも「地域の防災について」お話していただくことができた。今後の避難訓練でも地域の方とつながりを持つことが大切であると考えている。

防災教育授業実践推進校としての一連の取組を通して、子どもたちの防災意識は高まったが、この学習で終わりではなく、災害時に、情報をもとにした的確な判断・行動をできる力をつけ、自分の命や大切な人の命を守ってほしい。

まだまだ防災についての取組は改善していく必要があるため、学校全体で反省をいかした取組の継続が必要である。



▲集めた情報でマップの作成をする様子

自他の命を守るために実践できる生徒をめざして

明石市立大久保北中学校

1. はじめに

本校は、創立 37 年の市内では一番新しい学校である。学校の周りにあった田園が宅地になり、どんどん生徒数が増え、本年度は 22 学級、700 人の学校である。地形は、海からは 4 kmほど離れており、標高は 25.8m、1 kmほど西に赤根川という 2 級河川がある。

昨年度までは、1 月 17 日の阪神・淡路大震災が発生した日の前後に道德や総合的な学習の時間を通して心情面や実践力を養ってきた。

しかし、3 年間を通したカリキュラムが作成されておらず、他教科との横断的カリキュラムも有効に計画されていなかった。そこで、学校防災アドバイザーに指導助言をいただくことで、カリキュラムづくりに向けた実践の一年とした。

2. 具体的な取組～総合的な学習の時間～

(1) 1 年生の取組

第 1 時 4/30(金)

…日本で起こり得る災害について知ろう

第 2 時 5/26(水)

…大震災と明石のハザードマップ

第 3 時 6/11(金)

…「地震が起きた」その時どうする？直後から数分間の行動を考える

第 4 時 11/30(火)

…避難グッズと避難所にあるものについて知ろう《明石市総合安全対策室》

第 5 時 12/7(火)

…大久保北中学校にある備蓄品を探そう

第 6 時 12/10(金)

…中学校が避難所になった際に何ができるだろうか①

第 7 時 12/14(火)

…中学校が避難所になった際に何ができるだろうか②《舞子高校環境防災科生徒》

第 8 時 1/14(金)

…中学校が避難所になった際に何ができるだろうか③

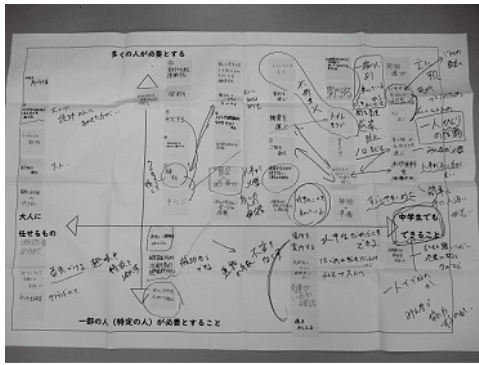
1 年生は、まず、日本で起こりうる災害についての知識概念を学習した。将来、どこで住居を構え災害に遭遇するかわからないという視点で進めていった。そして、防災事業に関っている方から避難所の役割を聞いて、自分にもできることを考え、仲間と意見を交流し合う中で、実際にできることを見通していった。



▲第 6 時の様子

今日の学習を終えて新しい意見やなるほどと思ったものが多くありました。例えば、8 班のコミュニケーションボードの作成や、安心させるために子どもたちと遊ぶなどです。災害が起きて混雑している中、避難してきた小さい子を安心させるために、遊んであげるといのはよい意見だと思いました。場所も体育館などは、避難してきた人でいっぱいだから広い所を設定するのもよいなと思いました。そして、コミュニケーションボードは、情報を整理したり、連絡の手段として使ったりできるのでなるほどと思いました。同じ案を出しても理由やきっかけが違っていて考えが深まりました。地震はいつ起こるかわからないから、普段から備えておくのが大事で全員が必要としている物を積極的に運んだり、そうじしたりできることをしていきたい。

▲第 8 時 生徒感想



▲第8時 生徒感想

(2) 2年生の取組

第1時 4/19(月)

…校内の避難経路を確認し、訓練をしよう

第2時 4/20(火)

…避難時に留意する点を考えよう

第3時 4/23(金)

…様々な災害の特徴を知ろう

第4時 4/27(火)

…避難時に命を守るために必要な必需品を考えよう

第5時 4/30(金)

…『わがまちハザードマップ』を作ろう

第6時 11/8(月)

…防災ジオラマで比較しよう

《第6～9時は、兵庫県立大大学院生》

第7時 11/8(月)

…激震の記録映像アーカイブ視聴

第8時 11/9(火)

…避難所での様々な対応を体験しよう

第9時 11/9(火)

…リアルHUG体験をしよう

第10時 11/16(火)

…知・考・感を家族に伝えよう

第11時 1/14(金)

…避難所の食事を考えよう

2年生は、1学期は、「ハザードマップを作成する」という目標に向けて、通学路・校内の危険な箇所を調べたり、必要な避難グッズを考えたりして、避難経路を考える上での視野を広げた。そして、2学期は、洲本市立洲浜中学校と本校の校区のジオラマを比較して、地形による被害想定の違いについて考えた。疑似空想をしたり、当時の映像を見たりして、将来どこにいても災害に対して「考動」するには、どうすればよいか思考が深まった。また、HUG体験や災害弱者の困り感や心臓マッサージを体験したり、

簡易トイレを作成したりした。いろいろな立場の人が避難してくるということが想像され、そこで自分だったらどんな役に立てるだろうかと真剣に考えることができていた。第10時では、感じたこと、考えたことを家族に伝えるべく、重みのあるリーフレットが完成した。

HUGをしてみて避難所では、色々な役割があって、それぞれ協力しないと作業が進まず大変だということがわかりました。特に、大震災後はトラブルが多く忙しくなると考えられるので、もし、自分でもできることがあれば素早く対応しようと思いました。

▲第9時 生徒感想



▲第6時 防災ジオラマ



▲第9時 HUG体験

(3) 3年生の取組

第1時 11/5(金)

…災害発生時の行動を考えよう

第2時 11/16(火)

…在留外国人が避難する時、困ることはどんなことだろう

第3時 12/7(火)

…避難所で必要な人・ものは何だろう

第4時 1/14(金)

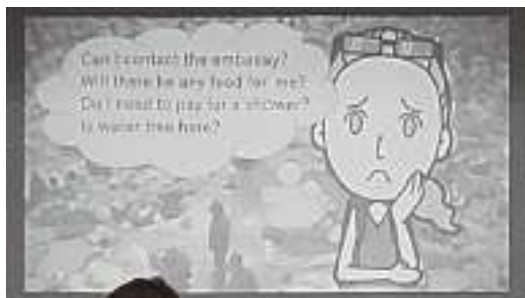
…避難所の食事を考えよう

3年生は、留学生の方から、話を聞いたことで、今まであまり考えたことがなかった視点に気づくことができた。そのことによって、防災

に真剣に向き合い、「自分でもできること」「これからの社会での役割」という3年生ならではの思考が深まった。また、災害が起きた時の避難所の様子や住民が求めることや行政がすべきこと、共助として皆で支え合うことなども整理分析することができた。それらの学びが、SDGsを身近に意識することにもつながった。

地震が起きた時、まず机にもぐるのが正解だと思っていたけれど、きちんと対策をしていかないと危険だと分かりました。つまり、机の下に物が落ちてくる場合もあるということです。今日の話では、「防災を楽しもう!」という感じでした。「防災」と言ったら真面目にかんがえなければならないけど、まずは、やろうと思えるようにすることが大切です。

▲第9時 HUG 体験



▲第2時 生徒作成パワーポイント

3. 成果と課題

(1) 成果

本年度、本校に学校防災アドバイザーに入っただけで、防災についての考え方が深まり、指導計画を立てる上で、視野が広がったことが一番の成果である。

結果的には各学年で同じようなテーマになった時間もあったが、「とりあえずやってみよう」ということでスタートした。同じようなテーマであっても方法が違っていただけのも今後の参考になった。例年は、1月17日前後に1時間の防災学習を行い、避難訓練と道徳を実施していたのみであったが、本年度は、その前後をゴールとして防災学習を実施した。道徳では、1年生『絶対にこんなことで死んでたまるか』、2年生『語りかける目』、3年生『いなむらの火』（文教出版）より）を行った。避難訓練では、津波を想定した垂直避難も実施した。

また、今までは、教授型の授業が多かったが、探究的な学びになるような授業の組み立てに努

めた。「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「表現・まとめ」という展開にした。授業形態を変えることで、生徒たちは、思考が深まったという感想が多く見られた。

(2) 課題

本校の総合的な学習の年間指導計画は、防災教育の他、キャリア教育も予定として組み込んでいる。それらを『どんな自分になりたいのか・社会貢献できる自分』という大きなテーマとして、その中でキャリア教育と防災教育を組み込んでいきたい。

また、カリキュラムをいっそう充実させるために、①小学校と防災教育でつなぐ。さらに、②地域や行政、防災に関わっている人とのつながりをシステム化する。

そうすることで、様々な人の思いに触れ、学ぶ意欲につながると考える。また、知り得た固有の知識同士を結び付けることで概念的知識となり、さらなる「考動力」を生み出すと考える。

4. 今後に向けて

3年間の防災学習を他の教育活動との横断的なカリキュラムとして確立しなければいけない。来年度に向けて、本年度実施したことを踏まえPDCAサイクルを意識し、計画を立てる。

まず、防災教育のテーマは、下のようにする。

学年	視点	テーマ
1年	自助	災害の種類について知る⇒対策について考える⇒実践してみる
2年	共助	災害時の公的機関の働きを知る⇒自分でできることを考える⇒実践してみる
3年	公助	地域防災について知る⇒自分でできることを考える⇒実践してみる

防災学習を進める上で、生徒たちがいかに自分ごととしてとらえ、本質に迫る実践的な思考の中で協働的な学びを進めていくかが大切である。そのために、人との出会いの場を多く取り入れ、その人の思いに触れることで意欲・関心が、高まり、地域とつながる。地域とのつながりが深いほど、その人を助けたいと思える。コロナ禍において、地域の人とのつながりも希薄になっている中、あいさつを交わすなど普段からのつながりを大切にしながら、関係を構築していきたい。

「未来に目を向けよう ～減災力を高めよう」 岩手県大船渡市立猪川小学校と交流を通して

姫路市立増位小学校

1. はじめに

日本では、東日本大震災以降も 2016 年の熊本地震や 2018 年の大阪府北部地震などの大きな地震被害が起きている。また、2018 年の西日本豪雨災害や 2019 年の台風 19 号被害などの土砂災害も多く発生している。日本は国土の立地上、火山や地震、台風などの自然災害の多い国である。

本校は山裾にあり、土砂災害警戒区域に立地している。また、本校のある姫路市でも今後、南海トラフ巨大地震や山崎断層帯地震などの発生が危惧されており、最大震度 6 強や震度 7 の予測も出ている。これからの将来、児童たちが自然災害を経験する可能性も高いと考えられる。

そのような中、過去の災害の記録や経験をいかして、災害に備えることが大切である。同時に、いざというときに、自分の命を守る力や災害を乗り越える力、日常生活をいち早く取り戻すことができる力を身につけていくことが大切である。

加えて近年、世界共通の課題となっている地球温暖化や環境破壊の問題などについても自分事として捉え、自分達にできることはないかを考えたり、防災や減災の活動に主体的に取り組んだりできる児童を育てたい。

2. 具体的な取組

(1) 校区内のハザードマップ作成

児童たちは、自分たちが住む校区の危険な場所や災害時に役立つ施設や設備などがどこにあるのか普段あまり意識せずに生活している。

地域に住む住民の一人として、地域の防災情報を共有し、災害時には、あわてず冷静にすばやく適切な対応ができるように備えることができるよう校区内のハザードマップづくりに取り組んだ。

通学路を中心として、学校から地域に実際に出かけ、災害時にどのようなことが想定されるかを考えながらメモを取り、写真に記録した。

その後、記録したことや実際に現地を見て考えたことを模造紙にハザードマップとしてまとめる作業を行った。



▲校区内のハザードマップ作成

完成したハザードマップは、下級生たちにも見やすいように、児童玄関や渡りろう下に掲示した。また、給食時には、全校放送を行い、全校生に告知する活動を行った。



▲校舎内に掲示し、全校生に告知

児童は、ハザードマップづくりをしていく過程で普段、避難経路になっている道路などにおいてもがけ崩れの可能性や窓ガラスなどの落下物の心配がないか、大雨などが降った時にどれくらいの流れになりそうなのか、過去に浸水被害がでいていないかなど様々なことを想定しながら考えを深めていた。また、危険個所だけでなく避難場所や防災倉庫の場所、公衆電話や消火栓など災害時に役立つものを見つけることができた。

(2) 防災クロスロードによる話し合い活動

大きな災害が起けると、誰もが動揺、混乱してしまう。どんなことが起きるのか事前に考えておくことが、いざというとき自分で判断できる力につながる。児童には 3 つのテーマを与え、クラスで話し合う機会を設けた。

- ①登校時に大きな地震が起きた場合に学校へ向かうか、自宅へ戻るか。
- ②地震に備え、家具やテレビを固定したいが家族に反対されたときにどうするか。
- ③震災の教訓を語り継ぐ、語り部が不足している。語り部活動に応募するかしないか。

児童たちは、様々なことを想定しながらそれぞれの立場に立ち意見を表明することができた。

話し合い活動を通して、防災や減災の意識の高まりだけでなく、最上級生として下級生を守る、家族の命を優先するといった精神的な成長が垣間見られた。

(3) 自衛隊による体験活動



▲自衛隊の方による講話

本校の校区内には、陸上自衛隊姫路駐屯地があり、自衛隊の方にもご協力いただいた。教室では災害時の被災地支援活動についてお話を聞かせていただいた。また、実際に駐屯地に出かけ、体験活動もさせていただいた。

まず、ロープを使った演習を行った。増水した川やビルから避難をするときにロープが活用できることや、ロープの結び目たくさん作ることで避難ばしごを作ることができることなど、実際に体験しながら身につけた。



▲ロープを活用した演習

次に、止血の方法やけがをしたときの三角巾などの活用方法や、三角巾がないときには身近にあるビニールぶくろや雑誌などを使い応急措置ができることを学んだ。



▲身近なものを活用した応急処置

最後に、毛布や棒を使ってタンカづくりを行い、実際に友達を運ぶ活動を行った。タンカを作るだけでなく、4人の中で誰が声を出して指揮を行うのか、いざという時の協力の仕方などを活動しながら知ることができた。



▲毛布や棒を使ったタンカづくり

(4) 大船渡市立猪川小学校と防災学習交流

学校防災アドバイザーの協力のもと、岩手県大船渡市立猪川小学校と防災学習の交流を全4回で計画し、実施した。本校は、阪神・淡路大震災、猪川小学校は東日本大震災の被災地にある小学校であり、ともに過去の教訓をいかし防災学習に取り組んでいる。猪川小学校のある地域は東日本大震災時に実際に大きな被害のあった地域でもあり、そこに暮らす児童たちと交流することで学びが深まると考え計画をした。

第1回の交流では、児童の距離を縮めるため互いの学校や地域を紹介する活動とした。



▲互いの学校や地域を紹介

互いに画面越しではあったが、それぞれの地域の観光名所や特産物、学校の特徴などを伝え合い大いに盛り上がった。また、次回からの学習に見通しをもつことができた。この活動は、岩手県の地元新聞にも掲載していただいた。

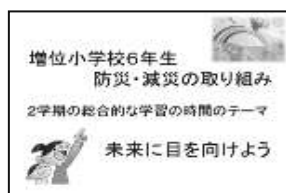


◀岩手県の
新聞記事

第2回目の交流では、本校が取り組んでいる防災や減災の学習内容をまとめ伝えた。

まず最初に、災害の起こり方や被害の種類を知り、被害をできるだけ少なくし、自分たちの命や安全を守るためにはどうしたらいいかを考えることを重点に置く「減災」という考え方を柱に学習を進めていることを伝えた。

次に、学校全体で取り組んでいる年4回の避難訓練やシェイクアウト訓練について、兵庫県の防災教育副読本「明日に生きる」を活用した授業などを伝えた。そして、これまでのハザードマップづくりや防災クロスロード、自衛隊の体験活動に加え、現在の地球温暖化や環境汚染が自然災害のきっかけになっていないかという考えのもと取り組んでいる「SDGs」の活動の取組についても紹介した。



▲増位小の取組発表より

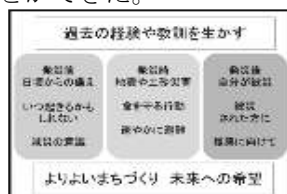
第3回の交流では、猪川小学校の防災学習の取組を聞かせていただいた。

猪川小学校の発表では、実際に被災からまちがどのように復興していったのか、地域の中学生の当時の活動内容をインタビューしてまとめた新聞をもとに発表を聞くことができた。



▲猪川小の取組発表より

第4回の交流は、今までの交流をふり返ってまとめを行った。「今回の交流で学んだことをたくさんの人に発信しよう」をめあてとして学習した。防災や減災意識を高めていくために一番大切なことや必要だと思う活動をワークシートに記入し、互いに発表をしながら、その重要性や意義について考えを深めた。児童から出た意見を、発災前（平時）、発災時、発災後（復興時）の3つに分類し、防災や減災についていろいろな角度から取り組むことができることに気づかせた。最後にこれからがんばりたいことや、自分の役割について考えさせ、防災や減災の意識を自分ごととして捉えることができた。



▲交流をふり返って

3. 成果と課題

(1) 相手意識の明確化による学習の深まり

2校で交流し、防災学習を進めることで互いに学習に対して明確な目標を持つことができた。防災や減災で学習していることを単純にまとめるだけでなく、大切だと感じたことを伝えたいという相手意識をもち、何を伝えればよいのかやどのようにすれば相手に分かりやすく伝えられるのかを児童が主体的に考えながら学習を進めることができた。例えば、替え歌や漫才、4コマ漫画などにすると分かりやすく興味をもってもらえると考え実際に作成して発表した。



◀児童作成の4コマ漫画・替え歌

(2) 多角的・多面的な視点や新しい気づき

どちらも過去に大きな地震災害を被災した県という点では共通しているが、防災学習の内容にはそれぞれの地域の特性が見られた。本校では、主に地震に備えるということに重点を置いた活動であったが、猪川小学校では、発災後から復興までの「助け合い」「支え合い」「あたらしいまちづくり」が大きなテーマであった。本校の児童は、猪川小学校の発表から命の大切さだけではなく、発災後の地域の協力や人々のつながりの大切さなどの新しい気づきがあり、学習が深まった。

4. 今後に向けて

昨年度よりコロナ禍の影響により様々な学習活動の規模が縮小されたり、中止となっている。その反面、タブレット端末など ICT 機器を使った学習も広がってきている。今回の交流も、直線距離で約 800 キロ離れた 2 校間で交流をすることができた。今後、このような活動を増やすことで学習の広がりや深まりにつなげたい。

また、将来予測される南海トラフ巨大地震や地球温暖化などが一因とされている豪雨災害や異常気象など今後直面するかもしれない課題が山積している。児童が、それらの課題を自分事としてとらえ、日々の生活の中で自分に何ができるかを考え、自分の得た知識を地域や家族、友達にも広めようと意欲を高められるよう継続して学習にあたりたい。

推進校種別【防災教育授業実践推進校】

4年生「わが家の備えを考えよう」の取組

～児童自らが主体的に考え、行動につなげようとする防災教育の在り方を求めて～

朝来市立竹田小学校

1. はじめに

本校は、校区の中央を円山川が流れ、周囲を美しい山々に囲まれた自然豊かな地にある。全校生 146 名（115 家庭）の子どもたちが通っている。かつては竹田城の城下町として栄えた町で、今も街並みには歴史を感じる建造物が点在する。初冬を迎える時期は、竹田城周囲に雲海が広がり、「日本のマチュピチュ」と称される絶景に多くの観光客が訪れる。町中に巡る水路は江戸時代に整備されたもので、観光ルートとしても大変人気がある。反面、ここは水はけが悪く、幾度も水害に見舞われた歴史を併せ持つ。近年では平成 16(2004)年の台風 23 号により、竹田城のある虎臥山からほぼ土石流とも言える土砂が流れ込み、寺が損壊したほか、地区の住民は胸まで水に浸かりながら手をつなぎ高齢者を避難させた経験が語り継がれる。

防災教育に関しては、全校で年 3 回の訓練（警報発令等を想定した引き渡し・火災の想定・地震の想定）の実施、及び各学年の実態に応じた事前事後学習を行っている。また各教科での学習に加え総合的な学習の時間や、道徳科、特別活動の時間も活用して防災学習に取り組んできた。昨年度は EARTH 員でもある本校教諭による授業実践を研修素材とし、児童がより自分事として捉えられる指導の在り方について研究した。本年度はさらに 6 年間の学びを見据えたカリキュラムの検討、授業における学習教材の作成・授業実践を行うことで、教職員の指導力の向上を図り、児童により実践的な力の育成を図るとともに、指導方法や教材について共有を図り、児童が主体的に考えられる指導の在り方をめざした研究を行った。

2. 具体的な取組

(1) 防災アドバイザー招聘による研修

夏の職員研修では、防災アドバイザーとして神戸学院大学の舩木伸江教授を招き、防災教育の意義及び防災教育で付けたい力について学

んだ。防災教育は「人と人との助け合いに気づく教育」であり、防災についての知識や技能を身に付けるとともに「心を育む教育」であることを再認識した。

研修素材として「クロスロード」を取り上げ、防災教育において正解は「ない」ではなく、「1 つではない」「状況によって見出す答えが変化する」ことを体験し、これから取り組む授業において児童がいろいろな角度から課題を捉えることができ、自分のこととして防災学習を捉えることができるような学習課題の設定が大切であることを学んだ。



▲夏季校内研修の様子

この他にも舩木教授からは、以下の教材を紹介いただいた。

○「非常持ち出し袋を考えてみよう」

袋の中身を考えることで、備えは大事であるが家庭によって変化することを実感できる。違いがなぜ生まれるのかを考えさせるところに主体的な学びが設定できる。

○「災害に関する音」

災害時における聴覚情報は避難判断に有益とされる。多種の警告音を聞いたらどんな災害を想起し、どんな行動をとればよいかを学ばせる。警告音も複数あるため、機会を捉えて、どの音がどの災害避難行動につながるか、集団で学ぶことに意義がある。また音と行動をつなげる学びが主体的な学びにつながる。

○「過去の災害をお話や新聞記事から学ぶ」

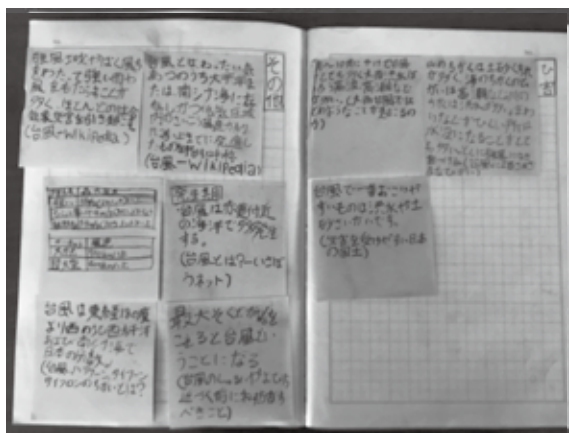
写真やデータ、読み物教材の中に「ひと」をみる学びがよい。そこにいた人がその時どう生きたのかを考え、話し合わせる。人に焦点を当て、事実から学ばせることで、「もし私だったら」と自分に置き換える発言が増える。教材次第でどの学年でも展開することができる内容である。児童が主体的に考え、行動につなげようとする学びにつながる。

(2) 事前研修会

昨年度に引き続き、4年生は総合的な学習の時間で、「わが家の備えを考えよう」をテーマとした授業研究に取り組むこととした。自分の命は自分で守る「自助」の観点から、災害を自分事として捉え、自らの行動を考えさせることに重点を置いた。指導計画には夏季研修を活かし、「非常持ち出し袋を考えてみよう」を取り入れ、児童が主体的に学ぶ手立てとすることを話し合った。

また、本校の防災教育年間指導計画と照らし合わせ、本実践の位置づけを明確に捉えることができるよう、単元の系統を整理した。国語科・社会科等の教科との関連及びクロスカリキュラムについても検討でき、大変有意義であった。

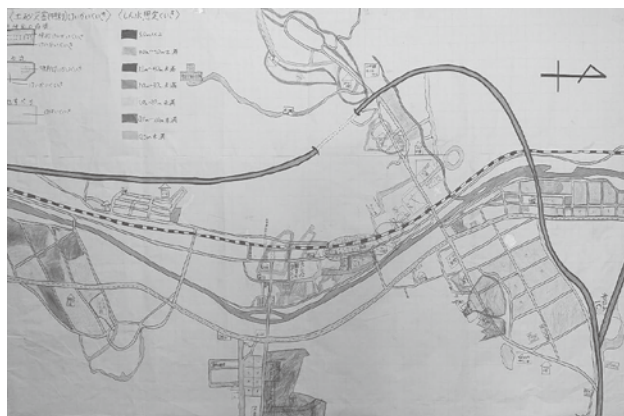
本単元では災害設定を「大雨」、被害予想を「土砂災害・洪水・水害」とし、家庭にいる想定でわが家の避難のしかたを考えさせることとした。1学期に大雨警報発令による引き渡し実施を経験していることもあり、より身近で具体的に避難の実際を考えられるのではないかと仮説のもと検証を行うこととした。



▲情報を整理したノート

(3) 指導の実際

3年生社会科で「町探検マップ」を作成していたため、この地図を使って竹田小4年生版防災マップを作ることとした。まず、自分たちの自宅位置を書き込み、自宅周辺の危険箇所がどこになるのか考え書き込むことから始めた。



▲ハザードマップと照らし合わせて作成した防災マップ

登下校時や帰宅後に家の周りを歩き、危険箇所を調べてきた子どもたちは、

「ここの溝、案外深かったんやで。」

「夜やったら溝と道の区別がつかへんから、この辺は危険な場所やと思う。」

と、話し合いながら地図を作成することができた。次に朝来市の水害・土砂災害ハザードマップと自分たちで作った防災マップを照らし合わせながら、各自が避難する場所を記入した。浸水指定区域など、ハザードマップが示す危険についても追記していった。

「命を守るためのわが家のルールを考える（本時）」の事前学習課題として、避難場所・避難経路・避難にかかる所要時間を家庭で聞き取る課題を出し、家族みんなで避難することを想定させる一助とした。避難にかかる時間は2～30分と幅があった。数分で避難場所に到着できるとした児童は、平常時に到着できる時間を想定している可能性も考えられたため、「大雨により土砂災害・洪水・水害が起き、自宅から避難場所へ避難する」という場の設定を再確認した。「7月の引き渡し訓練のときのような雨が降っていると考えてみよう。どんな被害が予想させるかな。」と投げかけたところ、「浸水」「土石流」「風も強いかも。」「避難場所に1分で着くのはさすがに無理だろうな。」と多様な意見が出された。これにより、思考の場をそろえることができた。そこで、被害が予想される

状況で、「自分と家族の命を守るためにとる行動を1つ考えよう。」と課題を示し、各自が意見を持ったところで、班ごとに話し合い活動を持った。

児童からは、「避難場所が浸水地域にあるので、本当に大丈夫かな。」「避難ルートの選び方も大事になってくる。」「ペットは一緒に連れて行ってもいいのか。置いていくのはかわいそうだ。」と、実際の避難を想定した具体的な考えや発言が相次いだ。話し合いをもとに、家族や自分の命を守るために大切にしたいことを書き加えたり、考えを練り直したりし、分かったことや感じたことを交流した。



▲原稿の読み合わせをする様子



▲ハザードマップを見ながら地図に書き入れる様子

事後研修会では、「ひなんのしかたを考えよう」という課題設定が、避難ルートを考えることなのか、避難の持ち物を考えることなのか、避難手段を考えさせることなのか、不明瞭であるとの意見が出された。いろんな観点から避難について考えさせたいとの思いであったが、焦点化することも大切であると感じた。また、補助発問によって場の設定を確認したが、子どもたちの「大雨による被害が起きている状況」のイメージがばらばらであったのではないかと指摘を受けた。実際の写真や映像資料等を用い、より具体的な被害場面を想定できるような

手立てを講じることも、自分事として学ばせるために必要なことであると感じた。

非常持ち出し袋の中身を考える学習では、実際の被害状況が分かる画像資料を用いた。このような状況で持ち出す物について、本当に持ち出せるかを繰り返し話し合う姿が見られた。

また、単元を通しての学びをE-REPORT（iPad用表現活動支援ツール）でまとめ、交流を行った。今後、児童朝会においても代表者による学習の成果発表を行う予定である。

3. 成果と課題

(1) 情報をつないで表現する力

児童が本実践の中で友だちから得た情報を自分の考えに取り入れることや、単元を通して学んだことをレポートに活かしたりする姿が見られた。複数の情報をつなぎ、自ら表現しようとする主体的な学びができたことが大きな成果であると言える。成果物の交流会においても、友だちの発表を真剣に聞き、感想や意見を述べる姿に、「防災教育は心を育てる教育である」ことを実感した。

(2) 語り継ぎと資料の有効活用

児童の学びを深める手立てとして、どのような資料を教材として扱うかも議論となった。竹田地区でかつて水害を経験した方の話では、学校周辺でも被害があり、避難経験のある地域住民もおられる。反面、新興住宅地に住んでいる方や若い保護者の中には避難所を知らない方もいて、地域の防災情報を十分に把握できていない人もいるのではないかと考えられる。被害を語り継ぎ、今後の防災に活かす観点からも資料収集や地域教材の開発等を考えていきたい。

4. 今後に向けて

4年生の総合的な学習の時間として、「防災」をテーマとした学びは次年度以降も継続する。一人一人が自分のこととして学び、自助・共助しようとする児童の育成に努めたい。また、児童の学びを学校だけのものとせず、地域の学びとして発信していくような機会があれば、被害に強いまちづくりに子どもの目線から主体的な行動を起こすことも期待できる。そのための適切な情報公開・発信についても研究を深めたい。

生涯 いつでもどこでも 自分の命を守り 人の命を助ける力をつける 我がこととして考えさせる防災教育

丹波市立鴨庄小学校

1. はじめに

本校は兵庫県の中央東部に位置し、京都府に隣接する豊かな自然に囲まれた山間部にある。全校児童42名の小規模校であり、地域と連携した教育活動を多く取り入れている。

本校の防災教育は、カリキュラムはあるものの表面的な理解に留まっていた。学校防災アドバイザーの助言により、教職員の関心を深め、実際の災害時に役立つ学習にすべく、「我がこととして考えさせる」「家族に働きかける」というキーワードを持ってスタートさせた。

2. 具体的な取組

(1) 防災教育の体系化を図る

全体計画と年間指導計画の見直しを行った。無理なカリキュラムは続かないと考え、大幅な時間捻出をせず、教科や行事との体系化を図ることで充実させた。さらに「防災教育カリキュラム作成の手引き」（県教委）と比較し、体系化のチェックを行った。また、児童が将来どこで住むか分からないことから、全ての災害を網羅すべきと考え、防災学習ブック（副読本）を全児童に配付し、5～10分間程度の隙間時間を活用した幅広い防災学習を実施した。

- ・「防災教育カリキュラム作成の手引き」（県教委）をもとに体系化を図る。
- ・地域性（起こる可能性が高い災害）と全域性（全ての災害）は両方必要。
- ・授業時間外を活用する。

(2) 授業づくり

- ・正しい知識を身に付けさせること。
- ・我がこととして考えさせること。
- ・1人での時も周りに人がいる時も行動できること。
- ・家族への働きかけがあること。

【第1学年—せいりせいとん】

「4つの危ない」（①落ちる②倒れる③移動してくる④割れる）を理解し「4つの危ない」を意識しながら、実際に、故意に乱された部屋の整理整頓を行う。単なる整理整頓ではなく、安全な空間に保つことの大切さを意識付ける。

「4つのあぶない」からみをまもるために へやを へんしんさせよう。

5. 部屋の中を整理整頓する。

- ・決まった置き場所にしよう。
- ・机の上を整理する。
- ・本棚を整理する。
- ・落ちそうなものや倒れそうなものは、置き場所を変える。

- ・故意に乱雑にされた教室に移動する。
- ・「4つの危ない」を意識しながら、整理整頓を行うよう声掛けをする。
- ・全員が活動できるように、順番に行わせる。

6. 自分の家の部屋を思い浮かべながら、チェックシートに記入する。

ランドセルの おきばしよは、きまっているか。
つくえの上は、せいり しているか。
ほんだなは、せいり しているか。
おもちゃは、しまっているか。
おかしものぶくろがおちていないか。
じぶんでせいりせいとんをしているか。

- ・部屋を安全な空間に保つことの大切さを意識づける。
- ・本時で学んだことを自分の生活とつなげて考えている姿勢を評価する。
- ・家庭学習で自分の部屋の整理整頓をしていくことを知らせる。

＊ 波線部分：「我がこと」として考えさせる場面



▲1年：安全な部屋に変身させる



▲2年：タブレット端末で防災バッグの中身を選ぶ

【第2学年—そなえ】

自分や家族のために、ほかにもって行きたいものはありますか？

3. これら以外で自分や家族のために、持っていくたいものを考える。

- ・持っていくたいものと持っていくたい理由をワークシートに記入する。

(予想されるもの) (理由)

紙おむつ	赤ちゃんがいるから
薬	おじいちゃんがいるから
メガネ	予備がないと不安だから

- ・発表し、交流する。
- ・各家庭によって必要なものが違うことに気づく。

- ・指導者のケースとしていくつか例示する。
- ・家族を思い浮かべて考えさせる。
- ・多くて2個、理由も考えさせる。

4. 振り返りをする。

- ・学習したことの感想を書き、この時間に気づいたことを振り返る。

- ・家族について考えられたことを評価する。
- ・各家庭、個々人によって特別に入れておきたいものが違うことをおさえる。
- ・災害が起こる前から、準備しておくことが大切だと知らせる。
- ・防災バッグの中身や災害へのそなえについて家族で話し合っておくことの大切さを伝える。
- ・週末課題で防災バッグの中身を家族で考えていくことを知らせる。

＊ 波線部分：「我がこと」として考えさせる場面

地震が起きた時どう身を守るかを知る。教室・家の中・屋外での違いを考えさせる。次に、地震の時に何を持って逃げるかを考えながら、防災用品の多様な用途について知識を広げる。また、その他に、自分や家族のために持って行きたいものがあるかを、我がこととして考えさせる。家庭によって必要なものが異なることに気付く。

【第3学年—火事だ！消防署への通報】

火事の3原則（①大声で知らせる②初期消火する③早く逃げる）を知る。また、火の性質・煙の性質を知り、逃げる時に気をつけることを考えさせる。知らせる手段として学校の住所と電話番号を使った119番通報練習をロールプレイで行う。さらに、各家庭で、自宅の住所と電話番号を使った通報練習を行い、我がこととして考えさせる。

消ぼうしよへ 通報しよう。

4. 「知らせる」手段として、通報練習をする。

- ・ロールプレイで119番通報の練習をする。
(50頁を参考に、通報者→児童、消防職員→指導者で行って見せた後、児童ペアで行う。)
- ・見ていて、気付いたことや友達の良いところを出し合い改善する。

5. 振り返りをする。

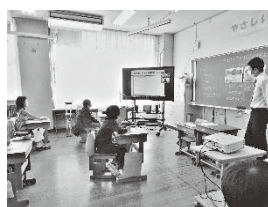
- ・火災発生時の三つの原則
- ・消防署への通報の仕方

- ・必要なことは、消防署から尋ねられるので、落ち着いて受け答えることが大事だと知らせる。
- ・火災場所には学校の住所、電話番号を使う。
丹波市市島町上校6 85-0490
- ・実際の火事に遭遇した場合に活用できるように家庭で自宅の住所を使って通報練習をする課題について知らせる。

※ 波線部分：「我がこと」として考えさせる場面



▲3年 電話機を持ち119番通報訓練



▲4年 市役所とリモートで交信

【第4学年—大雨だ！どうしましょう】

命を守る方法を考えましょう。

予想される発言

- ①増水箇所には近づかない
- ②家に入る
- ③山から離れる
- ④建物のかげに隠れる

・危険を回避する方法を人と伝え合うことで、様々な方法があることに気付かせる。

3. 地域で起きた災害について知る。

- (1) 丹波市豪雨災害について知る。
- (2) 丹波市くらしの安全課の話をリモートで聞く。
- (3) 疑問に思ったことを質問する。

4. 振り返りをする。

- ・「どのように行動すれば自分の命を守るか」という視点で考えさせる。
- ・発言の理由について問い返し「なぜ命を守るのか」を明確にさせる。
- ・ジャムボードに意見を集約する。
- ・付属の色を1の活動と変え、考えられる危険と回避する方法をわかりやすくさせる。
- ・「自分の命を守る方法」について考えられたことを評価する。
- ・丹波市豪雨災害の資料を提示し、大雨による被害が身近なものであることを知らせる。
- ・講師には「知ること」の大切さに視点を置き教訓として何を学んだかを話していただく。
- ・丹波市で起こった災害について、家族へ聞き取りをする課題について知らせる。

※ 波線部分：「我がこと」として考えさせる場面

日本の降雨の特徴や、過去の豪雨災害の教訓を知る。教材の絵を見て大雨という「誘因」がどのような危険を引き起こすか見つけ出し、危険を回避する方法をディスカッションする。人と伝えあうことで様々な方法があることに気付く。次に、地域で起きた災害（H26 丹波市豪雨災害）について、リモートでつながった市役所職員から教わる。各自、家族からも聞き取りをすることで我がこととして考えさせる。

【第5・6学年—土砂災害からの避難】

土砂災害のメカニズムを理解し、学校周辺のハザードマップを作る。実際の風景を見て、浸水の深さや流れる方向、山の傾斜、流れてくる物の予測をする。また、土砂災害が起こる可能性が高くなる条件を知り、起こる前に避難することが大切であると気付く。家庭では、避難計画について話し合い、我がこととして考えさせる。



▲5・6年：ハザードマップをつくる

大雨の時、学校周辺に起きる災害を予測しよう。

3. グループでハザードマップをつくる。

- ・地すべり・谷けくずれ……茶色
- ・土石流……オレンジ色
- ・浸水……青色
- ・流されてくるもの……文字や絵

4. 実際のハザードマップと比べる。

- ・学校周辺の白地図に予測したことを書き込ませる。
- ・場所だけでなく、どんな危険が想定されるかについても考えさせる。
- ・実際の風景を見て予測する。
- ・水はどこまでくるか（深さや流れる方向は）
- ・土石流といっしょに流れてくるものは（木、草、家）
- ・山の傾きは（傾斜に注目）
- ・家があるのは、山のふもとが多い

安全に避難する方法を考えよう。

5. ハザードマップをもとに、学校前敷奥壁に自分がある現在の位置についてグループで考え発表する。

予想される発言

- ①浸水前に早めの移動
- ②自宅からは離れる
- ③避難所（橋本小）では2階以上、斜面と反対の川側が望ましい。

6. 振り返りをする。

- ・安全に避難するための避難計画の立て方を確かめる。

- ・様々な危険を予想し避難するときに考える観点をまとめる。（副読本41頁参考）
- 災害の種類（水害・土砂災害）
- 確証（判断材料・天気予報やニュース）
- いつ（逃げ時・何がどうなったら）
- どこに（避難先・経路）複数
- どのように（避難の方法・徒歩・車）
- ※複数の避難方法を考えておくことも大切。
- ・この学習を家族と避難計画を話し合う際に活用し、家族の命を守るポスターをかくことを意識させる。
- ・自宅周辺の避難計画について、実際に話し合い、どうなるかを確認する。

※ 波線部分：「我がこと」として考えさせる場面

(3) 授業時間外の短い時間の活用

防災の教材（副読本）全児童分を教室に置いたことで、誰でも、どんな場面でも使用することができるようになった。内容によっては、5～10分程度でできるものや、時事に合わせて読み返すこともできる。

防災教育教材



まもうろ！じぶんのいのち（低学年用） 守ろう！自分・家ぞく・地いき（中学年用）
守ろう！私たちの今と未来（高学年用）
発行所 株式会社明石スクールユニフォームカンパニー

(4) 実践の場としての避難訓練

児童個々が、習得したことを総合的に判断し率先して行動できるか評価するため、リアリティのある避難訓練を計画し、児童の行動を観察した。

- ・清掃時間中、業間、始業前
- ・避難経路に障害物を設置
- ・人命救助を設定
- ・教職員の避難訓練は別日に実施

(5) 授業の公開

令和3年11月2日、市内22小学校の担当者対象に全学年の授業公開及び研修会を開催し「我がこととして考えさせる」「家族に働きかける」という視点を持って作成した指導案を実践した。



▲11月2日実践発表・講演会

また、前林清和学校防災アドバイザー（神戸学院大学現代社会学部・社会防災学科教授）による講評並びに講演を実施した。

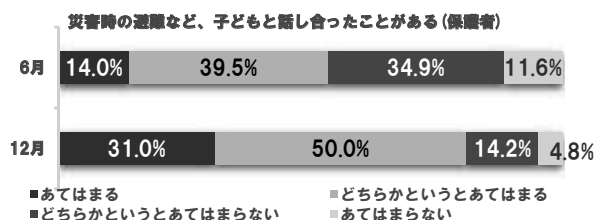
（＊家庭への授業参観同時開催）

3. 成果と課題

(1) 児童の変容

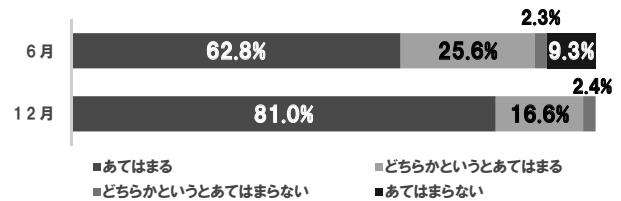
「我がこととして考えさせる」仕掛けがある授業において、全ての児童が、自分や家族を想定して最適解を出そうと考えた。それが、正しい知識や情報に基づいているということが何より重要な点である。

また、「家族へ働きかける」仕掛けがある授業において、全家庭で取組がなされた。児童の学習を深めるだけでなく、防災意識の啓発に大きな効果があったと考える。



実践の場となる火災避難訓練では、とっさに机の下に隠れたり、火元に近い方の階段を選んだりするといった、災害の種類によって対応を変える判断が不十分な児童がいたものの、概ね知識に基づいて判断できた。みんなに声を掛けて協力して逃げる・助けることのできた高学年児童が増えたことも成果の一つである。

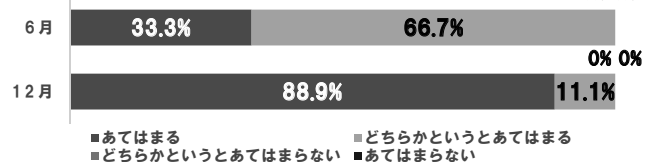
学校で避難する時どこに避難すればよい知っている（児童）



(2) 教職員の変容

学校防災アドバイザーによる研修を受け、防災教育が、大きく方向転換した。授業は怖い防災から興味ある楽しい防災に、訓練は教師主導から主体的に判断させるものに、そして、学校内を前提としただけでは不十分だという視点から、様々な人と一緒に学習していくといった意識改革もできた。

各学年の発達段階に応じた防災教育の指導ができる（教職員）



(3) 課題

不十分だと感じているのは、備えの教育・訓練（ハザードマップの見方や天気予報への関心、日頃の備えなど）である。防災教育においては、自然が恵みから脅威に変わることから、発達年齢に応じた配慮をしつつ進めていくことが大事だと感じている。また、全域性（すべての災害に対する対応）が重要だと感じながらも、津波、雪崩、火山噴火、竜巻等への対応は、教職員の知識も十分でないことから取組が遅れている。

4. 今後に向けて

本年度見直した年間指導計画は、全て実施できたわけではない。次年度も、無理のない計画に修正しつつ、持続可能なものに変えていきたい。防災教育の観点で、日常や習慣を見直すことが、それらの課題解消につながると考える。また、丹波市関係機関と連携したことを機に、体育館（避難所）を使った避難生活の訓練計画が進んでいることも、発展的で、よい効果を生むと期待している。

今後も、いつでも・どこでも・何があっても・一人でも・誰といても、自分の命を守り、他者と助け合うという「生き抜く力」の育成を推進していく。

「避難のその後」の視点を取り入れた防災授業の創造

南あわじ市立沼島小学校

1. はじめに

沼島は、淡路島より海上 10 分に位置する兵庫県最南端の島である。周囲の海は良質な漁場であり、島民の多くは漁業や漁業に関連する仕事に従事している。小さな島であるため地域住民同士のつながりは深く、学校教育活動にも協力的である。運動会は地区と



▲上立神岩

小中学校が一緒になった「合同体育祭」として開催され、「学習発表会」などの学校行事においては、保護者のみならず地区の住民も観覧に訪れる。本年度(令和3年度)全校生は12人。令和2年度より、小規模特認校として南あわじ市内どこからでも通学が可能となっている。また、施設併設型小中一貫教育校として、隣接する沼島中学校と一体となって教育活動を進めている。

近い将来に発生するとされている南海トラフ巨大地震では大きな揺れと津波の被害が予想されている。津波高の予想最大値は4.4mであり、発生から約43分で到達すると考えられている。そのため、住民の防災意識も高く、全島民あがての「防災訓練」や保・小・中学校が連携した「避難路確認」等、地域と連携した防災活動が長く続けられてきた。また、本年度は兵庫県警による「災害警備訓練」並びに「避難所開設訓練」が実施され、より実践的な訓練を体験・見学する機会となった。

防災教育授業の実践にあたり、学校防災アドバイザーとして奥村与志弘准教授(関西大学社会安全学部)の派遣を受け、本校の防災教育カリキュラムの点検と防災教育授業の方向性をご教示いただいた。その主な内容は、次の通りである。

○現在の防災学習は避難することに重点が置かれすぎている。避難した後もイメージすることが大切である。

○防災の知識や技能を習得するだけでなく何が正解かを自分の頭で考える力が求められている。

○災害が起こる地域に生まれたことを残念に思わない教育が必要。地域の魅力を発見し明るい未来を描ける子を育てたい。

これらを受けて、研究の方向を「避難のその後」の視点を取り入れた防災授業の創造とし、取組をスタートした。

2. 具体的な取組

(1) 「災害警備訓練」への参加

どの学校においても、毎年避難訓練は実施されている。本校においても、火災を想定したもの、地震・津波を想定したものなどの避難訓練を実施している。その多くは設定された避難場所へいかに安全に素早く避難するかに主眼が置かれ、マニュアル化された手順を覚えるのみになってしまっている場合もある。そこで「避難のその後」の視点を持つために、県警による「災害警備訓練」に参加した。当日は「地区総合防災訓練」も兼ねており、地区住民による「避難所開設訓練」も行われた。本校児童も、物資の運搬や簡易ベッド・簡易テントの組み立てなど避難

所開設の手伝いを行った。その後、ヘリコプターによる物資の投下やけが人の救助、倒壊家屋からの救出、3



▲簡易ベッドを組み立てている様子

階からの要救護者の搬送など、県警による訓練を見学した。「避難所開設」にしても「災害警備訓練」にしても、まさに避難のその後であり、児童にとって普段の避難訓練から一歩進んだ視点を持つきっかけとなった。

【児童の感想】

- ・テントをくみたました。青くて大きかったです。わたしが30人くらい入りそうです。[1年生]
- ・(倒壊家屋からの救出訓練で)はじめは小さな穴をあけて、人がかべにくっついていないかを見てから大きな穴をあけていた。知らなかったことがわかりました。[4年生]

(2) 「避難のその後」を考える授業

①指導計画(全4時間)

「総合的な学習の時間」(第3・4学年)

1. 南海トラフ地震が起こったら 1時間
2. 日頃の避難訓練と沼島地区災害警備訓練の違いはなんだろう? 1時間
3. 避難所での困り感を考えよう 1時間
4. 明るい沼島の未来のために 1時間

②公開授業

指導計画の第3時間目「避難所での困り感を考えよう」の授業を市内の小中学校に公開し検討い

ただいた。まさに「避難のその後」である避難所の生活を考える授業の公開により、防災教育の新しい視点を提案できると考えた。

【第3時間目 授業の概要】

設定

地震発生から1日たった。島民360人が避難所である沼島小学校に避難してきている。水道は止まっているが、非常用発電装置で1日分の発電は可能。備蓄している食料と水は1日分。

学習活動

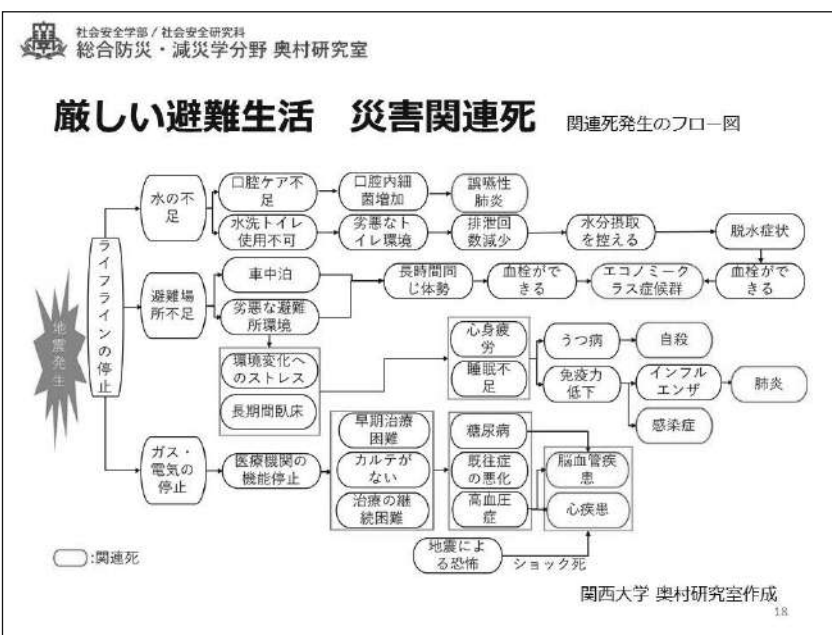
○避難所で困ることを付箋に書き出し、模造紙に貼る。

- ・自分が困ることを考える。
- ・自分以外の立場(お年寄り、あかちゃんなど)で困ることを考える。

○出てきた困り感を命の危険性が高いものと、あまり高くないものにわけ。

○関連死発生のフロー図と照らし合わせて、自分たちが考えた困り感が死につながる可能性があることを知る。

○困ったことに対して自分たちができることもあり自分たちの行動が命を守ることにつながると気づく。



▲災害関連死発生のフロー図(奥村研究室)



▲困ることを付箋に書き出す様子



▲付箋を模造紙に貼った様子

③公開授業の様子

付箋に困ったことを書き出し模造紙に貼るというワークショップ型の授業を採用したので、3人の学級だが、それぞれに意見を出し合いながら進んでいった。単なる知識の伝達ではなく、自ら考え課題に取り組む姿勢を引き出すことができた。

④研究協議より

<参加者の意見>

- ・困り感からスタートして関連死への流れはわかりやすく丁寧で良かった。
- ・設定が具体的だったので意見が出やすかったのではないかな。参観者もイメージしやすかった。設定を変えると、違った意見が出るかもしれない。
- ・児童の書いたものを見ると、その土地ならではの困り感があると感じた。
- ・確かに、これまでの指導は避難する指導が多かった。避難後の指導例はあまり見たことがないが、重要な視点だと感じた。

<奥村学校防災アドバイザーからの助言>

- ・「たいへん」「暗い」「つらい」だけの防災教育で終わってはいけない。
- ・災害時の死亡率が下がっていない。これまでの防災教育がどれだけ効果があったのか検証が必要。
- ・手順を教えるより命を守ることを教えることが大切。そのためには何が原因でどういう状況で人がなくなっているのか、つまり災害関連死について知ることは必要と考える。
- ・将来、災害に強い仕組みができ、被災時に役立つ製品が開発され、多くの生命が守られる社会が来てほしいと考えている。そこに携わる子どもを育ててほしい。

⑤指導計画の第4時間目授業について

学校防災アドバイザーの方にご教示いただいた防災教育の方向性の中に「明るい未来を描ける子ども」を育てるというものがあった。指導計画の最後は、このポイントを意識して組み立てた。今の自分では解決できないことも、将来就く職業によっては解決できるかもしれないことから、将来の自分の姿を描きながら考える授業とした。

【第4時間目 授業の概要】

学習活動

- 前時に考えた避難所で困ることを自分たちで解決できることと、自分たちでは解決できないことに分け直す。
- 今の自分たちで避難所生活の役に立てることは何かを考える。
- 自分たちでは解決できないことはどんな職業の人が解決できるか考える。
- 自分が将来就きたい職業と避難所で困ることの解決との関連を考える。

3. 成果と課題

「避難のその後」を考えるという新しい視点に立ったカリキュラムと、授業の基礎はできた。将来に明るい展望が持てるような指導という点に関しては、防災の授業のみで完成するものではない。キャリア教育等、他の学習指導との関連を整理して、より効果的な指導に改善していく必要がある。また、関連死等の資料は専門的な言葉が多く、児童にもわかりやすい資料の開発が必要である。

今回の実践と直接関係するわけではないが、後日北海道南西沖地震で被災した方のお話を児童にいただいた際に津波の到達時間が5分だったということに児童は驚いていた。南海トラフ巨大地震の際の沼島での約43分後という時間が児童の頭にはあるようで、どんな状況にも臨機応変に対応できるように、その土地の特徴だけでなく、一般的な知識とのバランスが大切だと気づかされた。

4. 今後に向けて

避難訓練も単に避難するだけでなく、避難した後の行動も取り入れるように工夫し、防災の授業と合わせて「避難のその後」まで考えられる児童を育てたい。また、キャリア教育等との関係を整理し、自分の将来の生き方も考えるような指導にしていきたい。

最後に、今回の授業実践推進にあたり奥村学校防災アドバイザーをはじめ多くの方々のお力添えをいただきましたことに感謝申し上げます。

推進校種別【気象災害モデル校】

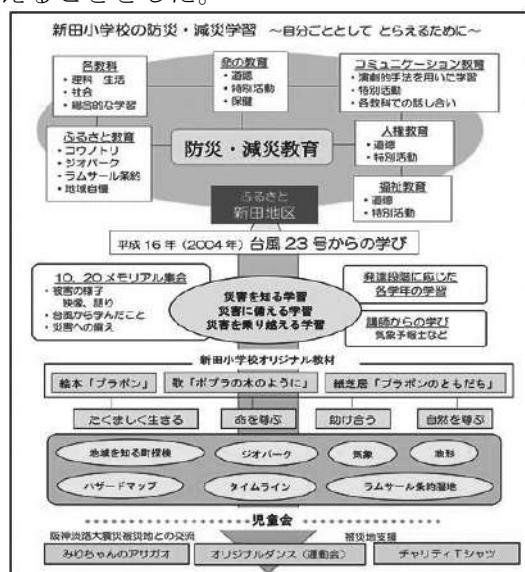
災害を「自分ごと」としてとらえる防災教育
～「台風 23 号 (H16)」からの学び～

豊岡市立新田小学校

1. はじめに

本校は、六方川と円山川の流域に広がる但馬の穀倉地帯「六方たんぼ」の真ん中に位置する自然豊かな地域にある。しかし、平成 16 年の台風 23 号では、円山川の氾濫により、水害で大きな被害を受け、本校も浸水した。以降、周辺では、浸水被害を軽減する流域対策が講じられているものの、六方川の水が溢れ出て、通学路が冠水することもしばしばあり、水害と向き合う機会も多い。

平成 30 年度には、文部科学省委託事業による学校防災体制推進校の指定を受け、災害対応マニュアルの見直し等、学校防災体制の改善を図ってきた。しかしながら、地域全体が大きな被害を受けた「台風 23 号」から 16 年が経過し、地域でもその記憶の風化が懸念されるとともに、児童には災害を「自分ごと」としてとらえる力の弱さが感じられる。そこで、災害を「自分ごと」としてとらえるという視点を大切にしながら、災害に備える行動をとる実行力や自分たちの命を守ろうとする姿勢を育てるための授業づくりを中心として、防災教育のあり方を考えることとした。



▲防災・減災教育に関わる取組関係図

2. 具体的な取組

(1) カリキュラムの見直し・作成

県教委「防災教育カリキュラム作成の手引き」を参考に、低・中・高学年別に、防災教育のカリキュラムの見直し・作成を行った。地域の特性や実情を踏まえながら、各教科、道徳科、総合的な学習、特別活動等において年間を通じて指導すべき内容を整理し、系統的・体系的に編成した。

(2) 台風 23 号の教訓をいかした授業づくり

[illegible]

▲各学年の授業内容の一覧

自分たちの地域が甚大な被害を受けた「台風23号」について知り、そこから得た教訓をいかにすることが、災害を「自分ごと」としてとらえることにつながると考えた。毎年10月20日は、「メモリアルデー」として、水害についての防災・減災授業を行っているが、そこでの授業を中心としつつ、「めざす児童の姿」を視野に入れながら、もっと広く教科横断的に授業を見直し、再構築を図ることとした。

○授業の例（1年生 道徳科）

本校には、当時の児童が校庭にあったポプラの木を題材に制作した「プラポン」という絵本がある。水害に負けない強さをもったその木は、当時の本校のシンボルであった。毎年、読み聞かせ等で子どもたちに伝えられてきたものであるが、さらに道徳の授業として扱えるよう、教材化を試みた。



▲絵本「プラポン」

道徳科 指導案	
(1) 教材名「プラポン」～たくましく生きる～ (2) ねらい たくましく生きるポプラの姿やポプラに囲まれる人々の気持ちを想像することを通して、災害に負けない強い心をもってまぎていこうとする意欲を育てる。 (3) 教材・資料等／外部連携等(★) 絵本「プラポン」／当時の写真の資料(ポプラに関するもの、台風被害に関するものなど) ★ゲストティーチャー(現前田幼稚園教諭、平成16年当時新田小学校5年生)	
学習活動	指導上の留意点
1 新田小学校にあったポプラの木について知る。	「校庭の大きなポプラの木」の写真を見せる。
2 本時のめあてを知る。	【みんなで考えたいこと】ポプラの木がもたらしてくれたこと
3 絵本の読み聞かせを聞き、話し合う。 ○絵本の読み聞かせをする。(全部)	・画像を見せながら絵本読み聞かせをする。 ・この絵本は、17年前に台風23号の被害を受けた新田小学校の子どもたちがつくったものであることを知らせる。 ・ストーリーを簡単に示したシートや画像資料を示しながら、当時の子どもたちの気持ちに思いを寄せられるようにする。 ・写真「倒れたポプラの木」
○校庭に倒れたポプラを見たり子どもたちの気持ちを想像する。	・ストーリーを簡単に示したシートや画像資料を示しながら、当時の子どもたちの気持ちに思いを寄せられるようにする。 ・写真「倒れたポプラの木」
○台風23号について知る。	・台風23号の被害の様子について説明する。 ・写真「台風23号の被害の様子」
○田んぼに流れ着いたポプラの切り株を見た人々について知る。	・写真「田んぼに流れ着いたポプラの切り株」
○学校や校庭の被害の様子を知り、その後の片付けの大変さなどを想像する。 ・住む家やなくなった人々もたくさん。 ・家の中のものもほとんど壊え、捨てることに。 ・怖い思い、つらい気持ち	・写真「片付けの様子」など ・当時の学校の様子や校庭の被害の様子などについて説明したり、写真を見せたりすることで、当時のことに思いを寄せることができるようにする。 ・写真「切り株から出た新しい芽」 ・なっこのから倒れ、切り株になってしまってもなお芽吹く、ポプラの生命力について触れる。 ・ワークシートに書きさせる。
○「新しい芽」を見た子どもたちがどんなことを感じたのかを想像する。 ・ポプラの木は強いなあ。 ・一緒に大きくなろう。 ・たくましく生きていけるんだなあ。 ・自分たちも負けずにがんばろう。	・身近な人の体験談を聞くことを通じて、災害は自分の身に起こりうることであり、意識をもって対処できるようにする。
4 ゲストティーチャーの話を聞く。 ・当時の学校や地域の様子 ・ポプラの木に対する思い ・絵本をつくったことについて	・今日の授業で感じたことや考えたことをまとめさせる。
5 本時の振り返りをする。	

▲道徳科指導案

現在そのポプラの木はなくなっており、児童には現実にあったこととして捉えにくいと考

え、話の筋に合わせて、当時のポプラの木や水害被害の様子などの画像資料を多数用意するとともに、実際の様子を知る方（当時5年生）に話を聞く場も設定した。なお、大雨などの気象についての知識を得る学習や水害から身を守る行動について考える学習も並行して行った。

○授業の例（5年生 理科）

5年生理科「台風と気象情報」「雲と天気の変化」の学習では、雲の量や動きに着目し、それらと天気の変化を関連付け、観察や映像などの気象情報をもとに予想し、仮説を立てて問題解決をすることをねらいとしている。理科の学習での学びを、防災・減災の意識につなげることのできる単元である。毎年のように大きな被害をもたらす「台風」であるが、扱う資料として、「台風23号」の雲画像やアメダスを取り上げることとした。その際に、実際の被害の様子、当時の避難の指示等の発令などと合わせて考察することで、気象や防災に関する知識を、「自分ごと」としてとらえ、今後の生活にいかそうとする態度につながると考えた。

理科 指導案	
(1) 単元名「天気の変化(2)雲と天気の変化」 目標・気象情報から予想し、雲の動きや天候の変化を分析し、予想することができる。【知・技】 ・天気の変化は、映像などの気象情報を用いて予想できるとがわかる。【知・技】 (2) 教材・資料等 平成16年台風23号の18日～21日の4日間の雲画像とアメダスの降水量(気象庁) 平成16年台風23号の時の写真、商業カメラ、ライブカメラ、キキル。 豊岡市防災マップ	
学習内容と学習活動	指導上の留意点 評価
1 本時刻に提示された2004年10月18日～21日の4日間の雲画像とアメダスの降水量を見て、学習課題をつかむ。	○前時を思い起こし、雲の動きを予想させる中で雲は西から来ていること、1学期に学習した台風の動きを確認する。 ○2004年の台風23号の時の気象情報であることを伝える。
大きな災害を起こしたときの気象情報を読み取ろう。	
2 4日間の雲画像とアメダスの降水量を分析する。 ① 自分で調べよう。 ② 結果を全体で話し合う。 ・台風は南からきて北の方に動く。 ・雲があるところでは雨が降っている。 ・台風があるところは降水量が多い。	○18日～21日の4日間の雲画像とアメダスの降水量のカードを配布し、ワークシートに記入させ、結果を報告させる。 ○約5分間の動画を提示し、本単元の学習を促す。雲の動きと雨が降るという前時の分析結果に注目させる。 ○雲画像から読み取らせ、話し合いの中で、気象情報の活用を促す。 ○雲画像とアメダスの降水量を分析し、天気の変化を予想させる。【知・技】 ○台風23号の時の雲画像とアメダスの降水量であることを知らせ、豊岡市では、どの日に、大雨警報と洪水警報が出されていたかを考えさせ、豊岡市の気象の変化に注目させる。 ○気象情報(雲量・降水量)の意味を確認し、気象情報から読み取れることを知らせる。 ○期で大雨警報が出た日には、洪水警報が出た日には、タイムラインシートに記入させ、全体で結果を話し合わせる。 ○雲画像やアメダスの降水量以外の気象情報の必要性に気づかせ、商業カメラ、ライブカメラ、キキル、防災マップなど最新の気象情報を活用させる。 ○台風は雲の動きの気象情報ではないが、台風の進路や雲がある地点で降水量が増えることに気づかせ、気象情報を活用し、予想することで調べることができることを知らせる。 ○今後どのように気象情報を活用していきたいかという視点で振り返りさせる。 ・天気の変化は、映像などの気象情報を用いて予想できるとがわかる。【知・技】
3 豊岡市では、どの日に大雨警報と洪水警報が出たのかを予想する。 ・台風は約5分間で豊岡市を通過するから ・アメダスの降水量が0mmを超えたら ・大雨が起きているから	
4 分析したことをまとめる。 ・台風は進路は降水量が多い。 ・雲があるところ、雨が降る。 ・台風は日本の南から近づいてくる。 ・気象情報を見れば調べることができる。 ・目で確かめることも大事(映像)	
5 本時の学習を振り返る。 ・いろいろな気象情報を用いて予想し、調べよう。	

▲理科指導案



▲ 5 年生授業の様子

(3) 気象予報士による講演会

メディアで活躍されている気象予報士・防災士の蓬萊大介さんをお迎えし、全校児童を対象に講演会を行った。画像・映像資料も交えた分かりやすい内容で、気象や気象災害についての知識を深めるとともに、防災に対する意識も高めることができた。



▲講演会の様子

(4) 「10. 20」メモリアル集会

毎年 10 月 20 日には、メモリアル集会を開き、当時の被害の状況やボランティア活動の様子を画像等で振り返るとともに、当時本校に勤務していた教員の話を聴く機会も設定している。また、本校でつくられた歌「ポプラの木のように」も歌い継いでいる。防災意識を高めるとともに、いただいた支援に対する感謝の気持ち、



▲メモリアル集会の様子

(5) チャリティー活動

「台風 23 号」当時、本校は、全国から多くの支援を受けた。そのことに対する感謝の気持ちを忘れないようにしようと、児童会を中心に、被災地支援の募金活動などを続けている。収益を寄付に充てるオリジナルTシャツの製作もその一つで、毎年、高学年児童は、そのTシャツを着用して「笑顔を届けよう」という思いをもって、運動会でダンスを披露している。



▲運動会でのダンスの様子

3. 成果と課題

神戸学院大学の船木伸江教授のご指導を受けながら、授業づくりを中心とした防災教育の取組を進めてきた。教授から「めざす児童の姿を明確に」との指摘を受け、低学年では、まず“自分”、中学年では“家族や地域”、高学年では“地域の自然や環境”へと目を向ける範囲が広がっていくように、「めざす児童の姿」を設定した（「各学年の授業内容の一覧」参照）。このことにより、これまで個々に取り組んでいた防災・減災授業を系統的に整理することができ、さらにカリキュラムの見直しと合わせて、教科横断的に新たな授業を仕組んでいくこともできた。また、授業と集会やチャリティー活動などの活動を計画的に関連させて取り組むことで、それぞれの学びに深まりが生まれることも再認識した。

「台風 23 号」の経験をいかした授業を仕組むことで、子どもたちは災害を「自分ごと」として、現実味をもって受け止めることができた。その上で、気象や自然災害についての授業や防災対策を考える学習をすることにより、より実践的に災害について考えられるようになった。

一方で、新興住宅地も多いため、地域や保護者の中にも全く当時のことを知らない方が増えている。家族や地域を巻き込んだ授業や取組においては、実情に合わせてさらなる工夫が必要なものもある。

4. 今後に向けて

本校独自の教材「プラポン」を通して、自分の地域に起こった災害の状況や当時の人々の様子に思いを馳せることからスタートした子どもたちが、地域に出かけて、自分で情報を集めながら、災害時に自分たちにできることを考える。そして、気象や自然環境についての科学的な知識を蓄積しながら、より実践的に行動できる力を身に付けていく…。こうした姿は、1年生から6年生までの系統的、継続的な取組により、育てていくことができるものである。

また、気象災害への対応においては、不断の見直しが求められる。常にそうした意識をもちつつ、防災・減災授業の工夫、改善を図っていくことが必要である。学校行事、防災訓練などとも関連付けながら、今後も実践を積み重ねていきたい。

気象災害に「備える」意識を高める防災教育

養父市立八鹿青溪中学校

1. はじめに

本校は但馬南部の山間地に位置し、八鹿中学校、青溪中学校が統合して12年目を迎える新しい中学校である。全校生232名9学級（特別支援学級2学級を含む）の小規模校で、校訓「貫徹」「慎独」「創造」のもと、生徒会活動や部活動を通して活発で明るく落ち着いた校風を創り上げてきた。

これまで本校の防災教育は、台風で被災された地域の方に話を聞く機会を持つなど、気象災害に関する取組も行っていたが、その中心は地震や火災に対する内容が多かった。

しかし近年、毎年のように広範囲にわたり台風や豪雨に見舞われ、全国各地で洪水などの水害や土砂災害による被害が多発している現状があり、本校も統合前の平成16年には旧青溪中校区が台風23号で大きな被害を受けたこともあるため、喫緊に気象災害を想定した取組の必要性を感じていた。

そのため、従来の防災教育をより一層充実させ、気象災害に対する取組として、災害に「備える」意識の向上を図ることを目標に、新たに今年度は以下のような取組を行った。

2. 具体的な取組

(1) 防災教育専門家の活用

気象災害を見据えて防災教育指導の方向性を明確にするために、兵庫県の気象災害に精通する防災教育専門家である兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科の阪本真由美教授の助言を受けながら取組を推進した。主に教職員の危機管理意識の向上と防災教育に関する知識や指導力の向上を図るための研修と、生徒の「自助」「共助」の力を向上させるための公開研究授業を実施した。

阪本教授から「身近な防災マップの活用とそれを用いた授業を通して、考え、発見させる学習を進めてみてはどうか。」と助言をいただき、次のような取組を行った。

①「マイハザードマップ」（避難行動判断フロー図）づくり（2年生）

生徒一人一人が気象災害時における自宅からの避難行動や必要な備蓄品などを考え、以下の手順で「マイハザードマップ」という名称で避難行動判断フロー図を作成した。

〈手順1〉養父市防災安全課による出前授業

- ・生徒それぞれの居住区の防災マップの見方や本市の気象災害の特性についての説明を聞いた。
- ・日頃から防災知識を高め、気象災害に備えることや避難行動の大切さについて学んだ。

〈手順2〉自宅周辺のフィールドワーク

- ・自宅周辺の危険箇所を歩いたり家族に聞いたりして調べ、タブレット端末で写真撮影を行った。
- ・各避難場所への経路や所要時間を調べた。

〈手順3〉家族との話し合い

- ・各家庭内での連絡手段や避難時の用品や備蓄しているものについて家族と話し合った。

〈手順4〉上記の内容をもとにマップ作成

- ・地域の防災上の特徴を説明しながら、各自の避難行動を発表し合った。
- ・用紙に避難行動フロー図や備えておきたい防災グッズなどを記入した。

以上の手順で作成した。作成後はお互いのマップの内容を意見交換した。それぞれの良いところや改善点を指摘し合い、完成させた。

その後、全員のマップを校内に掲示し、全校生に取組内容を周知した。



▲防災マップの説明



▲マイハザードマップ

②地区ごとに「マイ避難カード」作成（全校生）

近年、各自治体で作成を奨励している「マイ避難カード」を全校生が作成した。近くに住んでいる生徒同士が各地区の防災上の情報を共有しながら各自の避難カードを作成した。各居住区別に集まり、自分の避難行動を確認するとともに、地区内生徒同士の気象災害に備える防災上の行動情報を共有しようとする試みである。以下のように取組を進めた。

〈手順1〉居住区の「防災マップ」の確認

- ・全校生が各自のタブレット端末に自分の居住区の「防災マップ」をダウンロードし、事前に学習をしておいた。

〈手順2〉地区別

意見交換

- ・校区内全 57 地区ごとに集まり、地区長の司会進行のもとタブレット端末内の「防災マップ」を見ながら、各地区の災害特性や危険箇所、避難場所などの情報を共有し、意見交換を行った。



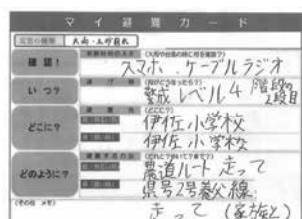
▲地区ごとの集まり

〈手順3〉「マイハザードマップ」の説明

- ・各地区の2年生が事前にそれぞれ作成した「マイハザードマップ」（前項目①のもの）の内容を各地区の生徒に説明した。防災マップに記されていない危険箇所や避難経路、避難所に行くかどうかの判断基準や備蓄品などについて説明した。

〈手順4〉「マイ避難カード」づくり

- ・2年生の説明を参考にして、自分の避難行動を書き込み、「マイ避難カード」を作成した。完成後は、各地区内で共有した。



▲マイ避難カード

〈手順5〉阪本真由美教授による生徒への講話

- ・「水害の危険性の認識の大切さ」「自宅周辺にある水路や河川の存在を意識すること」「非常災害時の『逃げどき』『逃げ場所』を考えることの大切さ」などについて話をしていた。

以上の取組を行った。同じ地区同士で情報を共有し合うことで、市が作成している防災マッ

プには現れない危険箇所や避難レベルを共有することができた。何よりも、授業の最後に生徒の活動の様子を実際に見

ていただいた阪本教授の話は、生徒の取組に沿った内容で、大変有意義であった。



▲専門家の講話（リモート）

(2) 気象予報士による「防災教育講演会」

11月に生徒と保護者、教職員を対象に防災教育講演会を開催した。兵庫ゆかりの気象予報士の蓬莱大介氏に依頼し、「夢を仕事にする！こうして僕は気象キャスターになった」「天気予報の活用と防災の備え」の2部構成で講演をしていただいた。講演会までに、全校生で蓬莱氏の著書2冊を読む取組を進めたり、気象予報士としての仕事の様子をまとめていただいたビデオレターを全校生で視聴したりして、気象に関する予備知識を高めて当日を迎えた。

講演の1部では、「気象予報士とは人の命に直面する仕事であり、天気予報が外れてしまうことよりも、天気予報の内容が伝わらないことの方が辛いということ」「ニュース番組の中の天気コーナーはせいぜい3～4分であるが、そのために当日の天気図の解析や番組の構成内容に約4時間かけていること」「お天気キャスターとして『自分が絶対に助けるんだ』と心に唱えていること」など、気象予報士としての心構えなどについて話をしていただいた。

2部では異常気象多発時代に私たちができることや、クイズを交えながら1日の天気予報の回数や降水確率の意味、注意報や警報・台風情報の見方などについて、本市の気候的特徴を踏まえながら説明をしていただいた。講演の最後には災害への心構えとして、地域の過去の災害を知り、ハザードマップでリスクを知るなど、経験をしたことのない災害も想像することが大切だと話された。生徒が身近に感じる影響力のある人だけに、気象災害に



▲蓬莱大介氏の講演会

「備える」意識の向上と正しい知識を得ることに強くつながることができた。

気象予報士の仕事に対して、人の命につながる重大な責任を背負って向き合っていることが伝わってきました。近年、地球温暖化を要因とした様々な気象災害が起こっていることを学ぶことができ、とても有意義な時間になりました。今後は気候の変化に対し備えていけるよう、日々の生活により注意して過ごしたいです。毎日の天気予報をチェックするだけでなく、台風や豪雨災害の情報にも気をつけていきたいです。日頃から「念のため」を徹底し、身近な気象情報を意識し、行動に移していくことで、災害による被害を少しでも減らしていきたいです。

▲講演会生徒（３年生）感想

(3) 防災啓発ポスターの作成と地域への発信

「共助」の意識高揚をより図るため、生徒会が中心となり「防災啓発ポスター」を作成した。

〈手順１〉スローガンの決定

- ・「備える」をキーワードに３年生でスローガンを考え、「備えて守る 大切な命」「明るい未来のため 中学生も力になります！」とした。

〈手順２〉ポスター募集

- ・夏休みの美術科の課題で災害に関するポスターを募集した。
- ・その中から作品を選び、防災啓発ポスターに使用した。

〈手順３〉ポスター掲示依頼

- ・完成したポスターを各地区に生徒が持参し、地区の公民館などに掲示していただくように依頼した。

本校創立以来、毎年９月の第１日曜日に行われる養父市一斉避難訓練（地域の防災訓練）に全校生徒が参加できる体制を取り、できる限り参加していることもあり、快く掲示することを承諾していただいた。



▲防災啓発ポスター

3. 成果と課題

年間を通し著名な外部の専門家と連携し指導・助言を得ることで、多くの成果が得られた。

(1) 成果

①生徒の「自助」の力の高まり

専門家とともに避難行動などを考える学習を通して、「災害に対する備え」「自らの安全確保」などの自助の力が高まった。生徒たちは日常的に空を見上げ、雲の形や風向き、生物の行動などから天気を予測するなど、主体的に気象の変化に関わっている様子も見られるようになった。

②教職員や保護者の防災意識の向上

教職員の防災に対する意識や指導力が高まった。避難訓練や防災給食などの防災に関する行事だけでなく、防災に関する学びを各教科や領域と関連付けることを通して、系統的に指導できるようになった。著名なお天気キャスターの講演会は保護者の関心が高く、保護者の防災教育に関する意識の向上にもつながった。

③他者との「共助」の意識の高まり

「マイハザードマップ」などの作成、「防災啓発ポスター」の地域への発信の過程で、家庭や地域と連携を深めることができ、異集団や地域への関与などにより、共助の意識が高まった。

(2) 課題

防災教育をより効果的に行うには、校種間や学年間のつながりをさらに考慮して、小中連携による系統だった年間計画に改善し、定着させる必要がある。また、防災教育の専門家を招くなどし、教科や領域と防災教育との関連に関する研修を今後も続けていく必要がある。さらに、家庭や地域との連携をより深める方法を考えるなど、取り組まなければならない課題も多い。

4. 今後に向けて

防災教育は「究極的には命を守ることを学ぶこと」「生きる力を学ぶこと」である。気象災害は身近な災害で事前に予知・予想できることが多く、「備える」意識が高いほど自分や他者の命を守ることにつながり、防災教育の意義が実感しやすい。そのため、気象災害に対する内容を深めていくことが、防災教育全体の高まりにつながると考える。今後も地震や火災に対する内容はしっかりと押さえつつも、気象災害へ「備える」ことに取り組んでいきたい。

4 資 料

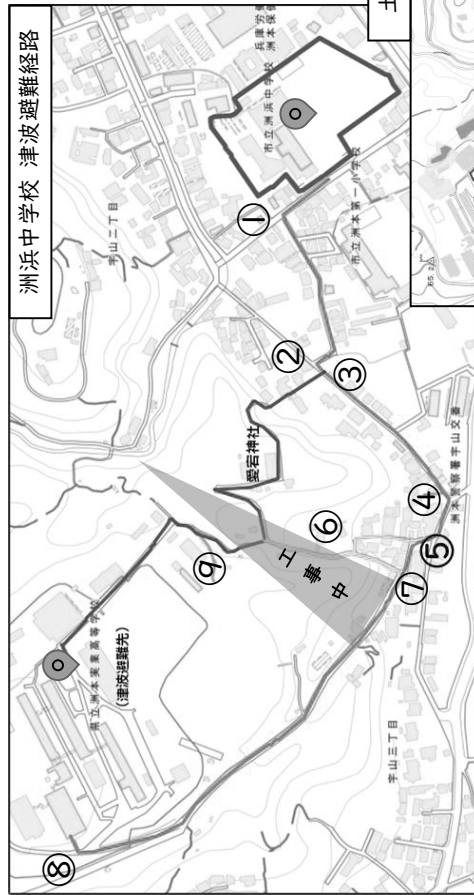


県立西宮今津高等学校

【洲浜中学校津波避難マップ】

みんなが避難！地域の学校として、地域住民の方々も共に避難されるように声掛けを！！

R4.1.28



(洲本港周辺) 津波到達時間 約58分、津波水位 約2.77m

【洲浜中学校】

・海抜 2m

・避難場所

一次避難: 校舎 4 階

二次避難: 洲本実業高校

避難距離 900m (愛宕神社経由の場合 950m)

避難時間 15分 (愛宕神社経由の場合 15分)

・避難上の注意

・土砂災害ハザードマップ上の土砂災害特別警戒区域、土砂災害警戒区域にあたる場所を避難することになるので、必ず先遣隊を送って、ルートの確認をしてください。また、先遣隊の方は、携帯電話を持って、確認へ行ってください。

・②～④は、車が1台通れるだけの狭い道幅ですので、気を付けて避難しましょう。

・堀がある所は堀から離れて避難し、側溝や溝に気を付けて避難しましょう。

・住宅地を避難するため、住民の方々にも避難をされるよう、声掛けをしながら避難しましょう。

①学校を出て山側へ向かう	①鉄工所を過ぎて左折	①～②道なりに直進	②道路標識を目印に左折
③愛宕神社を経由する場合(②から10m直進し、右折)		③～④山側の民家に高い堀	③～④山側に細い溝
④宇山交番を山側へ右折	④宇山交番を50m直進	⑤「平岡農園」の看板を右折	⑤道なりに坂を上がる
⑤ミラーを目印に道に入る	⑦看板(愛宕神社)を目印に右折	⑤⑥と⑦の合流地点	⑨現在工事中の為、通行止め

⑦～⑧ 高校の駐輪場の歩道が一時狭くなるので注意



⑧洲本実業高校

第 2 学年 防災教育指導案

1. 題 材 地震がおきたら

2. 題材目標
- ①地震が発生すると慌ててしまう。落ち着いて行動するためにどこにいたら何に気をつけるかを日頃から考える習慣をつけさせる。
 - ②地震の「そなえ」について考えることで、子どもが災害と防災に関心を持ち、家族に働きかけるきっかけを与える。

3. 指導計画 (全2時間)

時	教 材	学 習 活 動
1	「ゆれたら どう みをまもりますか？」	○地震が起きるとどうなるか考える。 ・家が倒れると下敷きになる。 ・家が大丈夫でも家具が倒れる下敷きになる。 ○地震が起きた時どう身を守るか考える。 ・揺れたらどう身を守りますか。(教室) (18 頁) ・揺れたらどう身を守りますか。(家の中) (19 頁) ・揺れたらどう身を守りますか。(外) (20 頁) ○避難所について知る。 4 つの危ない 「落ちてくるから危ない」「倒れてくるから危ない」 「移動してくるから危ない」「割れるから危ない」
2 本時	「そなえ」	○防災バッグに何を入れておけばよいか考える。 ・個人で防災バッグに必要なもののランキングを考え、1 位の理由も考える。 ○これら以外で自分や家族のために是非持っていきたいものを考える。 (例) ・赤ちゃんがいるから紙おむつ ・おじいちゃんの薬 ○様々なケースを交流しながら家族で話し合う大切さを知る。

4. 準 備 物
- ・ワークシート
 - ・防災用品カード（掲示用）
 - ・電子黒板
 - ・タブレット
 - ・防災グッズ

5. 本時の目標

- ・防災バッグには、地震が起きたとき、どの家族にも必要なものと、家族によっては特別に入れておきたいものがあることを理解させる。

6. 本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 前時の振り返りをする。	・「4つの危ない」について思い出させる。 4つの危ない 「落ちてくるから危ない」「倒れてくるから危ない」 「移動してくるから危ない」「割れるから危ない」
じしんのときに何をもってにげますか？	
2. <u>家族の防災バッグに入れておきたいランキング</u> を考える。 水・非常食・救急箱・万能ナイフ・ラジオ 歯ブラシ・懐中電灯・ラップ・電池・タオル ・持っていきたい順に並べる。（タブレット活用） ・各自の考えを発表し、交流する。	・防災用品の多様な用途を知らせる。 ・選択肢にあるものはすべて大切なものだというもおさえる。 ・なぜそれが1位なのか自分の考えを持たせる。 ・それぞれの発表に対し、良さを知らせる。
自分や家族のために、ほかにもって行きたいものはありますか？	
3. これら以外で自分が <u>家族のために、持っていきたいもの</u> を考える。 ・プリントに記入する。 (予想されるもの) 赤ちゃんがいるから紙おむつ おじいちゃんの薬 ・発表をする。 ○各家庭、個々人によって特別に入れておきたいものが違うことに気付く。 ○家族のことを考えることが大切だと気付く。 ・災害が起こる前から、準備しておくことが大切だと知る。 ・週末課題で<u>各家庭の避難場所と防災バッグの確認</u>をしておくことを知る。	・家族を思い浮かべ「我がこと」として考えさせる。 ・多くて2個、理由も考えさせる。 ・可能な範囲でもって行く理由を補足する。 ・家族のことを考えられたことを評価する。 ・担任の家にある防災バッグの中身を見せる。
4. 振り返りをする。 ・学習したことの感想を書く。	・防災バッグや「そなえ」について家族で話し合っておくことの大切さを伝える。

* 波線部分：「我がこと」として考えさせる場面

第4学年 総合的な学習の時間指導案

1 単元名 わが家の備えを考えよう（防災教育）

2 日時 令和3年11月10日（水）5校時

3 単元の目標

【防災教育の目標】

- ・地域社会に関心を持ち、災害時の命を守る工夫について知り、災害発生時には、大人の指示を聞き、状況に応じて適切な行動がとれるようにする。
- ・日頃から進んで家族や友達、周囲の人と関わり合うことで、有事の際には協力して助け合うことができるようにする。

【総合的な学習の時間の目標】

- ・地域の避難場所や安全な場所を知り、自分の家の備え方を進んで考えようとする。（主体的に学習に取り組む態度）
- ・学習した内容を相手に分かりやすい方法で伝えることができる。（思考力・判断力・表現力）
- ・地域の地理的特徴を理解したり、避難経路を知ったりすることができる。（知識・技能）

4 指導にあたって

本単元では、自然災害に対する危機意識を高め、自分自身で考え、命を守る行動が取れるような力を養わせたい。そのために、いつ起こるか分からない災害に備え、自分たちの住んでいる町で安全な場所はどこなのか、危険な場所はどこなのかを調べ、防災マップの作成を行っていく。そして防災マップをふまえて、「わが家の備え」というテーマで考えたことをまとめていく事が最終目標である。防災マップ作りを通して、何が必要なのか、何ができるのかを常に意識させ、自分たちがいざという時に一番安全な方法を判断し、行動できる力を身につけていく。

本学級の児童は、3年生の時に町探検を行い、校区マップを作った。自分の家や公共施設、お店などを書き入れている。校区内の場所はだいたい把握しているが、自分の家の周辺の安全な場所や危険な場所の把握はまだできていない。今回は3年生の時に作ったマップに新たに安全な場所や危険な場所を書き入れ、自分たちの住んでいる地域を今まで以上に身近なものだと感じられるようにした。自分の地区の避難場所や避難経路を児童に質問をしたところ、知らないと答えた者がほとんどだった。さらに自宅で非常用持ちだし袋を準備している児童はいなかった。このように、災害を遠い存在だと感じていると思われる。

指導にあたって、事前に社会科では「自然災害から人々を守る」という単元で自然災害の水害について学習し、国語科では「もしものときにそなえよう」という単元で、自然災害の被害と備えについて調べ学習を行い、各々が関心のある自然災害を選択し、文章に書き表した「防災ブック」を作成した。これらの学習を経て、「自分の命は自分で守る」という意識を持ち、避難の際に必要な情報は何かを考える力を身につけさせるよう取り組んだ。その都度主として考えさせることは、「わが家」ということである。家庭状況を配慮したり、土地状況を考えたり、自分の事に照らして考えさせるようにする。自然災害の危険が身近にあることを感じ、自分の命は自分で守っていけるようにしたい。

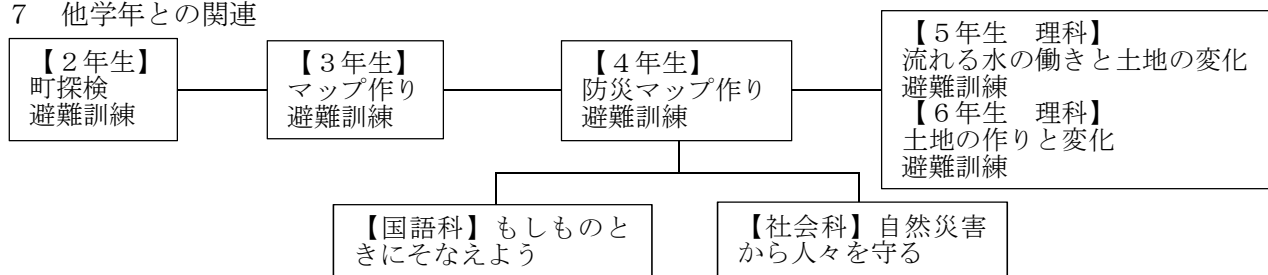
5 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・災害時の、安全な避難場所や経路、危険な場所を知ることができる。 〈ワークシート〉	・非常時に必要な物が何かを考え、まとめることができる。 ・学習した内容を相手に分かりやすくまとめることができる。 〈成果物〉	・自分の家の災害への備え方を考えている。 ・他者との意見交流の中で自分自身の考えを相手に伝えることができる。 〈ワークシート〉

6 指導計画

次	時	学習活動
1	1、2	・町探検（3年生）で作ったマップを使い、自分の家の周りや学校の周りの建物を確認する。 ・単元のめあてを確認し、学習計画を立てる。
	3、4	・ハザードマップと照らし合わせながら、町探検で作ったマップに危険な場所を書き入れ、防災マップを完成させる。
2	5（本時）	・命を守るためのわが家のルールを考える。
3	6	・非常持ち出し袋の中身を考える。
4	7～9	・学習したことをE-reportにまとめていく。 テーマ「わが家の備え」 ①避難場所 ②避難の仕方 ③非常持ち出し袋の中身 ④まとめ
	10	・まとめたものを交流し、互いの良さを伝え合う。

7 他学年との関連



8 本時の学習（本時 5/10）

（1）目標 家族全員が安全に避難するためのわが家のルールを考えることができる。

（2）展開

学習活動	指導上の留意点と評価（○）とUD視点（※）	個別の配慮
1 前時の振り返りをし、本時のめあてを確認する。	・避難場所の確認。 ・自宅から避難場所までの所要時間の確認。 【設定】大雨 【被害予想】土砂災害、洪水、水害 自分と家族の命を守るひなんの仕方を考えよう。	A児：自分ができることが何かを考えさせる。
2 わが家のルールを1つ考える。	・命を守るためにとる行動を1つ考える。 ○自分の家の家庭状況や土地状況を踏まえて考えているか。〈ワークシート〉 ○今までに他教科で学習した備えも配慮して考えられているか。〈ワークシート〉	
3 交流する。	・交流後、意見を付け加えたり、変えたりできるように自分の意見と比べながら聞くようにする。（グループ→全体） ・グループで話し合い、それぞれの考えを伝え合う。（対話的な活動） ・みんなに自分の考えを伝える。（深める活動） ○自分の意見に付け加えや変更をしているかどうか。〈ワークシート〉	
4 振り返りをする。	・交流を終えて、新しく得た情報を確認し、次時への活動へつなげる。 ○ワークシートの振り返りに新しく得たことを書き入れているか。〈ワークシート〉	

第6学年「総合的な学習の時間」学習指導案

1. 単元名 未来に目を向けよう ～減災力を高めよう～

2. 単元設定の理由

東日本大震災から10年が経過したが、東日本大震災の発生後も熊本地震や大阪南部地震など各地で大規模な地震が発生している。本校のある姫路市においても今後、南海トラフ地震や山崎断層帯地震などの発生が危惧されており、姫路市内における最大震度は、それぞれ震度6強、震度7と予測されている。また、近年、集中豪雨や台風などによる浸水被害や土砂災害なども増加しているが、本校は土砂災害警戒区域に立地している。児童が、これからの人生において一度は経験するであろう大地震や自然災害などについての危機意識を高め、自らの命を守るための判断力や行動力を身につけていくことが重要であると考えます。

本学級の児童は、5年生の総合的な学習の時間においても地震、津波、感染症など様々な災害について学習し、防災意識を高め、発災後も自分たちで様々な課題を乗り越えようと防災グッズを作成したり、災害後の心の状態や様子についての対処方法などについて学んだりしてきている。また、副読本「明日に生きる」を用いて阪神淡路大震災についての知識を得たり、学校全体で行う避難訓練などにも真剣に参加したりして、防災意識が高まっていると考えられる。しかし、「実際に大きな揺れを経験したことがないので実感がない。」「映像や本では見たことがあるが、防災について行動したり、誰かに伝えたりする自信がない。」と、自分事としての意識が希薄な児童も見られる。獲得した知識を生かし、自らの命を守るための判断力や行動力を身につけるだけでなく、身につけた知識を共有し、より多くの人に広げていこうと活動したり、人を思いやる気持ちをもち、様々な人と交流したりしながら社会に参画しようとする態度を育みたい。

理科「大地のつくりと変化」の学習では、地震や火山の起こるメカニズムを押さえ、火山活動や地震が多い日本で、大地の活動による被害を減らすために、過去の記録や経験を生かして、災害に備えることの重要性を共有した。その後、実際に校区内を調査して通学路や校区内にある危険箇所を探し、災害時に想定される事象などをハザードマップにまとめた。また、地域内にある自衛隊を訪問し、災害時における自衛隊の救援活動について学んだり、実際に身近にあるものを活用しての応急措置の仕方や担架作りなどの活動をした。岩手県大船渡市立猪川小学校との交流を通して、自然災害や防災・減災についての理解をさらに深め、助け合いの精神の大切さなどを共有していきたい。自分たちの学習してきた内容をまとめることを通して、主に「減災」「備える」意識を高めさせたい。そして、猪川小学校からの取組を知ることを通して、「助け合い」「支え合い」の大切さを理解し、発災後どのように復興へのまちづくりに取り組んできたのか児童たちに考えさせたい。

3. 指導計画

未来に目を向けよう ～減災力を高めよう～

第一次 未来に目をむけよう

○地震や土砂災害の記録や今後の予測を知り、課題意識をもとう。
・新聞記事を読む。NHK 番組の視聴。
☆現状から課題意識をもつことができたか。

他の教科や学校
行事との関連

理科
「大地のつくり
と変化」

課
題
設
定

情報 収集 整理・ 分析	第二次 ハザードマップをつくろう	道徳 明日に生きるより 「二つの大地震」 「兵庫県の気象と 水害」 「危険な空間を減 らそう」
	○自分たちの住む校区、通学路に危険はないか調べよう。 ・校区内の調査。 ・調査してきたことを模造紙にまとめ、ハザードマップを作る。 ○防災クロスロードで話し合おう。 ☆校区内の危険個所を知り、想定される事象について考えをもつことができたか。	
	第三次 自衛隊で体験学習をしよう	学校行事 避難訓練 シェイクアウト訓練 兵庫県津波一斉避 難訓練
	○自衛隊の役割や災害時の活動について知ろう。 ○実際に体験活動に挑戦しよう。 ・ロープの活用方法、身近なもので応急措置、止血法、タンカづくり ☆いざいざとき、自分たちにもできることを知ることができたか。	
	第四次 猪川小学校と防災学習交流をしよう	国語 「わたしたちに できること」 「イーハトーブ の夢」
	○地域や学校のことを紹介しよう。 ・1学期の史跡探検などをふりかえり地域の良さをまとめる。 ○増位小の防災や減災の取組について猪川小学校に発表しよう。 ○猪川小学校の取組について教えてもらおう。 ○交流で学んだことをたくさんの人に発信しよう。 ・これまでの交流をふりかえり、まとめる。 ☆人を思いやる気持ちの大切さに気づき、これまでの交流で分かったことを自分事としてとらえようとしているか。	
ま と め ・ 表 現	第五次 活動をふり返ろう	総合 「未来に目を向 けよう～ SDGs に取り 組もう」
	○これまでの活動をふりかえり、自分自身についた力を考えよう。 ・減災ワークショップの開催 ☆防災・減災意識の大切さを伝えようと行動しているか。	

【第四次 猪川小学校との交流計画】

1 時 10/21 5 校時	地域紹介・学校紹介 (つかむ・見通す)	・それぞれの地域や学校、クラスの紹介を行う。 ・地域の特色や学校紹介など ・今後の学習内容について知る。
2 時 10/28 5 校時	増位小学校での防災学習について の発表 (調べる・関わる・伝える)	・減災について学習したことをまとめ猪川小学校へ伝える。 ・猪川小学校や地域での取組について質問をさせていただく。
3 時 11/11 5 校時	猪川小学校での防災学習や地 域の取組について教えていた だく。 (調べる・関わる・伝える)	・猪川小学校や地域での取組について聞く ・それぞれの思いや特色について考える。
4 時 11/18 5 校時	本時 ふり返り (まとめる・ふり返る)	・今までの交流や学習をふり返って意見交流をする。

5. 単元の評価規準

評価の観点	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう人間性
評価規準	- 災害の起きるメカニズムや過去の災害の規模や被害について理解することができる。 - シェイクアウト訓練や津波訓練などの避難訓練に進んで参加することができる。	- 災害の怖さについて理解するとともに、過去の記録や体験を生かして災害に備えようとすることができる。 - 校区内で調べたことをもとに考えたことをまとめ、友達と協力してハザードマップを作ることができる。	- 減災の取組を自分の課題としてとらえ、取り組もうとしている。 - 交流を通して、復興への取組において大切なことを見つけ出そうとしている。 - 学習でわかったことを広めようと、意欲的に活動している。

6. 本時の目標

以下の2つの視点をふまえて、自分や家族、身の回りの人々を守るのに役立つ知識を身につけ、身につけた知識を共有し、より多くの人に広げていこうと活動することができる。

- 過去の自然災害の教訓を生かし、自らの命を守るための判断力や行動力を身につける。
- 猪川小学校の児童と交流しながら、減災の意識を高め、人を思いやる気持ちをもつ。

(学びに向かう力・人間性)

7. 本時の展開 (第四次 第4時)

主な学習活動	○指導上の留意点 ●多面的・多角的な視点 (☆評価)
1. 前時までの学習をふり返り、分かったことや感じたことを共有する。	○それぞれの学校の防災学習や取組をふり返り、分かったことや感じたことを発表し、共有する。 ○事前にワークシートにまとめてさせておき、全員が学習に参加できるようにする。 ●どのような取組に力を入れているのかをふり返ることで、過去の災害経験や地域の特性を意識させる。
交流で学んだことをたくさんの人に発信しよう	
2. 自分たちが、伝えたいことや広めたいことを考える。 個人→全体	○ふり返りから共有したことをもとに、防災や減災意識を高めていくために一番大切なものや必要だと思うことを考え、ワークシートに記入させる。 ○発表について、互いに質問させることで、重要性や意義について考えを深めさせる。 ☆どのような点を大切にして、考えたのかを明確に伝えることができる。 (学びに向かう力・人間性) ●児童から出た意見をグルーピングしてまとめることで、防災や減災についていろいろな角度から取り組むことができることに気づかせる。
3. 本時の活動をふり返る。	○話し合いをふり返って、これからがんばりたいことを書かせるとともに、自分たちの役割について意識させる。☆防災や減災の意識を自分ごととして考えることができる。 (学びに向かう力・人間性)

8. 本時の評価基準 話し合いでの発言内容とふり返りの記述をもとに評価を行う。

評価基準	A評価	B評価
	災害に備えることの大切さだけでなく防災後人々の助け合いの大切さの両方に気づき、分かったことを広めようと思えることができる。	災害の怖さ、過去の経験を生かして防災や減災の取組について取り組んでいる仲間がいることを知り、学習したことを広めようと思えることができる。

第1学年総合的な学習の時間（防災）指導案

1 日時 令和4年 1月14日（金曜日）5校時

2 学年学級および場所 1年5組（32名） 1年5組教室

3 第1学年防災学習の目標

- ・今までの日本で起きた災害の映像資料を見たりハザードマップを読みとったりすることで、実際に大地震が起きた時に自分の命を守るためにどのように行動すべきか理解することができる。

〔 知識及び技能 〕

- ・講演会で聞いた内容やアドバイスをされたことを活用しながら、自分自身の考えをまとめたり深めたりすることができる。

〔 思考力・判断力・表現力等 〕

- ・現在住んでいる明石、また将来、生活地域がどこであっても、大地震が起きる可能性が十分にあることを知り、わがこととして防災に対する学習に探究的な活動として、自ら意志を持って社会に参画しようとしている。

〔 学びに向かう力・人間性等 〕

4 第1学年防災学習について

（1）生徒観

実際に近年、兵庫県内でも台風による水害や地震などの災害は起きているものの、幸いなことに中学1年生は災害を経験していない。そのため災害大国日本に住んでいながら、災害に対する具体的なイメージをほとんど持っていない生徒も数多くいた。防災に対しては必要である認識はあるものの、結局いつ、何をすればよいのかなどの考えには至っていなかった。

（2）教材観

身近に起きる可能性の高い地震を取り上げることで、大震災が起きた時に自分がとるべき行動について考えることができるものである。マスコミで取り上げられることのある東日本大震災や熊本地震、また1995年に明石でも被害のあった阪神淡路大震災の資料も多数存在することからも、自分自身のこととして考えることが容易な教材であると考えられる。

（3）指導観

大災害を経験したことがないことから、イメージを持たせやすくするために、いくつもある災害の中から地震を取り上げる。実際に映像やハザードマップなどの資料を見せ、明石市内でも災害が起きる可能性が十分に起こり得ることを知らせ、地震が起きた時にまず自分の命を守るために、とるべき行動を考えさせる。その後、復旧までの必要日数や備蓄品などを知り、実物も見ることなどを通して、実際に災害が起きた時、中学生として主体的にどう行動できるのかについて考えさせていく。

5 指導計画（全8時間）

第1次（3時間）

第1時 日本で起こり得る災害について知ろう

第2時 大震災と明石のハザードマップを読み取ろう

第3時 「地震が起きた」その時どうする？ ～直後から数分間の行動を考える～

第2次（5時間）

第1時 避難に必要な防災グッズと避難所にあるものについて知ろう

～明石市総合安全対策室の講話

第2時 大久保北中学校にある備蓄品を探しに行こう

第3時 北中が避難所になった際に何ができるか考える①

第4時 北中が避難所になった際に何ができるか考える②

第5時 北中が避難所になった際に何ができるか考える③・・・・・・本時

6 本時の目標

舞子高校環境防災科の生徒より受けたアドバイスを基に、班内でまとめたことをクラス内で発表する。

発表を聞き、新たに気づいたことや考えが深まったこと、実践できることをまとめる。

7 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	『中学生としてできること』について、班でまとめたことを発表しよう		
	1 課題について話し合う。 ・本時の流れを確認し、発表会の準備をする。	○ロイロノートを立ち上げ、発表の準備をさせる ・前時作成の資料の読み合わせをし、発表の手順を確認。	課題解決のため、学習の見通しを立てられているか 〔思・判・表〕
展開 35分	2 各班でまとめた内容を伝える。 ・一班あたり4分発表＋質問1分	○ロイロノート上で作成したシンキングツールをプロジェクターで映し出したものをタブレット上で拡大、または指示棒で指し示しながら発表を進めさせる。 ・発表の手順としては、「いつ」「どこで」「なぜ必要か（理由付け、関連付け）」の順で、さらに舞子高校の生徒にアドバイスを受けて考えが変化したことがあれば、それについても説明を加えさせる。（前時ワークシート）①が終われば②、③と繰り返し、最後はまとめを述べさせる。	多面的に避難所運営について考えたり聞いたりしているか 〔主体的〕
まとめ 10分	3 学習を振り返る。 ・他の班の発表を聞き、考えがより深まったことなどを記入する。	○他の班の発表を聞き、考えが深まったり考えの変化があったりしたこと（比較付け・分類付け）などを書かせ、発表させる。 ○防災学習全般を通しての感じたこと、これから学びたいことなどを発表する。	新たな気づき、次の具体的活動の見通しを書けているか 〔思・判・表〕 〔主体的〕

8 準備物

ワークシート（前時の分と本時の分）、生徒用タブレット（班長のみ）

教師用タブレット、プロジェクター

令和3年度
学校安全（防災）総合支援事業実践事例集

令和4年3月
兵庫県教育委員会事務局教育企画課
〒650-8567
神戸市中央区下山手通 5-10-1
TEL 078-362-3214



養父市立八鹿青溪中学校

表紙写真

- 【左上】 県立舞子高等学校
- 【左下】 朝来市立竹田小学校
- 【右上】 神河町立寺前小学校
- 【右下】 丹波篠山市立西紀北小学校

